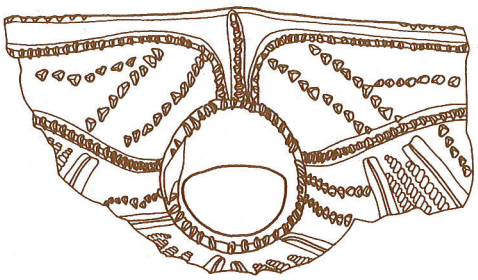
永福寺山遺跡

EIFUKUJIYAMA　SITE

－昭和40・41年発掘調査報告書－



1997.3

盛　岡　市　教　育　委　員　会

永福寺山遺跡

－昭和40・41年発掘調査報告書－

1997.3

盛　岡　市　教　育　委　員　会

巻頭写真１．　永福寺山遺跡出土弥生土器

巻頭写真２．　永福寺山遺跡出土続縄文土器

巻頭写真３．　永福寺山遺跡出土土師器

巻頭写真４．　永福寺山遺跡出土アメリカ式石鏃・勾玉・管玉

序　言

盛岡市には古くは１万年以上も昔の縄文時代草創期の遺跡から、新しくは岩手公園の盛岡城跡に代表される江戸時代の遺跡まで、約500ケ所の遺跡が確認されています。これらの遺跡の大半は地下に埋もれているもので、「埋蔵文化財」として扱われていますが、昭和40年代以降の急激な市街化や大規模開発の波に押され、破壊・消滅してしまったものも数多くあります。

当市において文化財保護の立場から発掘調査事業が本格的に行われる以前の昭和40・41年に、岩手大学と盛岡市公民館（現盛岡市中央公民館）が共同で中津川地区の永福寺山遺跡において学術調査を行いました。その結果、現在でも盛岡周辺では発掘例が少ない弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構・遺物が発見され、調査当時より該期の貴重な資料と評価を受けておりました。遺跡はその調査直後に宅地造成のため大部分が消滅しておりますが、今回の報告書刊行により遺跡の価値が再認識され、盛岡の歴史を語る上で貴重な資料になるものと思われます。

最後になりましたが、当時岩手大学教授として発掘調査を御指導下さった故草間俊一先生の御冥福をお祈りするとともに、調査資料の収集に御協力下さった関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成９年３月

盛岡市教育委員会

教育長　佐々木　初朗

例　　言

1　本書は、盛岡市山岸に所在する永福寺山遺跡において、昭和40・41年に行われた発掘調査の報告書である。

2　当遺跡の名称については、過去に「永福寺裏山遺跡」の名称も用いられたが、本書では市登録の「永福寺山遺跡」の名称を用いるものとする。

3　本書は、岩手大学、盛岡市中央公民館、岩手県立博物館等に保管されていた発掘調査資料、採集資料をもとに作成しており、所在不明の資料については過去の報告等を参考とした。

4　本書の作成にあたって用いた資料の現状は本文中に記した。

5　本書は、主に弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構・遺物についての報告であり、縄文時代の遺構・遺物についての詳細は別途報告予定である。

6　遺物の図版は、土器は1/2スケール、石器・石製品は2/3スケール、鉄製品は1/2スケールとした。

7　本書の編集は、盛岡市教育委員会文化課　津嶋知弘、神原雄一郎、黒須靖之、武田良夫、八木光則、似内啓邦、室野秀文、菊池与志和、藤岡光男、三浦陽一、太田代由美子、佐々木真史が協議して行い、津嶋、神原、黒須、武田が執筆を担当した。

8　資料の借用については、岩手県立博物館に御協力を賜った。また、報告書作成にあたり、下記の方々より御助言、御協力を賜った。記して謝意を表する。
（五十音順、敬称略）
青木誠、荒井隆、荒井世志紀、井上雅孝、日下和寿、佐藤嘉広、高瀬克範、高橋信雄、辻秀人、富永勝也、美幌博物館、藤沢敦、福田裕二、宮宏明、村田大

整理作業補助員（五十音順）
芦垣直樹、天沼芳子、泉山紀代子、内山陽子、鹿野奈保美、鎌田アエ子、北村尚江、小松愛子、佐々木泰子、下平喜代美、庄司民子、白澤和子、高橋ツヤ、竹花栄子、中島京子、平野淑子、藤田友子、藤澤幸子、藤原政人、藤原美知子、三浦栄美、三上良子、水野彰子、村山伊津子、吉田貴美

目　次

巻頭写真

序　言

例　言

目　次

挿図目次

表目次

写真目次

Ⅰ　遺跡の環境

1　遺跡の位置と周辺の地形・・・・・・　1

2　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・　2

Ⅱ　調査の経過

1　調査に至る経緯・・・・・・・・・・　4

2　調査の概要・・・・・・・・・・・・　4

Ⅲ　資料の概要

1　永福寺山遺跡をめぐる研究史・・・・　7

2　資料の整理・・・・・・・・・・・・　9

Ⅳ　検出された遺構・遺物

1　遺構の検出状況・・・・・・・・・・・１２

2　縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・１２

3　古墳時代の遺構・・・・・・・・・・・１２

4　土壙墓出土遺物・・・・・・・・・・・２０

5　トレンチ出土遺物・・・・・・・・・・２９

6　採集遺物・・・・・・・・・・・・・・３２

Ⅴ　盛岡周辺の関連遺跡・・・・・・・・・・・・４３

Ⅵ　遺構・遺物の検討

1　土壙墓・・・・・・・・・・・・・・・６０

2　土器・・・・・・・・・・・・・・・・６２

3　アメリカ式石鏃・・・・・・・・・・・７２

4　勾玉・管玉・・・・・・・・・・・・・７３

5　鉄製品・・・・・・・・・・・・・・・７３

Ⅶ　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・７５

引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・７７

報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・８１

写真図版

挿図目次

第１図　永福寺山遺跡の位置・・・・・・・・・・・　２
第２図　地形分類と周辺の遺跡分布・・・・・・・・　３
第３図　永福寺山遺跡全体図・・・・・・・・・・・　５
第４図　第１次～３次調査区全体図・・・・・・・・１３
第５図　土壙墓１～５平面図・・・・・・・・・・・１４
第６図　土壙墓１～５断面図・・・・・・・・・・・１５
第７図　土壙墓１出土土器・・・・・・・・・・・・１７
第８図　土壙墓２・３出土土器・・・・・・・・・・１７
第９図　土壙墓４出土土器・・・・・・・・・・・・１７
第10図　土壙墓５出土土器（１）・・・・・・・・・１８
第11図　土壙墓５出土土器（２）・・・・・・・・・１９
第12図　土壙墓５出土土器（３）・・・・・・・・・２０
第13図　土壙墓６出土土器・・・・・・・・・・・・２０
第14図　土壙墓７出土土器（１）・・・・・・・・・２１
第15図　土壙墓７出土土器（２）・・・・・・・・・２２
第16図　トレンチ出土土器（１）・・・・・・・・・２３
第17図　トレンチ出土土器（２）・・・・・・・・・２４
第18図　トレンチ出土土器（３）・・・・・・・・・２５
第19図　トレンチ出土土器（４）・・・・・・・・・２６
第20図　トレンチ出土土器（５）・・・・・・・・・２７
第21図　トレンチ出土土器（６）・・・・・・・・・２８
第22図　トレンチ出土土器（７）・・・・・・・・・２９
第23図　採集土器（１）・・・・・・・・・・・・・３０
第24図　採集土器（２）・・・・・・・・・・・・・３１
第25図　アメリカ式石鏃・・・・・・・・・・・・・３２
第26図　鉄鎌・勾玉・管玉・・・・・・・・・・・・３２
第27図　盛岡周辺の関連遺跡分布図・・・・・・・・４９
第28図　前九年遺跡・大新町遺跡出土遺物・・・・・５０
第29図　宿田遺跡・柿ノ木平遺跡・大塚遺跡・
　　黒石野遺跡出土遺物・・５１
第30図　台太郎遺跡・新茶屋遺跡出土遺物・・・・・５２
第31図　八卦遺跡出土遺物・・・・・・・・・・・・５３
第32図　銭神沢遺跡採集遺物・・・・・・・・・・・５４
第33図　一本松遺跡採集遺物（１）・・・・・・・・５５
第34図　一本松遺跡採集遺物（２）・・・・・・・・５６
第35図　一本松遺跡採集遺物（３）・・・・・・・・５７
第36図　一本松遺跡採集遺物（４）・・・・・・・・５８
第37図　月見山遺跡･武道遺跡･芋田遺跡採集遺物・・５９

表 目 次

第１表　土壙墓出土土器点数表・・・・・・・・・・１６
第２表　トレンチ出土土器点数表・・・・・・・・・１６
第３表　土壙墓出土土器観察表（１）・・・・・・・３３
第４表　土壙墓出土土器観察表（２）・・・・・・・３４
第５表　トレンチ出土土器観察表（１）・・・・・・３５
第６表　トレンチ出土土器観察表（２）・・・・・・３６
第７表　トレンチ出土土器観察表（３）・・・・・・３７
第８表　トレンチ出土土器観察表（４）・・・・・・３８
第９表　トレンチ出土土器観察表（５）・・・・・・３９
第10表　トレンチ出土土器観察表（６）・・・・・・４０
第11表　採集土器観察表（１）・・・・・・・・・・・４１
第12表　採集土器観察表（２）・・・・・・・・・・・４２

写真目次

巻頭写真１　永福寺山遺跡出土弥生土器
巻頭写真２　永福寺山遺跡出土続縄文土器
巻頭写真３　永福寺山遺跡出土土師器
巻頭写真４　永福寺山遺跡出土アメリカ式石鏃・
　　勾玉・管玉
写真１　永福寺山遺跡土壙墓（１）
写真２　永福寺山遺跡土壙墓（２）
写真３　永福寺山遺跡出土続縄文土器（１）
写真４　永福寺山遺跡出土続縄文土器（２）
写真５　永福寺山遺跡出土鉄鎌
写真６　永福寺山遺跡出土鉄鎌（Ｘ線）
写真７　銭神沢遺跡採集土器
写真８　一本松遺跡採集土器

Ⅰ　遺　跡　の　環　境

1．遺跡の位置と周辺の地形

永福寺山遺跡は、盛岡市街地の東部、山岸三丁目（当時は山岸字中村）・下米内字寺並地内に所在する（第１図）。

地質構造

盛岡市周辺は地質構造上、北上帯の主要な境界である早池峰構造帯の西縁部にあり、北部北上帯と南部北上帯の双方を含む地域となっている。北部北上帯に属する山地では中起伏山地の外山山地、低起伏山地の玉山山地が位置し、南部北上帯に属する山地では、中起伏山地と小起伏山地の双方で構成されている手代森山地が位置する。その両者にはさまれた早池峰構造帯に属する山地は先第三系からなる北上山地の西縁部にあたり、北上川の近くにまで迫っており、高森山(626m)を中心とする高森山山地と、朝島山(607m)を中心とする朝島山山地の中起伏山地、さらにその西につづく大日向山山地、岩山(341m)や大森山(381m)を含む建石山山地などの小起伏山地および四十四田丘陵で構成されている。

雫石川以北

また盛岡市街および周辺地の平坦部の地形は大きくは３区分され、ひとつは北上川以西雫石川以北で、岩手山の火山活動に伴う火砕流堆積物が火山灰砂台地（滝沢台地）を形成し、沖積平野はあまり発達していない地域である。縄文時代草創期・早期を主体とした大新町遺跡、縄文時代中期を主体とした大館町遺跡などが所在し、平安時代の集落跡も複合している。

雫石川以南

またひとつは北上川以西雫石川以南で、雫石川の影響による沖積段丘（砂礫段丘Ⅲ）が広がっており、奈良・平安時代の集落跡が各所にみられ、９世紀初頭に志波城が造営された地域である。

北上川以東

さらにひとつは北上川以東でその支流となる中津川・簗川流域に発達した低位段丘（砂礫段丘Ⅲ）・中位段丘（砂礫段丘Ⅱ）の地域がある。両流域は建石山山地を開析しながら西流し、山地を出た地点から沖積段丘を形成して北上川と合流する。したがって一部を除き上～中位段丘（渋民火山灰層上部以上をのせる砂礫段丘Ⅰと分レ火山灰層をのせる砂礫段丘Ⅱ）があまり発達せず、小起伏山地・丘陵地Ⅱが低位段丘・氾濫平野と接している（第２図）。

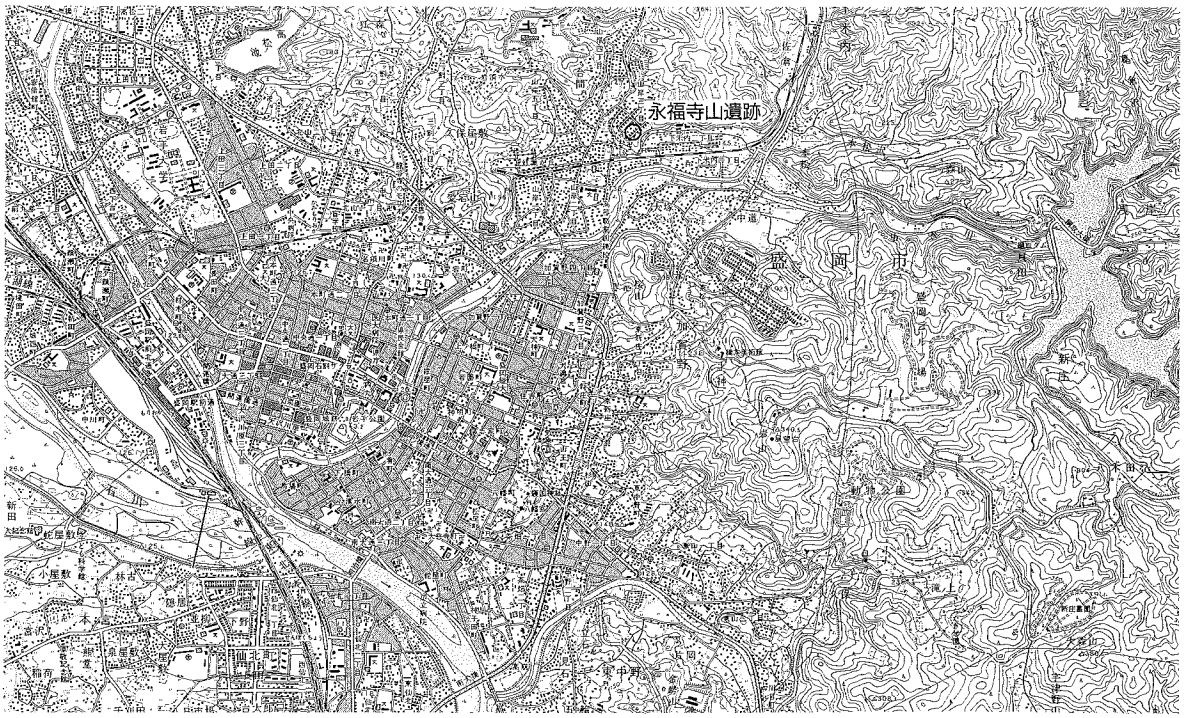
立　地

本遺跡は、大日向山地南西端の、中津川にはり出した舌状丘陵の頂部付近に立地し、南を流れる中津川からの直線距離は約200m、比高差は約30mある。遺跡の所在する丘の南裾に真言宗永福寺があり、丘の通称である「永福寺山」はこれに由来する。この寺は藩政時代に盛岡藩主の崇敬があつかった寺院として著名である。発掘調査当時、遺跡はほぼ全面が畑地となっていたが、北側の浅い谷にはリンゴが植栽され、そこに続く斜面は牧草地として利用されていた。遺跡周辺も畑地と水田が続く郊外の風景が展開していたが、昭和40年代から市街化が進行し、現在遺跡とその周辺の大半が住宅地に変貌している。

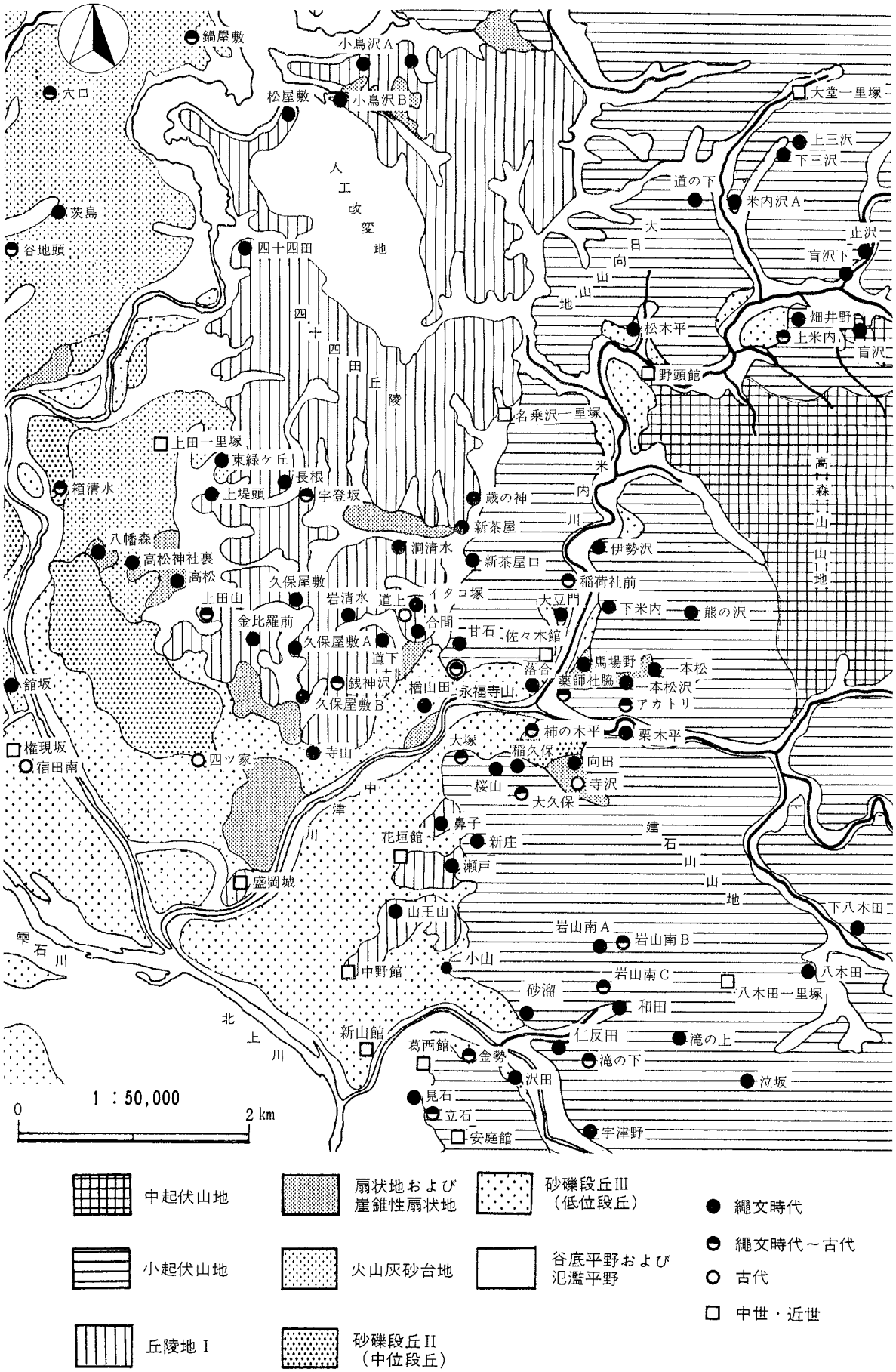
2．周辺の遺跡

中津川流域　遺跡の所在する中津川流域では、特に支流の米内川との合流点付近に多くの遺跡が分布している。合流点の北側には落合遺跡があり、縄文時代後期の配石遺構、縄文時代後期・晩期の土壙群、中世の集落跡などが調査されている。また南側には柿ノ木平遺跡があり、縄文時代中期大木8b式期の集落跡、平安時代の集落跡などが確認されている。また、柿ノ木平遺跡の南には縄文時代中期の集落跡と考えられる稲久保遺跡が存在したが、住宅団地造成によりほとんど未調査のまま消滅している。合流点から米内川を少し遡ると稲荷社前遺跡、大豆門遺跡、熊ノ沢遺跡などがあり、熊ノ沢遺跡からは縄文時代早期・前期の土器が、稲荷社前遺跡からは縄文時代中期・後期、弥生時代の土器が出土している。また米内川上流域においても畑井野遺跡、上米内遺跡など多くの遺跡が分布し、上米内遺跡では縄文時代中期大木8b式期の集落跡が確認されている。中津川上流域においては、八木田Ⅰ～Ⅴ遺跡が大規模に調査され、縄文時代前期の大集落と縄文時代中期～晩期、平安時代の集落が確認されている。また、大葛遺跡では縄文時代後期の小集落が調査されている。

四十四田丘陵南端部　遺跡の西方、四十四田丘陵南端部にも多くの遺跡が分布し、歳ノ神遺跡、新茶屋遺跡からは縄文時代早期の土器が出土し、銭神沢遺跡からは縄文時代晩期、弥生時代後期の土器が出土している。



第１図　永福寺山遺跡の位置（1:50,000）



第2図　地形分類と周辺の遺跡分布

Ⅱ 調 査 の 経 過

1．調査に至る経緯

昭和38年春、岩手大学教授草間俊一と盛岡市公民館吉田義昭が盛岡市オミ坂遺跡の発掘調査を行い、弥生土器が出土したことが報道された。当時、永福寺山において遺物を採集していた武田良夫は、その土器片が同じく弥生土器に該当するのではないかと考え、採集した土器片を盛岡市公民館に持参した。吉田は、そのうちの何点かが北海道で出土する後北式土器であると考え、慶応大学教授江坂輝弥に拓影を送ったところ、その土器が確かに後北式土器であること、北海道に分布の中心を持ち、青森県の下北半島などに数カ所出土した遺跡のあることが報告され、岩手県でも県北の軽米に出土例があることがわかった。

試掘調査　昭和38年秋、吉田義昭、武田良夫、名久井文明は、永福寺山の頂上部分で遺物が最も濃密に分布している地点において、２ｍ×２ｍの範囲の試掘調査を行った。表土は薄く、30cm程で地山に達したが、楕円形をした土壙墓が１基検出され、その北側上面には、小形の壺形土器があたかも供えられるように置かれていた。この土器は現在、所在不明であるが、大きさは野球ボール大で全面がヘラミガキされ、内外面が赤彩されていた。底部には穿孔があり、口縁部が欠損しているものの、ほぼ完形に近かった。

その後、江坂教授の勧めもあり、岩手大学と盛岡市公民館による発掘調査が計画され、昭和40年春から実施のはこびとなった。そのため、武田は何度も遺跡を訪れ表面採集を行い、発掘調査地点の選定を行った。丘の長軸に沿って、東西のほぼ全面に終末期の弥生土器が散布していたが、頂上付近40ｍ×30ｍの範囲には後北式土器と古式土師器の破片が発見された。散布の多いこの地点からは、アメリカ式石鏃５点、管玉２点、鎌らしい鉄片も採集することができた。

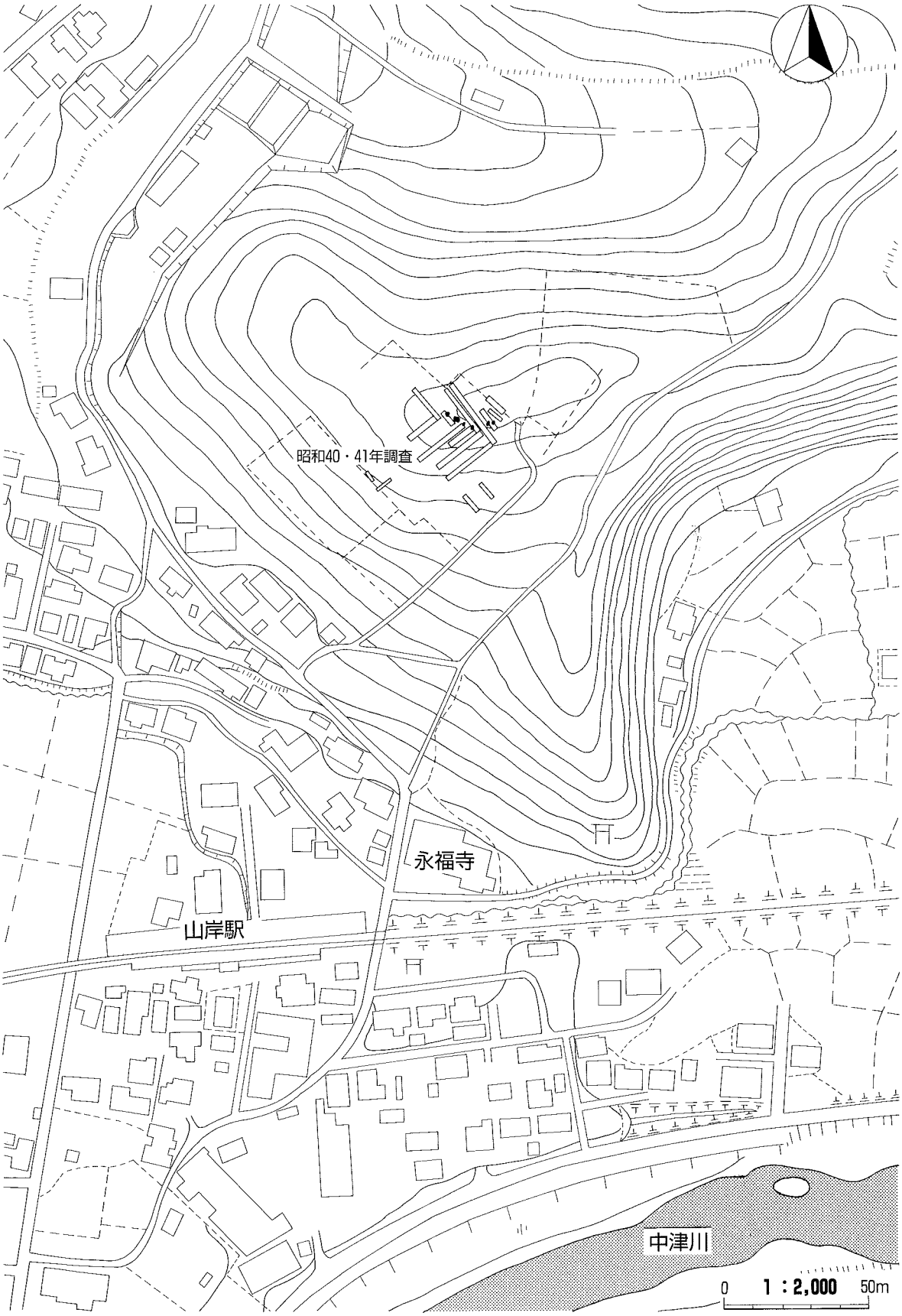
2．調査の概要

調査期日

第１次調査　昭和40年 3月29日 ～ 4月 2日
第２次調査　昭和40年11月 5日 ～ 11月10日
第３次調査　昭和41年 4月 6日 ～ 4月11日

調査方法

１次調査では３本、第２次調査では２本、第３次調査では11本のトレンチを設定し、遺構の検出された部分は拡張して調査を行った。調査面積は合計約400㎡である。



第３図　永福寺山遺跡全体図（昭和40年頃）

調査体制

発掘調査担当者

岩手大学教授　草間俊一　　盛岡市公民館　吉田義昭　　盛岡郵便局　武田良夫

発掘調査参加者

岩手大学学生　相内康子　荒武文　石丸史子　泉恵子　及川和子　小野寺章　川又正則
久保泰　熊谷久　熊坂覚　小坂重勝　近藤君代　斎藤哲　菅原弘子
中村知代　花石郁子　原総子　人首育子　山本誠

盛岡市公民館　吉田達夫

調査経過

1次調査　第1次調査は、遺物の散布の多い頂上付近にトレンチを入れることから開始された。層位の状況は、耕作により撹乱された表土(Ⅰ層)が10～20cmあり、腐食土を含み黒色を呈していた。その下位に、黒褐色で下層ほど黄色を増す層（Ⅱ層）があり、10～20cmで地山に達していた。

発掘調査開始後間もなく、勾玉が出土し、試掘調査ですでに確認されていた土壙墓4（2号竪穴）に並ぶように土壙墓5（3号竪穴）が検出され、北側の端が縄文時代の陥し穴と重複していた。当時は陥し穴という遺構の認識がまだなく、遺物の出土もなかったことから不明なままであった。そして土壙墓3（1号竪穴東）の底面に近い部分からは刀子が出土し、土壙墓1（6号竪穴）の北側の小ピットからも鉄鎌が出土した。

2・3次調査　第2次調査では、第1次調査地点付近あるいはトレンチの延長線の遺構の有無について、また第3次調査ではそれ以前の調査で対象とされなった地点についても調査を行った。出土遺物の量から言えば、回を重ねるごとに減少していった。

調査後の経過

発掘調査は、当時の新聞やテレビで報じられ、盛岡市公民館では遺物の洗浄・接合が行われた。その後、草間俊一・吉田義昭は各機会をとらえて発掘成果を発表し、昭和41年10月に北上市で開催された日本考古学協会大会では会場で出土遺物が展示され、研究者の注目を集めることとなった。そのため報告書の刊行が計画されたものの、発掘記録の多くが所在不明となり、また外部の展示に貸し出された遺物が行方不明となるなどの事態が起こったため、報告書作成は挫折してしまった。

そして、第3次調査の4年後の昭和45年、発掘調査地点を含む遺跡の大部分は住宅団地の造成により大きく削平され、消滅した。

Ⅲ　資　料　の　概　要

1．永福寺山遺跡をめぐる研究史

永福寺山遺跡の採集資料が紹介されたのは、吉田義昭(1963)によるものが最初である。吉田は、武田良夫とともに採集した土器片13点の拓本を図示し、江坂輝弥により「後北C式土器」であることが確認されたと報告している。また、それらの土器と同時に採集された細い撚糸文のある土器片については「当地方に広く分布発見されている続縄文土器の破片」と述べている。

この報文がきっかけとなり、1965・66年(昭和40・41年)に3次にわたる発掘調査が行われたが、その発掘成果・出土遺物については、様々に公表されることとなった。

吉田義昭・武田良夫(1970)は、後北式土器の出土した盛岡周辺の遺跡を紹介する中で、永福寺山遺跡の発掘成果を「数箇の墓拡状の竪穴とその内外から江別Ⅲ式土器、五領式に併行すると思われる古式土師器、勾玉、鉄鎌、その他天王山系の弥生式土器、縄文中期の大木式土器の破片が出土した」と述べ、後北式土器の拓本2点を図示している。そして、出土した「江別Ⅲ式」土器片と「五領式に比定すべき」土師器片については、「伴出している」としながらも「副葬品か否かまたはセットの関係などが判明していない」ことから「発掘に立合った者達」は「その相互の年代に大きな差はないだろうと考えている」と慎重に表現している。

その後、吉田義昭(盛岡市中央公民館1972)は永福寺山遺跡について、後北式土器片10点、鉄器3点、土壙墓1基の写真を掲載し、土師器編年表において岩手の「永福寺山Ⅰ」を宮城の「塩釜」、南関東の「五領・前野町式」と、「永福寺山Ⅱ」を「南小泉」、「和泉式」と並行させているが、その詳細は説明されていない。

武田良夫(1978)は、永福寺山遺跡採集の弥生土器の拓本25点を図示し、「交互刺突文、沈線文、撚糸文が特徴的な天王山式土器に後続する型式のもの」で、「アメリカ型石鏃を伴出する」と述べている。また発掘調査の成果については、後北式土器9点、土師器7点の写真を掲載し、「後北式土器と土師器」が「天王山系土器とは散布範囲を異にしていた」と述べ、土師器については「頚部に刻目ある隆帯をめぐらした甕形土器」を「塩釜式」に、「器面を篦磨きされた」ものを「南小泉式」に比定し、「後北式がどれに伴うものか、或いは前後するものか断定するまでにはいたらなかった」と述べている。

また高橋昭治・武田良夫(1982)は、岩手県内における後北式土器出土遺跡の集成と考察の中で永福寺山遺跡の発掘成果にふれ、検出された土壙墓について底面の長軸方向の両端に浅い柱穴があったこと、また周囲にも柱穴らしいものを持つものがあることから、「屋根状構造物」を想定している。また、遺物については後北式土器2点、古式土師器2点の拓本を図示し、土師器については、

「第一類　円形浮文、棒状浮文をもつ壷形土器、刷毛目痕の明瞭で頚部に隆帯のある甕形土器」

「第二類　篦磨きの痕の顕著な壷、高坏」
「第三類　一、二類の中間的なもの」
の３つに分類し、「第一類」を「五領式に並行」、「第二類」を「和泉式に並行」とした。そして「棒状浮文のある壷形土器と、頸部に隆帯ある甕形土器」の隆帯がともに「断面三角形を呈しその上に刻目を施している」ことから「後北式土器に施された手法そのままであり、土師器が製作される際、その手法を借用したもの」と考え、「後北C2式土器は五領式の土師器に並行する可能性が高い」と述べている。

以上のような、当時の発掘調査関係者によって公表されたもの以外にも、発掘資料が掲載されている文献がある。

伊東信雄(1974)は、永福寺山遺跡出土のものとして「複合口縁で、その下端に円文貼付けを有する」土師器１点、「後北Ｃ式土器」８点の写真を掲載し、「その出土状態をすなおに解釈するならば赤穴式土器と後北Ｃ式土器とこの土師器とは同時存在であって、四世紀の土師器が盛岡地方にはいって来た時には、その地方ではまだ赤穴式土器が使用されており、しかも同時に北方からは後北Ｃ式がはいって来たと認めざるを得ない」と述べている。

新田賢(水沢市教委1978)は、永福寺山遺跡出土の土師器42点、鉄器３点、勾玉１点の写真を掲載し、高山遺跡出土土師器との比較検討を行っているが、「掲載した写真図版の多くは保管場所が不明であり、実際に検討することができなかった」と述べている。そして草間俊一より「古式土師器と後北Ｃ式などの共伴関係を示す資料はなく、むしろ、遺構として確認された土壙跡に後北Ｃ式が伴なう」との教示を受けたことを述べている。

国生尚(1978)は、永福寺山遺跡について、草間俊一提供の古式土師器33点、後北式土器13点、勾玉１点、鉄器３点の写真を掲載している。

また高橋信雄(1982)は、永福寺山遺跡出土土器の再検討を行う中で、後北式土器と土師器の共伴関係について「遺物の出土状況からして共伴する可能性は強いと考える」と積極的に評価し、土師器については「塩釜式」と「南小泉Ⅱ式」の「２つの時期に分けて考えるべき」と指摘している。また「後北C2式」の土器群については断面観察から、Ａタイプ（断面が黒色で表面のみ黄褐色、胎土は粗で薄手）とＢタイプ（断面が褐色から赤褐色、胎土は密で土師器と酷似し、厚手）の２つに分類し、「施文法でも若干の相違が認められる」としている。そして永福寺山遺跡でのみ両タイプが混在し、土師器も２つの時期があることから、それらが対応関係にある可能性を指摘し、Ａ、Ｂタイプを時間差とする考えを示した。

中村五郎(1982)は、「永福寺山出土の江別式土器にみられる隆帯と古式土師器の棒状浮文」について「稜のある断面三角の隆帯をつけ、さらに細い刻目を加える」という「技法の共通点」を指摘し、「江別式」と「塩釜式」が並行し、実年代は４世紀という考えを示している。またその後、永福寺山遺跡出土の円形浮文のある壷については「畿内地方の庄内式」並行としている(中村1992)。

以上のように、永福寺山遺跡の発掘成果・出土遺物は多くの研究者によって公表・紹介され、重要な指摘がなされてきたものの、正式な報告書が刊行されなかったこともあり、その実態があまり明確でないまま評価されてきたと言えよう。近年では、増加しつつある該期の遺物・遺構の調査例を基に、土器群の編年関係を検討する考察が提示されてきている。

斎藤邦雄(1993)は、岩手県内出土の後北式土器、終末期弥生土器の検討を行う中で、「古式土師器との関連を否定するものではないが、現状では当地に見られる後北C2･D式土器は在地の弥生終末期土器群との関わりの中で存在し、その関係はむしろ古式土師器との関連よりも強いと考えられる」と述べ、「天王山式相当段階」と「後北C2･D式前半段階」、「赤穴式相当段階」と「後北C2･D式後半段階」をそれぞれ並行関係におく考えを示している。

上野秀一(1992)は、北海道内出土の終末期弥生土器と東北地方出土の終末期弥生土器とを比較検討し、道内の層位的共伴関係から、「天王山式期」に後続する「福島県の編年でいう踏瀬大山式から十王台式に対応する時期」に「後北C2-D式前半期」が並行するという考えを示している。

また、石井淳(1994)は、永福寺山遺跡の出土例からは「後北式土器と古式土師器との明瞭な共伴関係を証明することは不可能」と述べ、その他の研究成果から、後北C2-D式土器、「天王山式土器群」最終末、庄内式から布留式、を並行関係としている。

しかし、現在においても永福寺山遺跡の発掘成果が貴重なものであることは確かであり、現状での資料の提示と検討により、終末期弥生土器・後北式土器・古式土師器の出土状況や共伴関係、検出された土壙墓の実態などを明確にすることは、該期研究に必要不可欠と考えられる。

2．資料の整理

昭和40年・41年に行われた永福寺山遺跡の発掘調査における出土遺物、図面、記録、および表面採集遺物は、盛岡市中央公民館、岩手県立博物館、岩手大学、武田良夫により分散して保管されていた。今回の報告書作成にあたり可能な限り資料収集を行ったものの、発掘調査から約30年を経過していることから所在不明の遺物や図面がある上、当時の図面・記録も十分でなく不明な点も多いことから、遺物・図面・記録の現状、資料の問題点と報告の方針を明確にする必要があると考えた。

遺物の現状

永福寺山遺跡の発掘調査における出土遺物、表面採集遺物については、盛岡市中央公民館と岩手県立博物館に保管されており、それぞれの内訳は次のとおりである。

盛岡市中央公民館：１・２次調査出土遺物、３次調査出土遺物、武田良夫採集遺物

岩手県立博物館　：３次調査出土遺物、武田良夫採集遺物

しかし、これらの資料を整理した結果、過去に永福寺山遺跡出土として写真等で公表されている遺物の一部が所在不明となっていることが確認された。特に円形浮文のある複合口縁の壷の口縁部破片、Ｓ字状口縁をもつ台付甕の口縁部破片、口頸部を欠く小形丸底鉢の半完形品、刀子など（伊東1974,水沢市教委1978,国生1978）重要な遺物の所在が不明となっている。

今回整理することができた発掘資料の状態は次のとおりであった。

盛岡市中央公民館保管遺物　－　土器・石器：水洗・注記済（一部注記なし）

鉄器：保存処理済，注記なし

勾玉：水洗済，注記なし

岩手県立博物館保管遺物　－　土器・石器：水洗・注記済

これらの遺物について、その注記の内容を検討すると次のようにまとめられる。

盛岡市中央公民館保管１・２次調査出土遺物

- 発掘調査の月日を示すと考えられる数字
- 現場でのトレンチ・グリッド名を示すと考えられるアルファベットと数字
- 現場での遺構名・番号を示すと考えられる記述
- 遺物包含層の層位を示すと考えられるローマ数字

盛岡市中央公民館保管３次調査出土遺物

- 発掘調査の年月日を示すと考えられる数字
- 現場でのトレンチ・グリッド名を示すと考えられるアルファベットと数字
- 現場での遺構名と考えられる記述

岩手県立博物館保管３次調査出土遺物

- 遺跡の略号と調査年を示すと考えられる記述
- 現場でのトレンチ・グリッド名を示すと考えられるアルファベットと数字
- 現場での遺構名を示すと考えられる記述

図面・記録の現状

当時の図面・記録については武田良夫によって保管されており、内訳は次のとおりである。

図面

① １～３次調査のトレンチ・遺構配置の平面図（方眼紙，平板測量，1/100）２枚

② １・２次調査検出の土壙墓４基と陥し穴の平面図（方眼紙,平板測量,1/20）１枚

③ １・２次調査検出の土壙墓６基と陥し穴の断面図（方眼紙，1/20）５枚

④ １・２次調査のトレンチの土層断面図（方眼紙，1/20）２枚

⑤ ３次調査検出のフラスコ形土壙・焼土・柱穴群の平面図（方眼紙,平板測量,1/20）１枚

⑥ ３次調査Ａトレンチ検出のフラスコ形土壙の土層断面図（方眼紙，1/20）１枚

⑦ ３次調査Ｂトレンチの土層断面図（方眼紙，1/100）１枚

⑧ ３次調査Ｃトレンチ検出の土壙の断面図（方眼紙，1/20）１枚

⑨ ３次調査Ｄトレンチ検出の竪穴住居跡の断面図（方眼紙，1/20）３枚

⑩ ３次調査Ｆトレンチ検出の土壙・柱穴の断面図（方眼紙，1/20）３枚

⑪ ３次調査Ｇトレンチの土層断面図（方眼紙，1/20）１枚

⑫ ①をトレース・色分けした平面図（トレーシングペーパー，1/100）１枚

⑬ ②をトレースした平面図（トレーシングペーパー，1/20）１枚

⑭ ３次調査Ａトレンチ検出フラスコ形土壙のトレースした平面図・土層断面図（トレーシングペーパー，1/20）１枚

調査日誌：昭和41年4月6日，8日，9日，10日，11日の計5日分（第３次調査）

写真：土壙墓を撮影したモノクロ写真プリント２枚（どの土壙墓かは不明）

資料の問題点と報告の方針

以上のような状況の資料を整理するにあたり、以下の点が問題となった。

① １・２次調査検出の土壙墓のうち、「４号竪穴」「５号竪穴」の1/20平面図が存在しない。

② １・２次調査検出の土壙墓・陥し穴、３次調査検出のフラスコ形土壙以外の遺構については、1/20原図が断片的もしくは全く存在せず、詳細が不明である。

③ 盛岡市中央公民館保管遺物について、その注記から１次、２次調査出土遺物を区分することが難しい。

④ １・２次調査における現場でのトレンチ名が平面図の平板測量原図に記入されておらず、遺物の注記とトレンチ配置図の対照が難しい。

これらの問題点を受け、今回の報告書作成は以下の方針で行うこととした。

① 調査区全体図は1/100平板測量原図・トレース図をもとに作成するが、当時の図の修正は極力行わない。

② 遺構図は1/20平面図と断面図がある程度照合できる「１～３号竪穴」、「６号竪穴」についてのみ作成するが、当時の図の修正は極力行わない。その他については図面が断片的で詳細も不明なため遺構図の作成は行わない。

③ 平面図における１・２次調査のトレンチ名は「１・２次トレンチ１」～「１・２次トレンチ５」の名称を新たに与え、遺物の注記との関係は検討課題とする。

④ 平面図における３次調査のトレンチ名は「３次Ａトレンチ」～「３次Ｋトレンチ」の名称を用い、遺物の注記と対応するものとする。

⑤ 土壙墓については、「土壙墓１～７」の名称を新たに与え、当時の名称とは以下のように対応するものとする。

土壙墓１＝６号竪穴，土壙墓２＝１号竪穴西半，土壙墓３＝１号竪穴東半，
土壙墓４＝２号竪穴，土壙墓５＝３号竪穴，土壙墓６＝４号竪穴，土壙墓７＝５号竪穴

⑥ 縄文時代の遺構については「陥し穴」「フラスコ形土壙」「竪穴住居跡」「焼土」の名称を新たに与え、遺物の注記との対応は検討課題とする。

Ⅳ　検出された遺構・遺物

１．遺構の検出状況

３次にわたる発掘調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡１棟、陥し穴１基、フラスコ形土壙１基、古墳時代の土壙墓７基、時期不明の土壙９基、焼土２基が検出された（第４図）。ほとんどの遺構は丘陵の頂部付近に集中し、斜面部からは少量の土器が出土したのみである。また、丘陵頂部一帯には弥生時代終末期の土器片も散布していたが、発掘調査では該期の明確な遺構は検出されなかった。

２．縄文時代の遺構と遺物

永福寺山遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡や土壙、焼土遺構が検出されていることが全体図からわかるものの、土壙墓５に切られる陥し穴と３次Ａトレンチで検出されたフラスコ形土壙の平面図・断面図以外は詳細が不明である。

遺物については、ほぼ調査区全域で縄文時代早期から後期までの遺物が出土している。縄文時代中期の大木８ａ式が主体的であるが、少量ながら縄文時代早期の日計式、後期の門前式もみられる。

３．古墳時代の遺構

永福寺山遺跡からは、古墳時代の土壙墓が計７基検出されている（第５・６図）。土壙墓の平面形は北東－南西方向に長軸線をもつ楕円形で、丘陵頂部南縁に北西方向から南東方向へ並列し、土壙墓２、３が重複している。なお、以下の事実報告は当時の図面をもとに観察・計測等を行っており、土壙墓の長軸線は底面長軸両端に掘り込まれる一対のピット中央を通す線とした。

土壙墓１（６号竪穴）

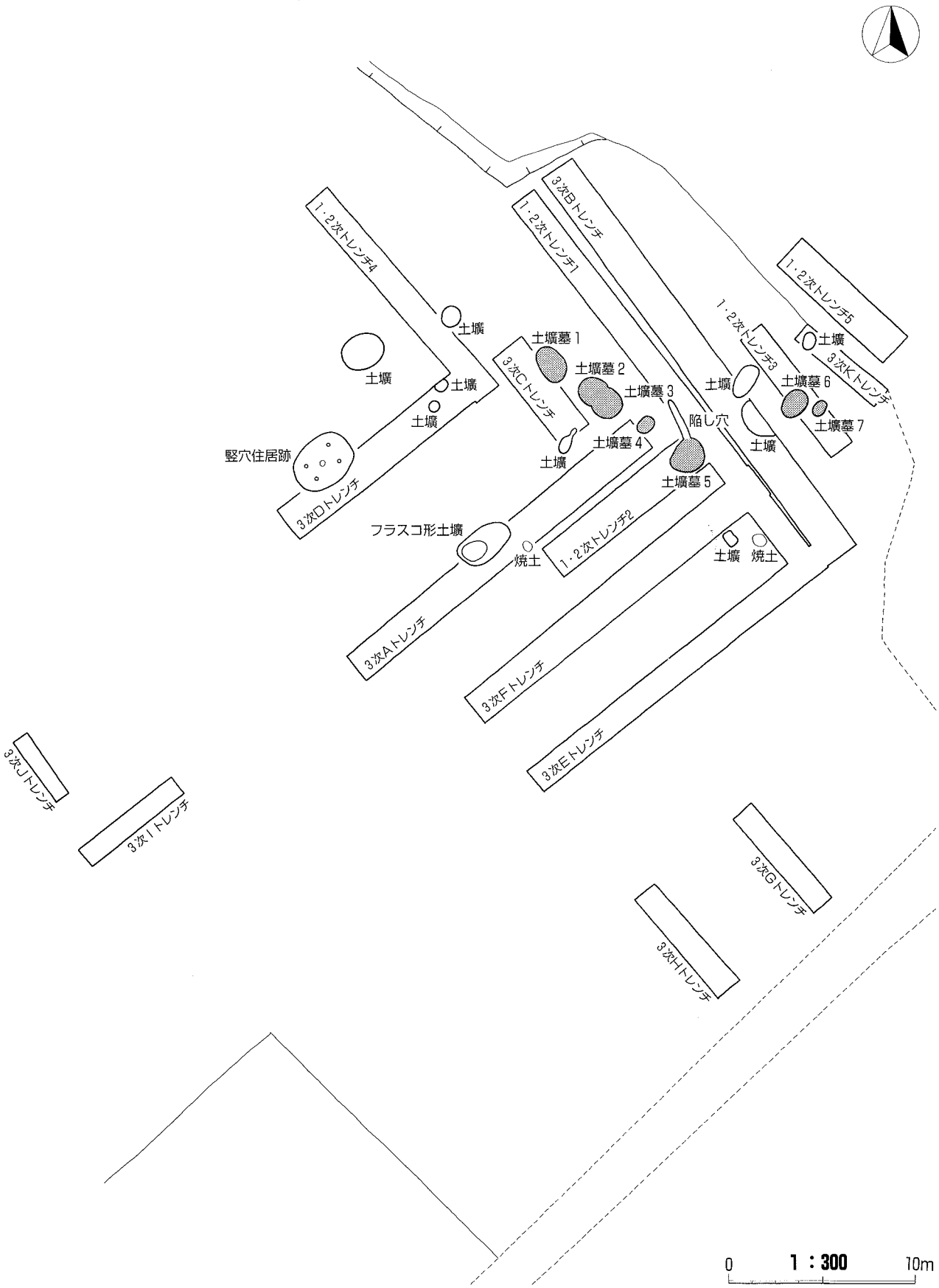
位置　土壙墓２の東側に隣接する　　**平面形**　楕円形

規模　長軸上端1.42m・下端1.39m、短軸上端1.14m・下端1.04m、深さ0.81m　　**長軸線の傾き**　N18°E

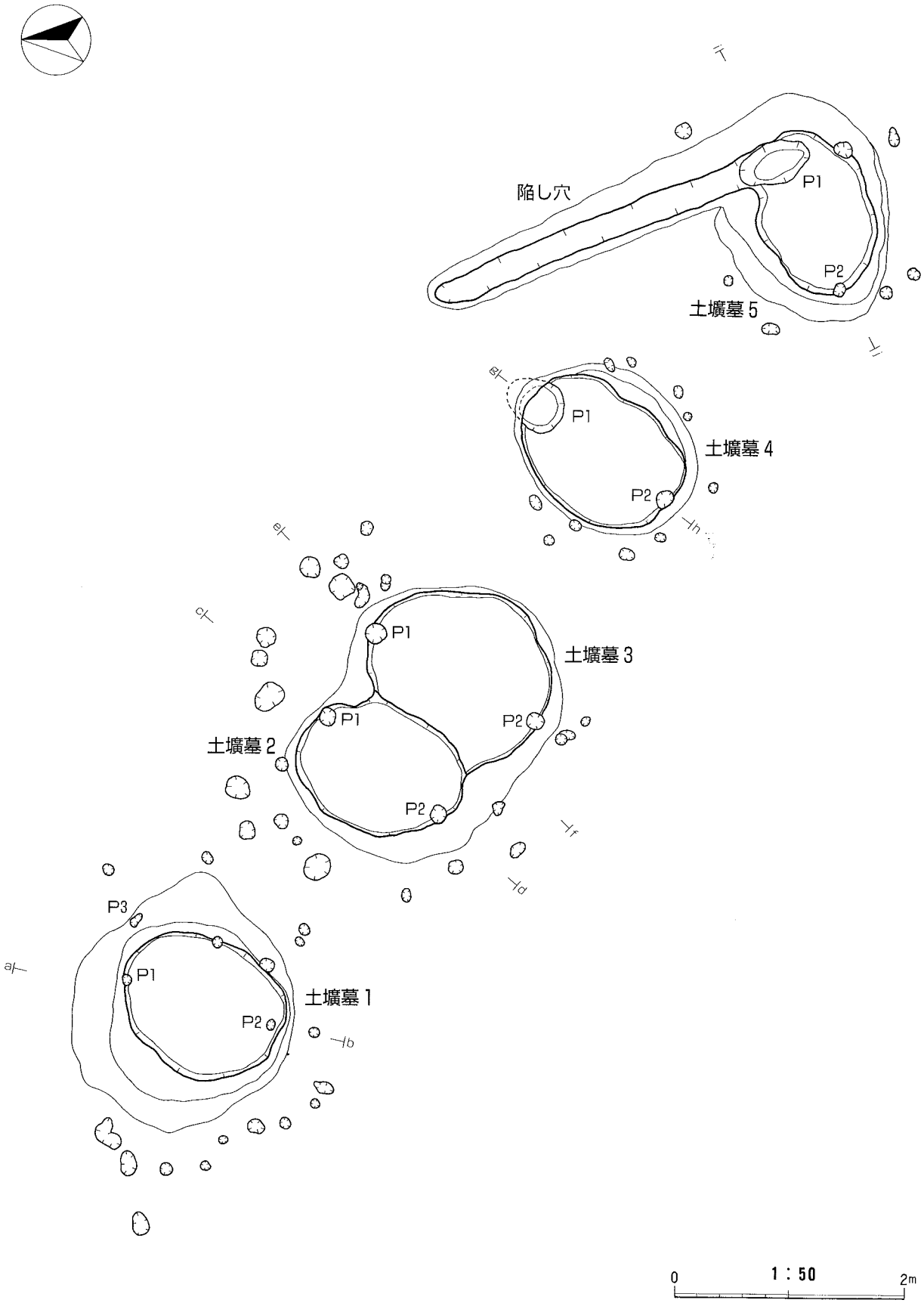
壁の状態　ほぼ直壁　　**底の状態**　平坦

ピット　長軸両端の壁直下より２口のピット(P1・2)が検出され、P1は直径0.08m、深さ0.19m、P2は直径0.09m、深さ0.21mである。

遺物の出土状況　土壙墓の北東側に近接するピット（P3）より鉄鎌が２点重なって出土



第4図　第1次～3次調査区全体図



第5図　土壙墓1～5平面図

土壙墓２（１号竪穴西半）

位置　土壙墓１の東側に隣接する　　**平面形**　楕円形　　**新旧関係**　当時は土壙墓３より新しいと認識

規模　長軸上端1.34m・下端1.34m、短軸上端1.14m・下端1.06m、深さ0.84m　　**長軸線の傾き**　N31°E

壁の状態　ほぼ直壁　　**底の状態**　平坦

ピット　長軸両端の壁直下より２口のピット(P1・2)が検出され、P1は直径0.17m・深さ0.18m、P2は直径0.14m・深さ0.12mである。

土壙墓３（１号竪穴東半）

位置　土壙墓４の西側に隣接する　　**平面形**　楕円形　　**新旧関係**　当時は土壙墓２より古いと認識

規模　長軸上端1.61m・下端1.54m、短軸1.22m以上・下端1.10m以上、深さ0.61m

長軸線の傾き　N22°E　　**壁の状態**　ほぼ直壁　　**底の状態**　平坦

ピット　長軸両端の壁直下より２口のピット(P1・2)が検出され、P1は直径0.13m、P2は直径0.11m・深さ不明である。

遺物の出土状況　底面中央部付近より刀子が１点出土しているが、現在は所在不明である。

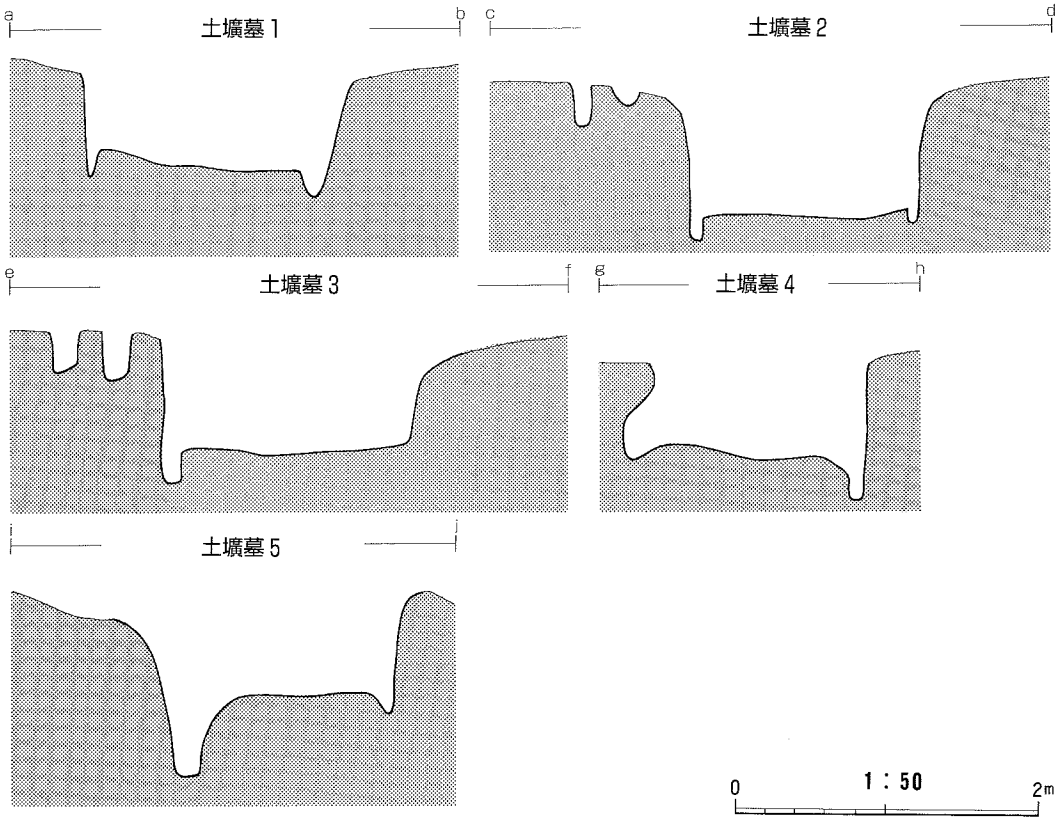
土壙墓４（２号竪穴）

位置　土壙墓５の西側に隣接する　　**平面形**　楕円形

規模　長軸上端1.50m・下端1.14m、短軸上端1.20m・下端1.04m、深さ0.62m　　**長軸線の傾き**　N36°E

壁の状態　ほぼ直壁だが、長軸北東端に袋状ピットが掘り込まれる。

底の状態　北東から南西に傾斜し、底面はやや凸凹である。



第６図　土壙墓１～５断面図

ピット　長軸北東端の壁より１口の袋状ピット（P1）、南西端底面より１口のピット（P2）が検出されている。P1は北東端壁の上部より掘り込まれ、北西－南東幅が0.31m、壁からの奥行きは0.45mである。P2は直径0.14m、深さ0.12mである。

遺物の出土状況　試掘調査時に北側上面より土師器の小形壷が出土しているが、現在は所在不明である。

土壙墓５（３号竪穴）

位置　土壙墓４の東側に隣接する　　**平面形**　楕円形　　**重複関係**　縄文時代の陥し穴と重複

規模　長軸上端1.47m・下端1.31m、短軸上端1.12m・下端0.91m、深さ0.64m　　**長軸線の傾き**　N58°E

壁の状態　ほぼ直壁　　**底の状態**　平坦

ピット　長軸両端の壁直下より２口のピット（P1・2）が検出されている。P1は長軸0.58m・短軸0.38m、深さ0.23m、P2は直径0.10m、深さ0.14mである。

土壙墓６（４号竪穴）

位置　１・２次トレンチ３中央部　　**平面形**　楕円形？

規模　長軸？上端1.57m・下端0.93m、短軸不明、深さ0.73m　　**長軸線の傾き**　不明

壁の状態　外傾して立ち上がる　　**底の状態**　平坦

土壙墓７（５号竪穴）

位置　１・２次トレンチ３中央部　　**平面形**　楕円形？

規模　長軸？上端1.02m・下端1.00m前後、短軸不明、深さ0.31m　　**長軸線の傾き**　不明

壁の状態　ほぼ直壁　　**底の状態**　平坦

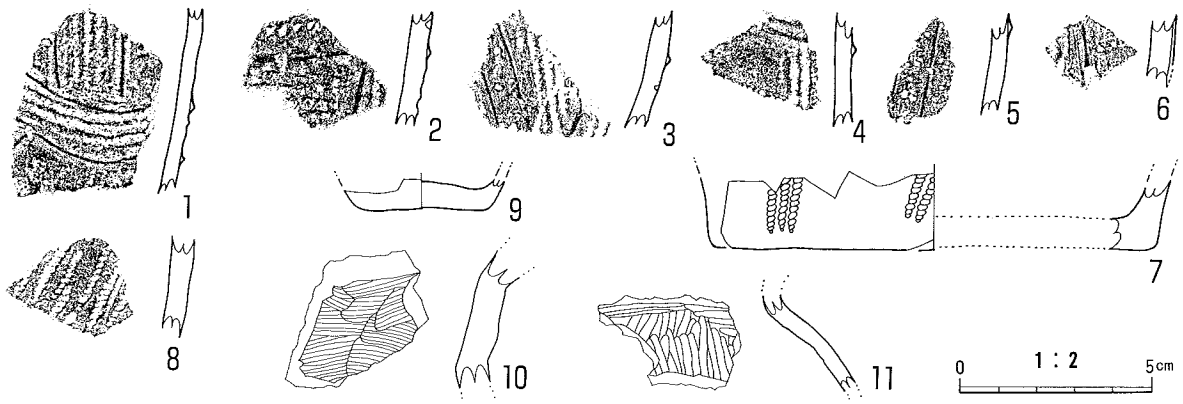
ピット　長軸の一端より１口のピットが検出され、壁をやや掘り込むことから袋状ピットの可能性が考えられる。壁からの奥行き0.04m、深さ0.09mである。

	土壙墓１			土壙墓２・３			土壙墓４			土壙墓５				土壙墓６		土壙墓７				総計
	Ⅰ層	不明	計	Ⅱ層	不明	計	Ⅰ層	不明	計	Ⅰ層	Ⅱ層	不明	計	不明	計	上層	下層	不明	計	
弥生土器	2	3	5	1	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2	0	1	3	10
続縄文土器	11	1	12	4	7	11	8	1	9	5	21	28	54	1	1	13	9	9	31	118
土師器	14	0	14	2	9	11	5	0	5	6	15	32	53	6	6	5	12	6	23	112
計	27	4	31	7	16	23	13	1	14	11	37	60	108	7	7	20	21	16	57	240

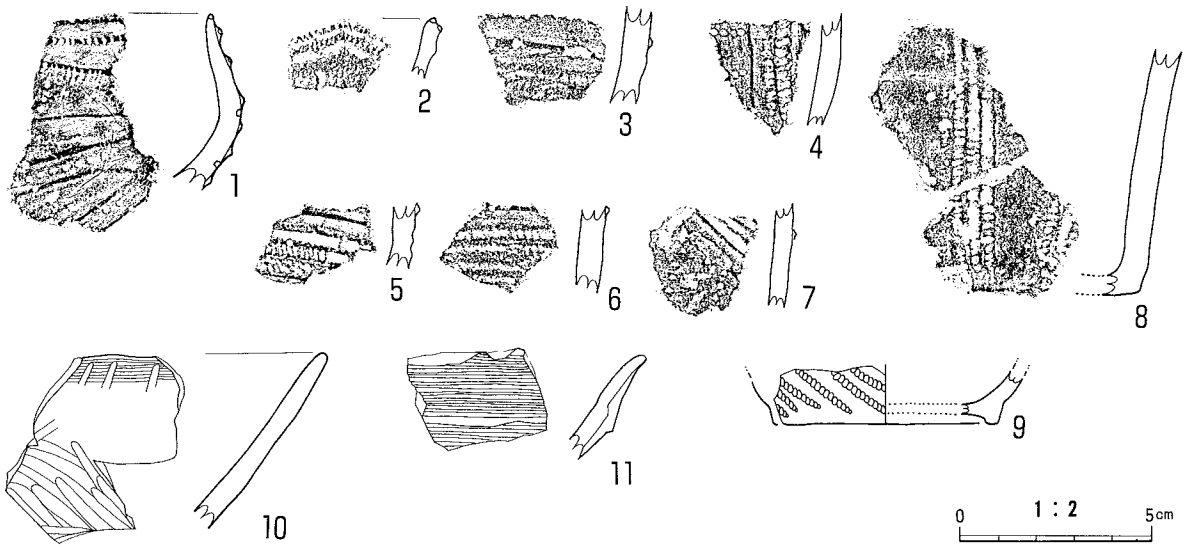
第１表　土壙墓出土土器点数表

	１・２次トレンチ				３次トレンチ													総計
	Ⅰ層	Ⅱ層	不明	計	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	不明	計	
弥生土器	50	12	103	165	6	34	12	22	31	44	0	0	6	0	0	44	199	364
続縄文土器	126	56	174	356	14	45	8	2	5	18	0	0	1	0	0	13	106	462
土師器	162	78	292	532	22	89	11	20	7	127	4	2	5	0	0	51	338	870
計	338	146	569	1053	42	168	31	44	43	189	4	2	12	0	0	108	643	1696

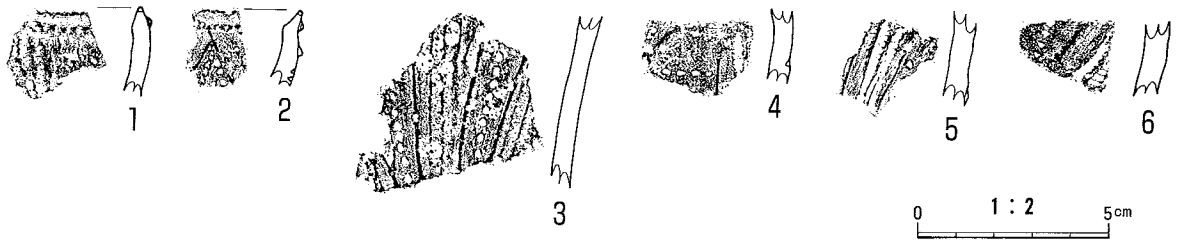
第２表　トレンチ出土土器点数表



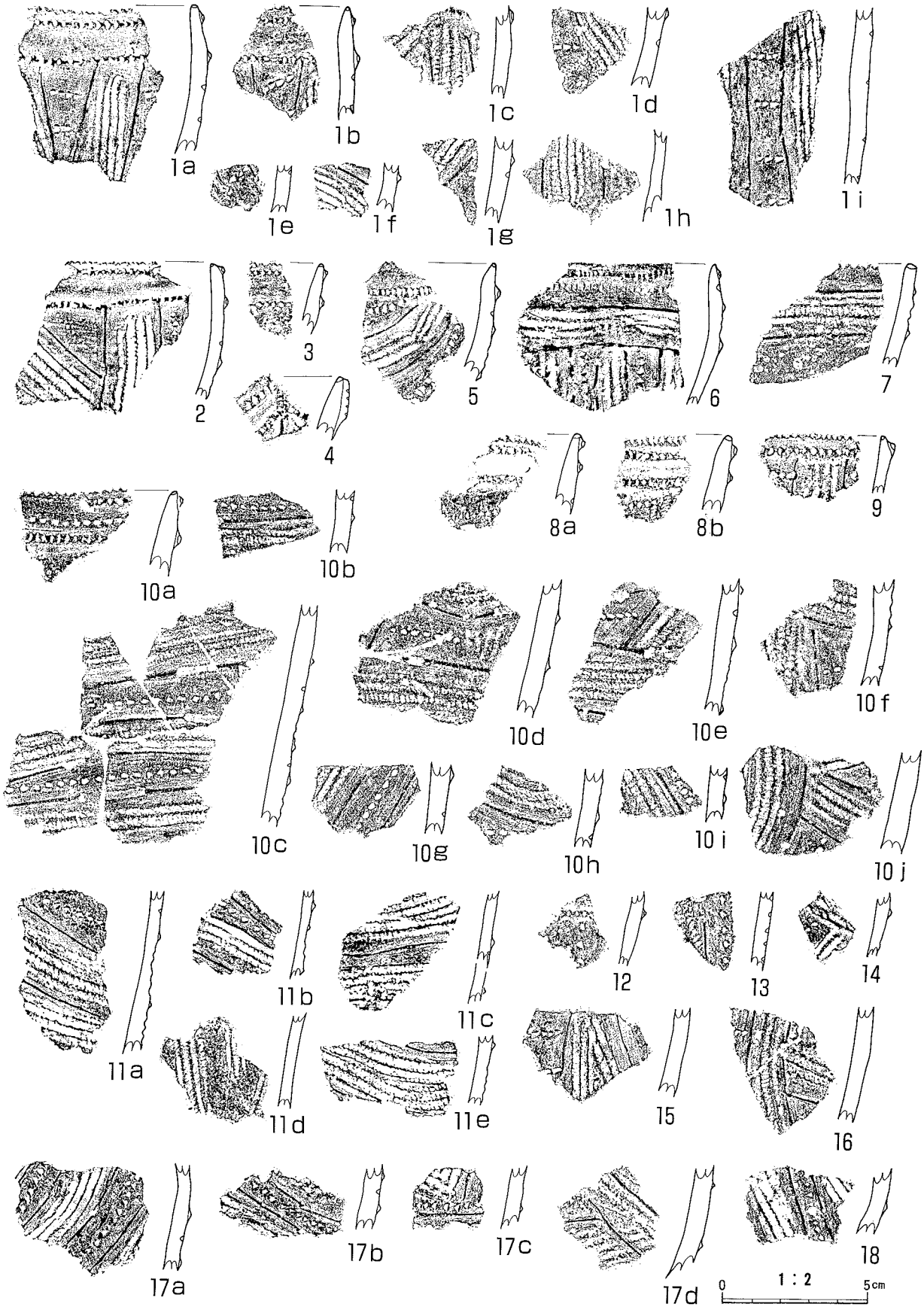
第７図　土壙墓１出土土器



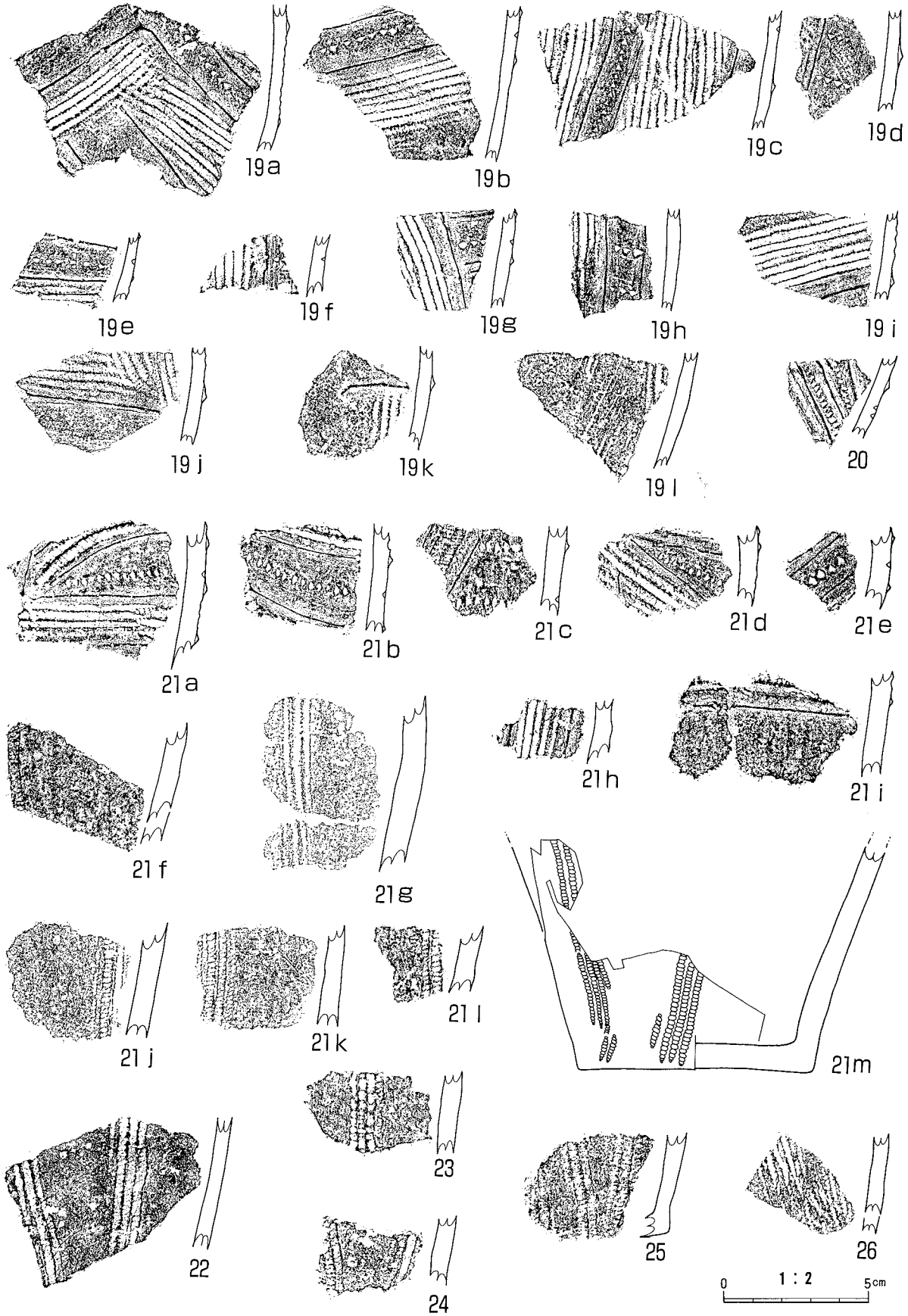
８図　土壙墓２・３出土土器



第９図　土壙墓４出土土器



第10図　土壙墓５出土土器（１）



第11図　土壙墓５出土土器（２）

4．土壙墓出土遺物

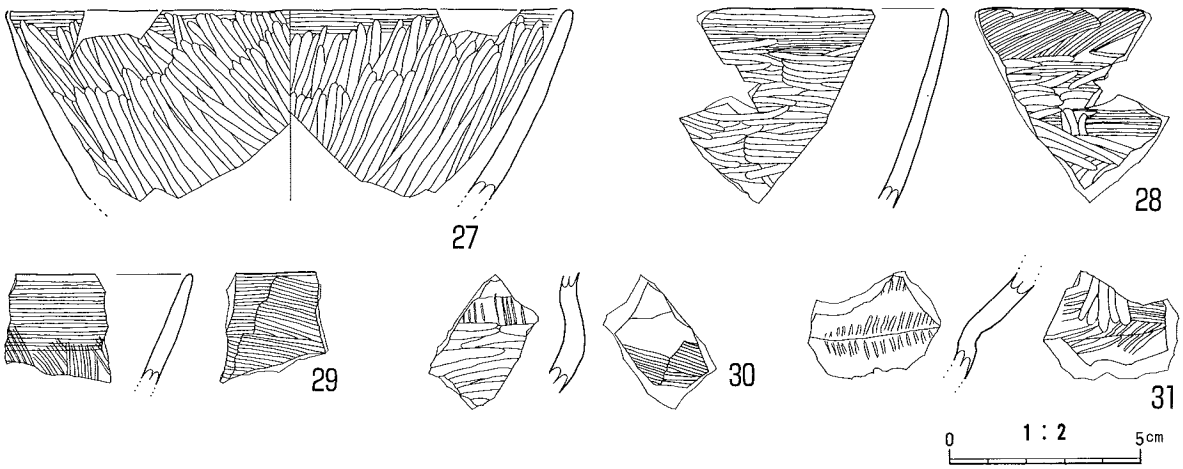
土器（第７～15図）　注記から土壙墓内出土と考えられる弥生土器、続縄文土器、土師器片は計 240点あるが、いずれも小破片が多く、一個体を復元できるものはなかった。各土壙墓からの出土点数は第１表のとおりである。破片数なので一概に比較はできないものの、土壙墓５、７からの出土量が多いようである。弥生土器については、トレンチと比べ出土比率が低いことから、混入と考えられる。続縄文土器と土師器はどの土壙墓においてもほぼ同じ比率で出土しているようである。

各土器の特徴等については土器観察表（第３・４表）を参照されたい。

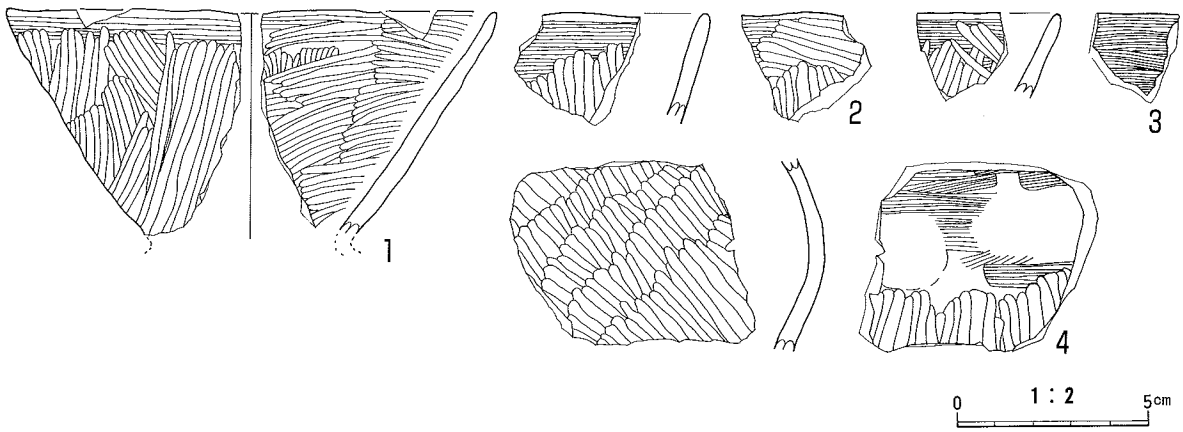
鉄製品（第26図１・２）　土壙墓およびその周辺ピットからは刀子１点、鎌２点の計３点の鉄製品が出土しているが、うち現存するのは鎌２点のみである。

刀子は現在所在不明であるが、土壙墓３（１号竪穴東）の底面中央付近から出土しており、水沢市高山遺跡の報告書（水沢市教委1978）には「現存最大長7.5cm、幅1.3cm」と記述されている。写真からは目釘穴が認められるが、詳細は不明である。

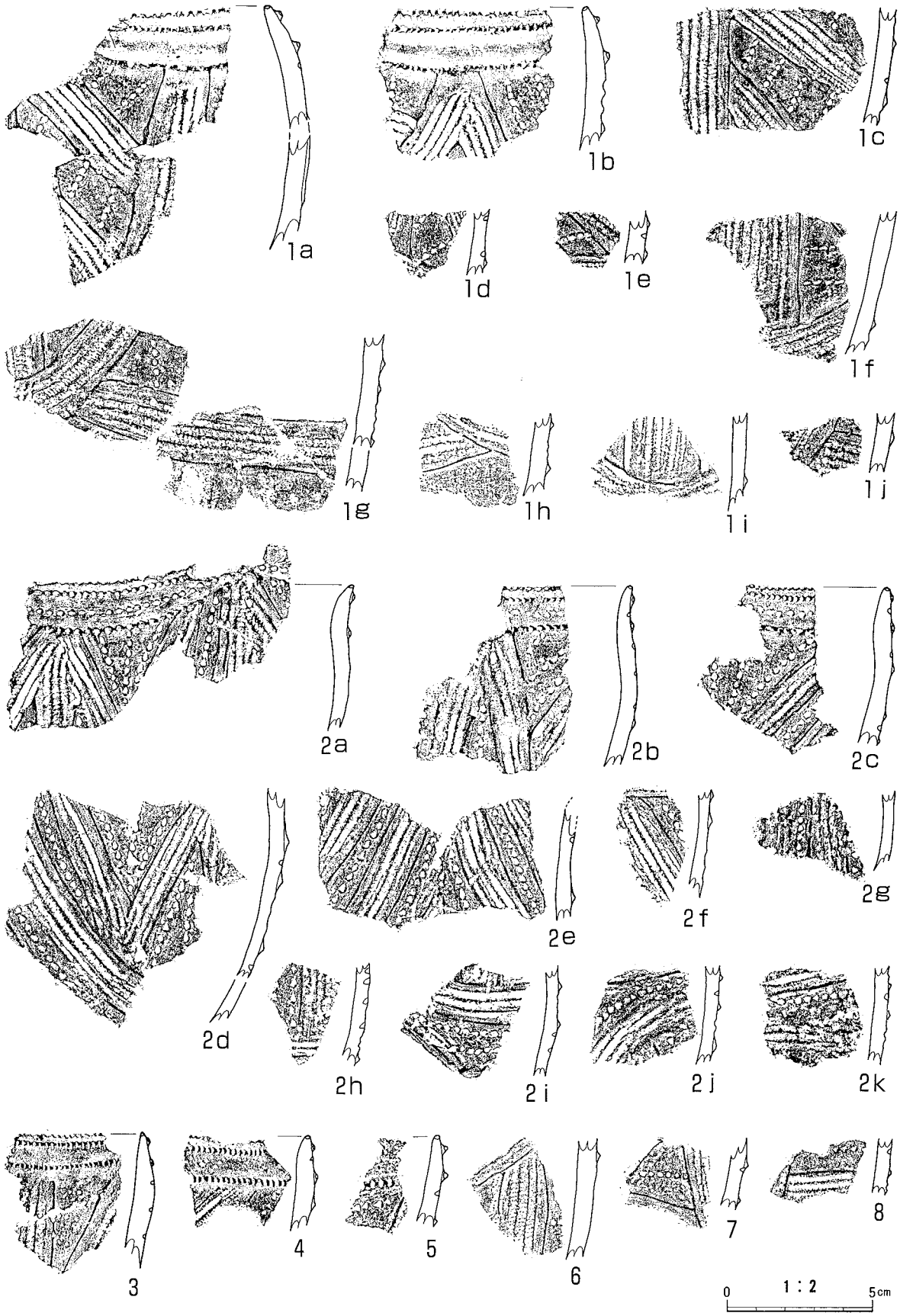
鎌は、土壙墓１（６号竪穴）に近接するピットより２点重なって出土している。26図１は現存長が12.5cm、最大部幅3.4cm、最大部厚0.6cmあり、直刃鎌で、一側面の上縁が刀の切先状に尖り、中央部



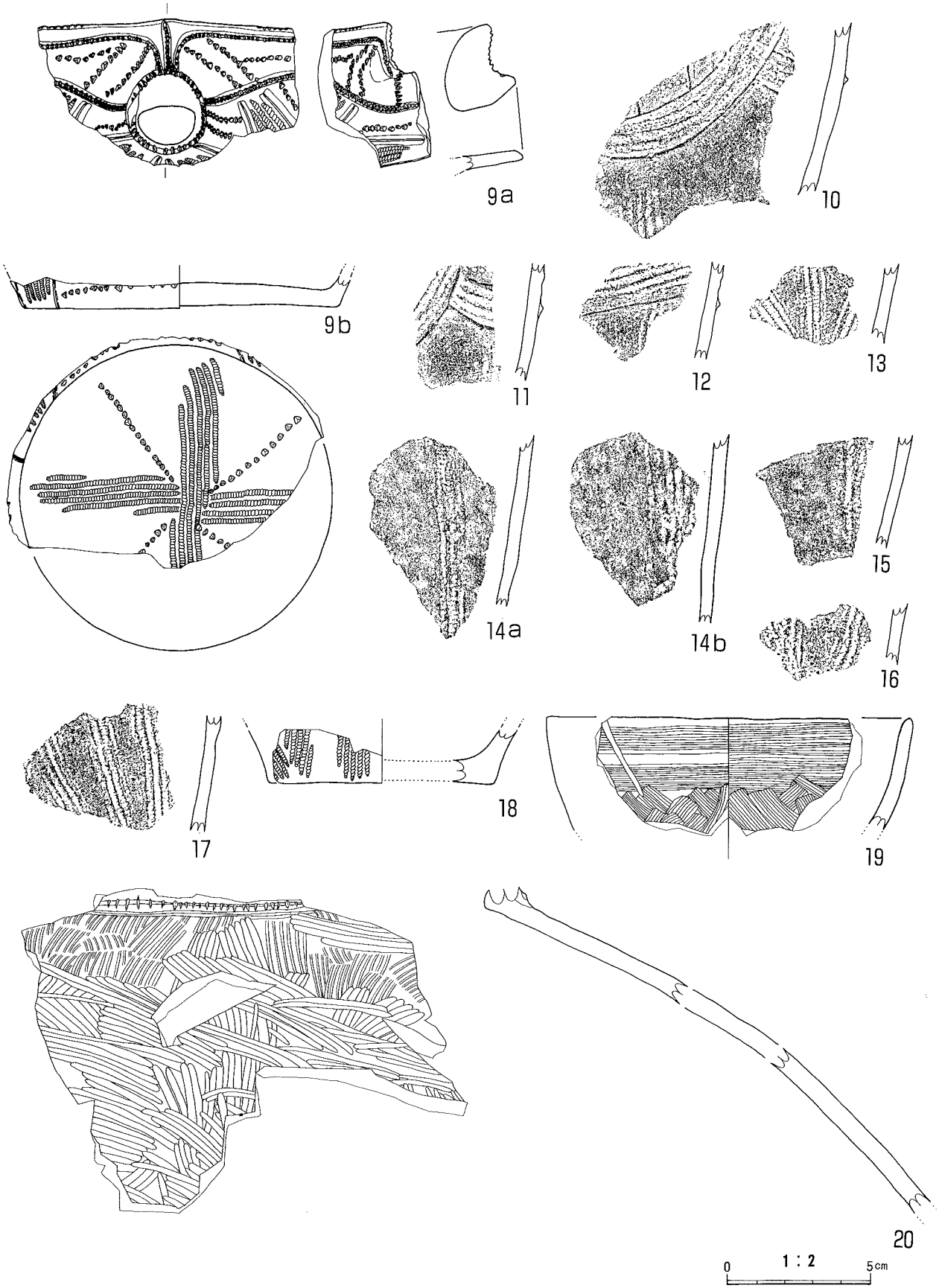
第12図　土壙墓５出土土器（３）



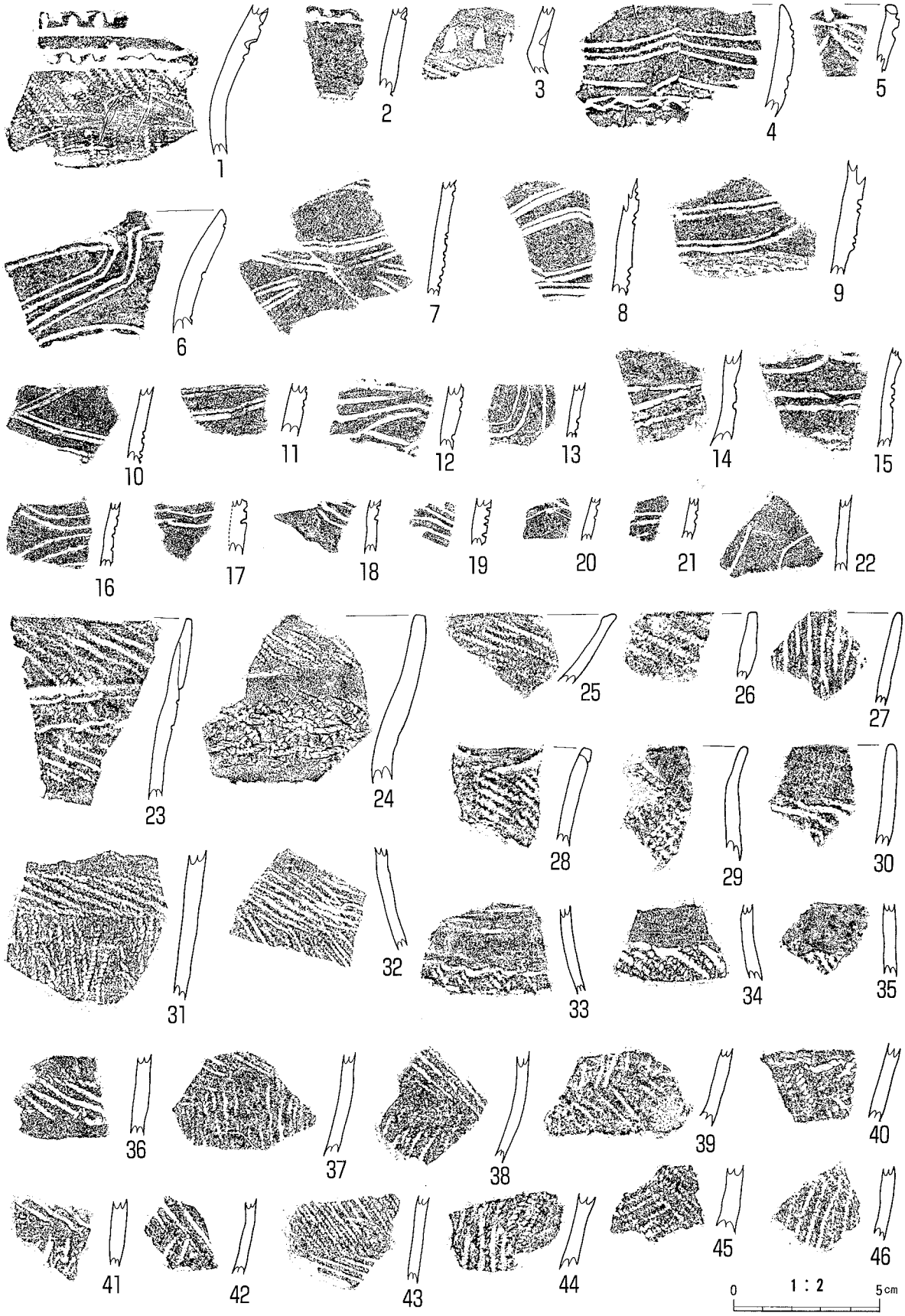
第13図　土壙墓６出土土器



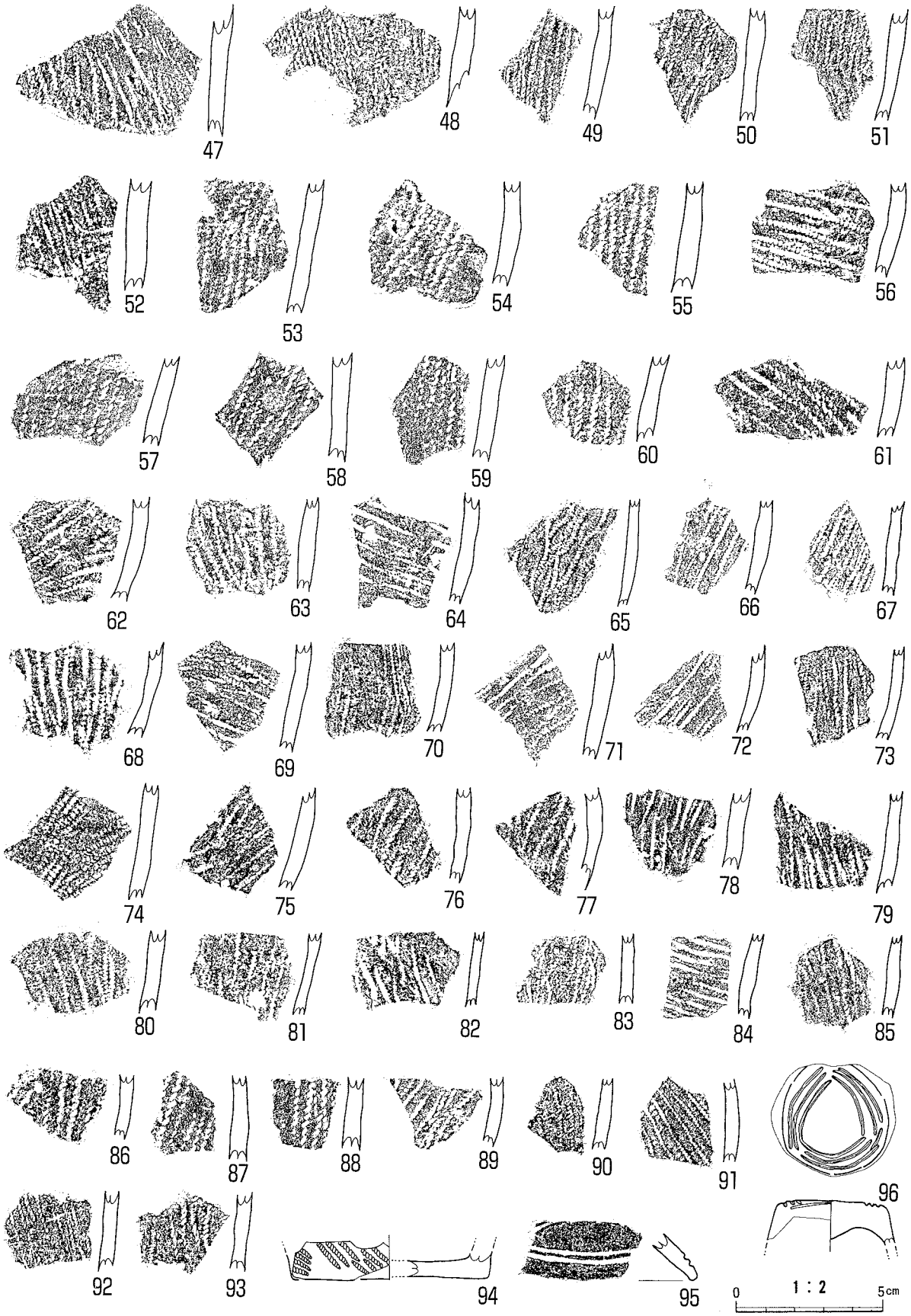
第14図　土壙墓７出土土器（１）



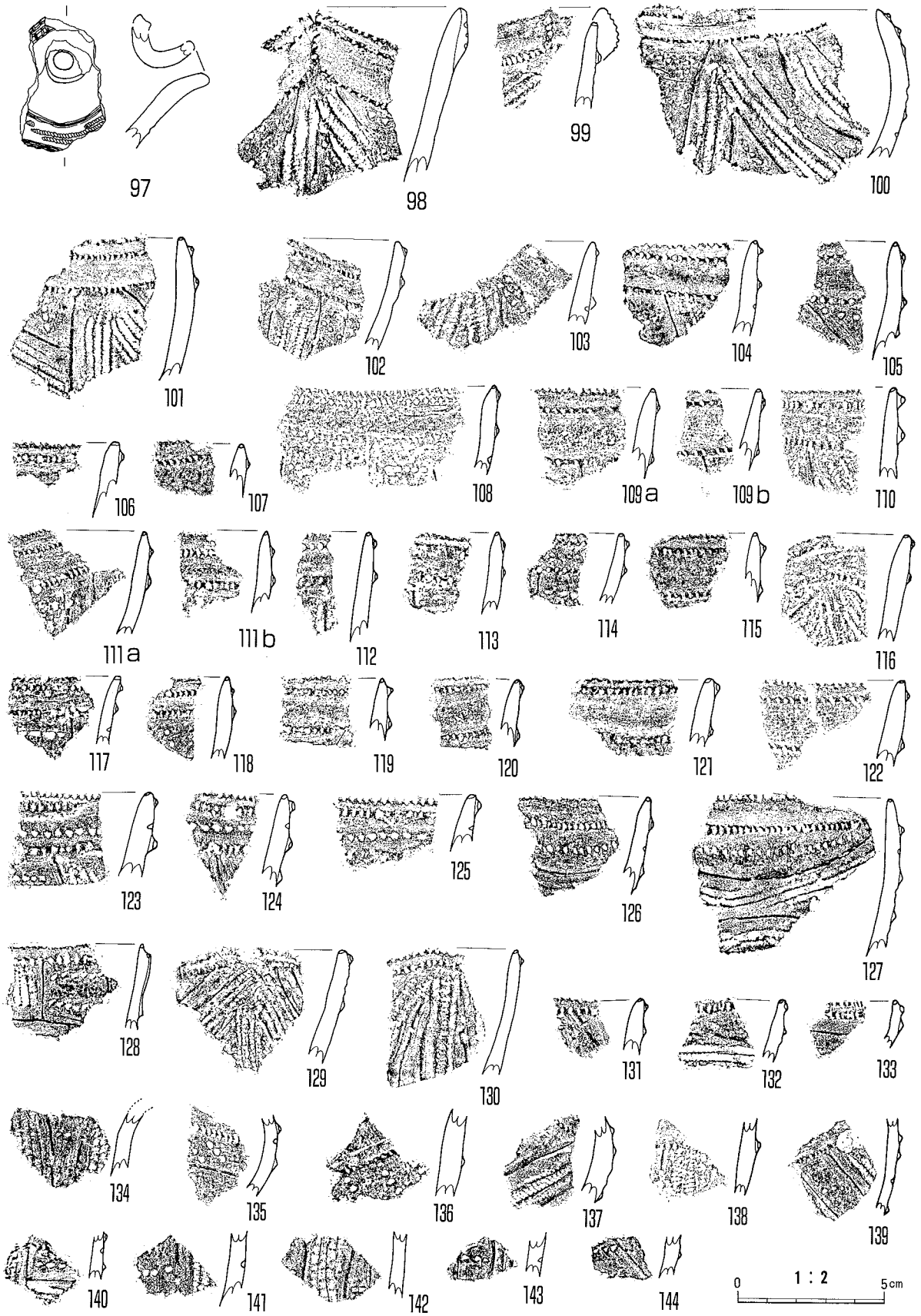
第15図　土壙墓７出土土器（２）



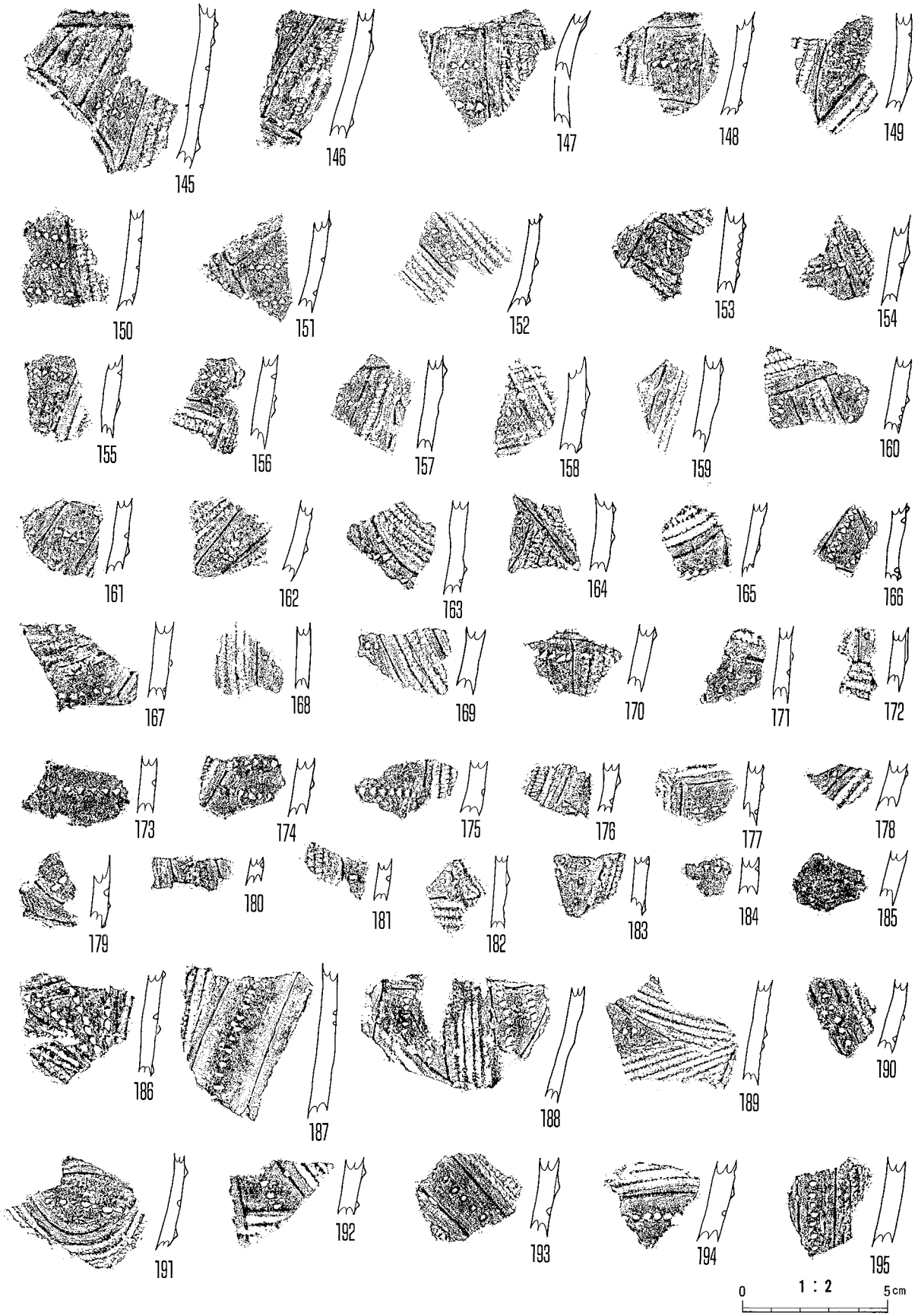
第16図　トレンチ出土土器（1）



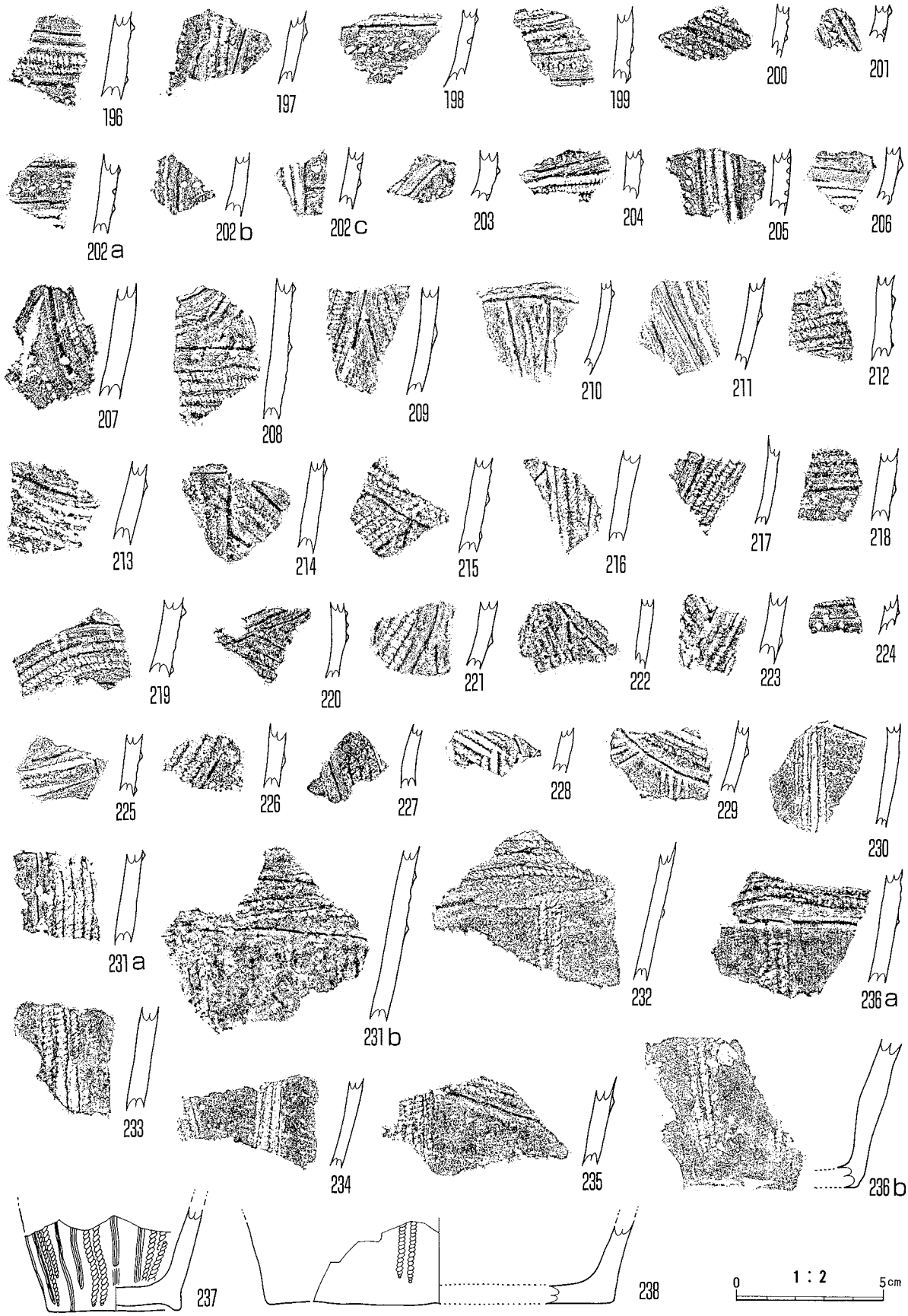
第17図　トレンチ出土土器（2）



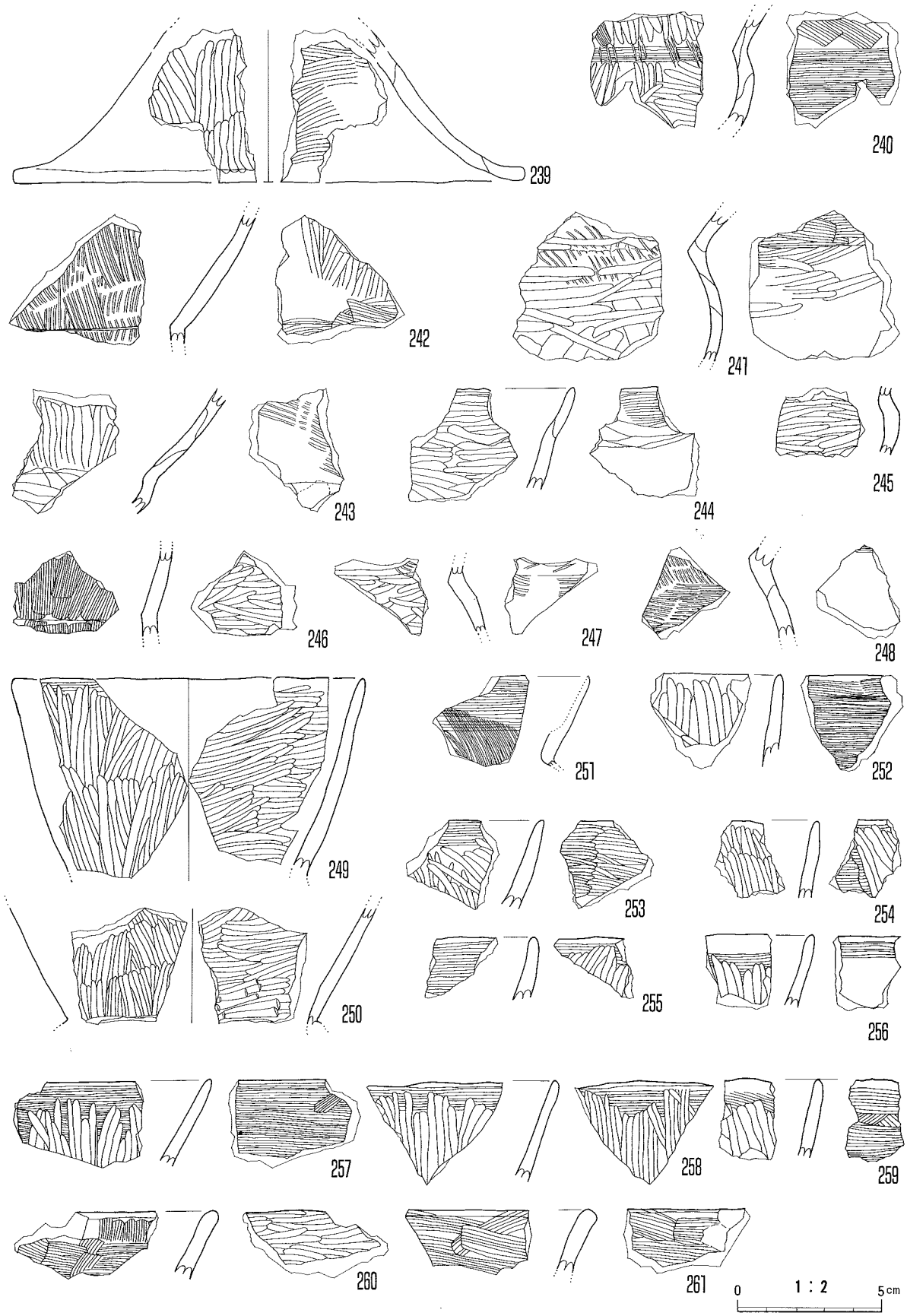
第18図　トレンチ出土土器（3）



第19図　トレンチ出土土器（4）



第20図　トレンチ出土土器（5）



第21図　トレンチ出土土器（6）

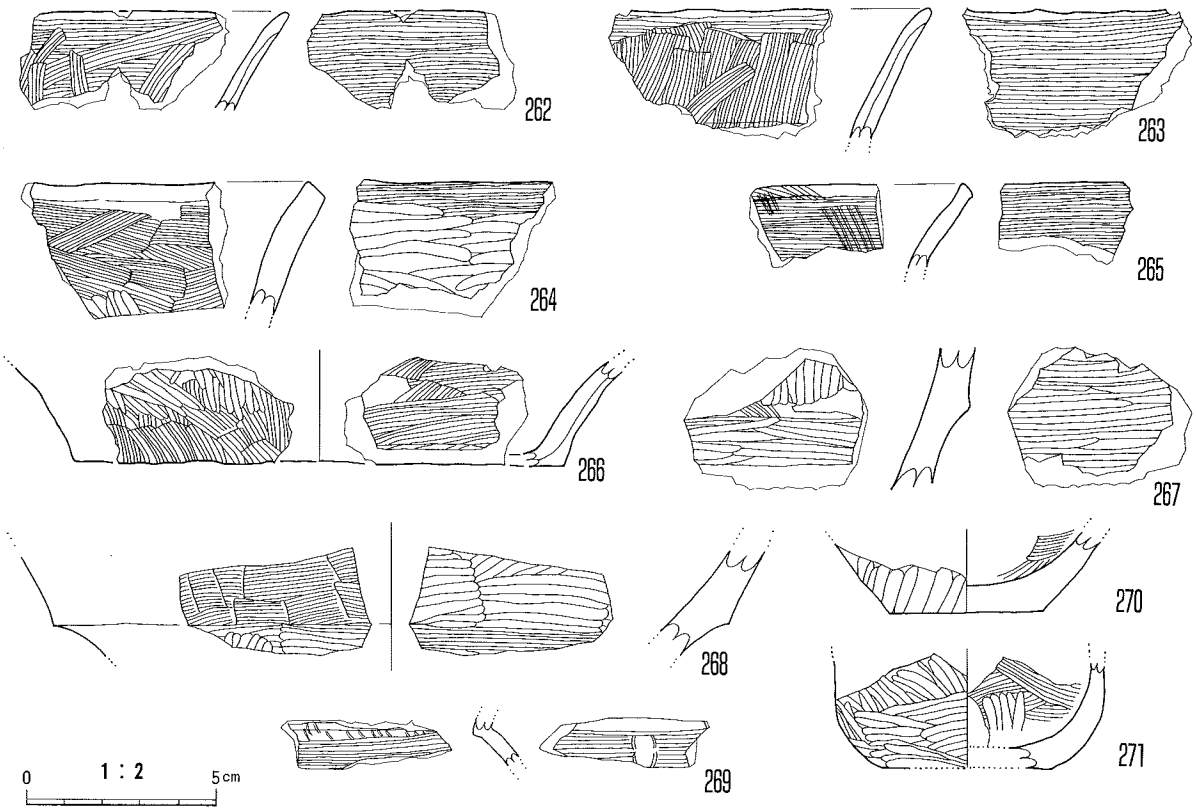
がやや内湾気味になっている。右側縁に折り返しがあり、刃に対してはほぼ直角である。X線写真でも目釘穴は確認されない。26図２は現存長が12.8cm、最大部幅3.8cm、最大部厚0.4cmあり、長方形でわずかに内湾している。両側縁に折り返しがある直刃鎌で、折り返しは刃に対してほぼ直角であったと考えられる。X線写真でも目釘穴は確認されない。

5．トレンチ出土遺物

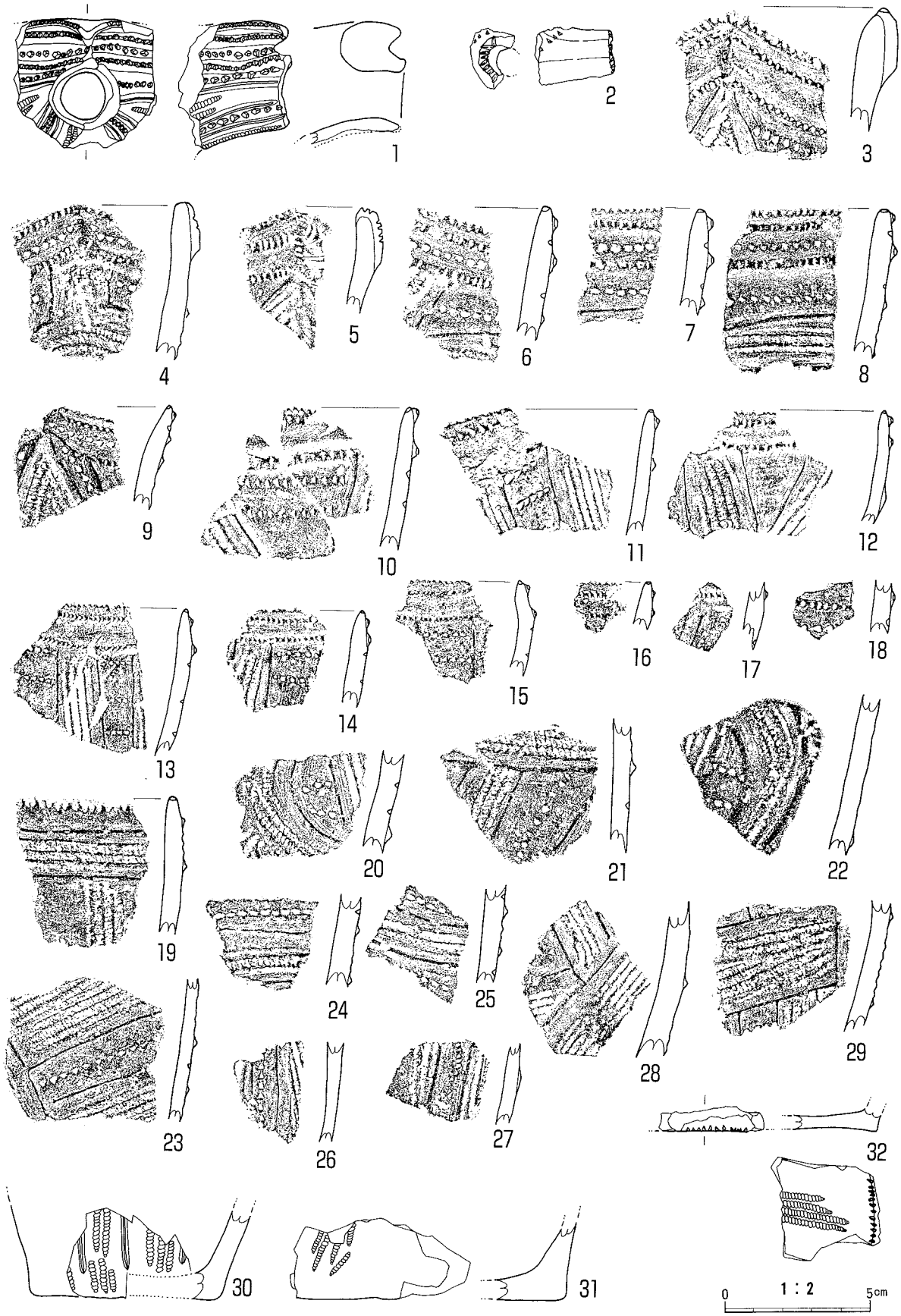
土器（第16～22図）　トレンチからは計1,696点の弥生土器、続縄文土器、土師器が出土しており、その内訳は第２表のとおりである。１・２次調査では弥生土器、続縄文土器、土師器の出土点数の比率が約１：４：５であるのに対し、３次調査では約３：２：５と弥生土器の比率が高くなっている。１・２次調査ではⅡ層よりⅠ層からの出土点数が多い。また、３次調査ではB・Fトレンチからの出土点数が多いのに対し、周辺のG・H・I・Jトレンチからの出土点数はわずかである。

各土器の特徴等については土器観察表（第５～10表）を参照されたい。

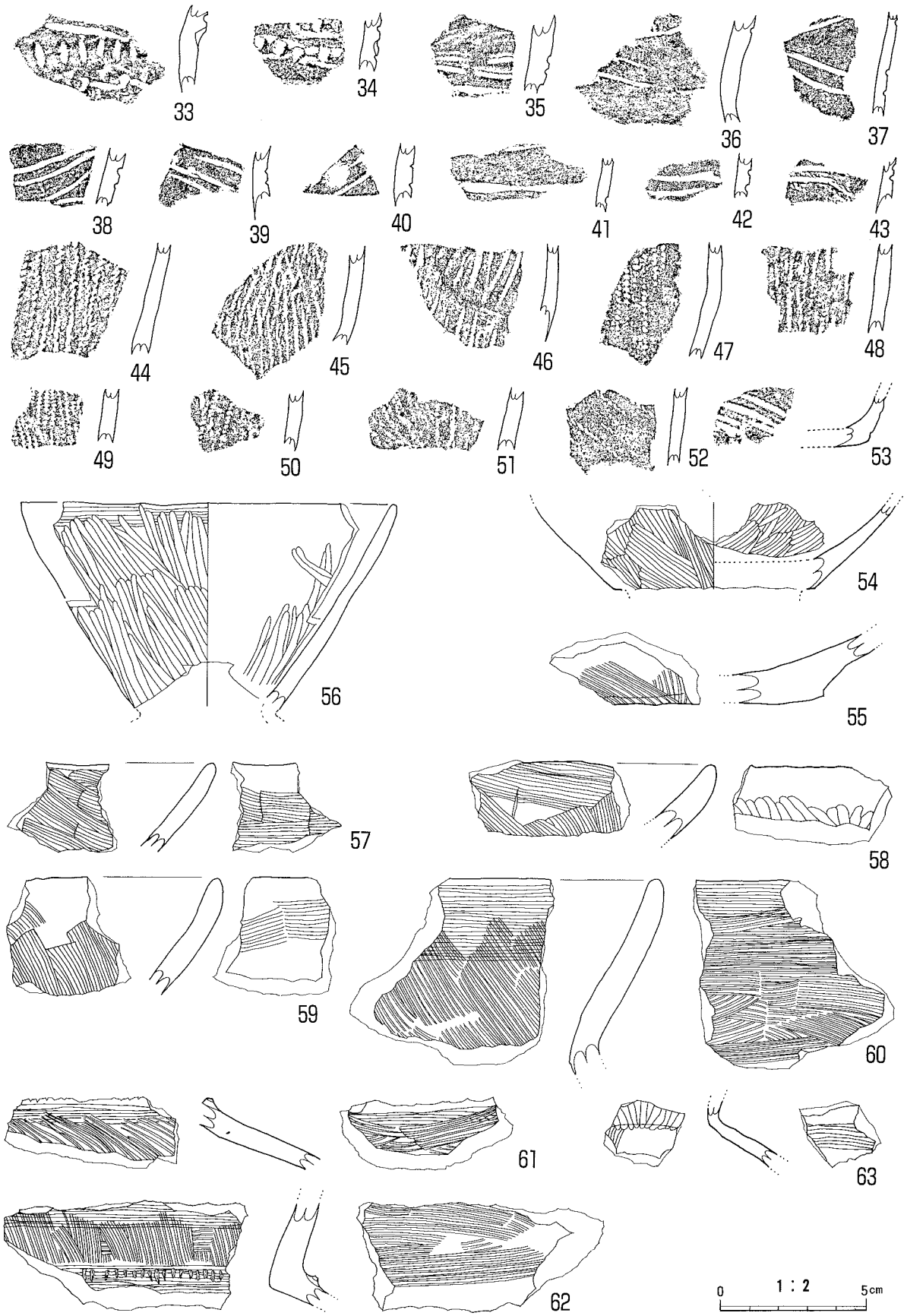
勾玉（第26図３）　１次調査のトレンチより勾玉が１点出土している。材質は半透明なメノウで、形態はC字形、片面穿孔である。尾部がやや尖って、頭部その他に整形時の稜が残り、断面形は正確な楕円形をなしていない。全長は22.2mm、幅14.3mm、厚さ7.0mm、重量3.2gである。



第22図　トレンチ出土土器（７）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
1：2
5cm

第23図　採集土器（1）


33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
0
1 : 2
5cm

第24図　採集土器（２）

6．採集遺物

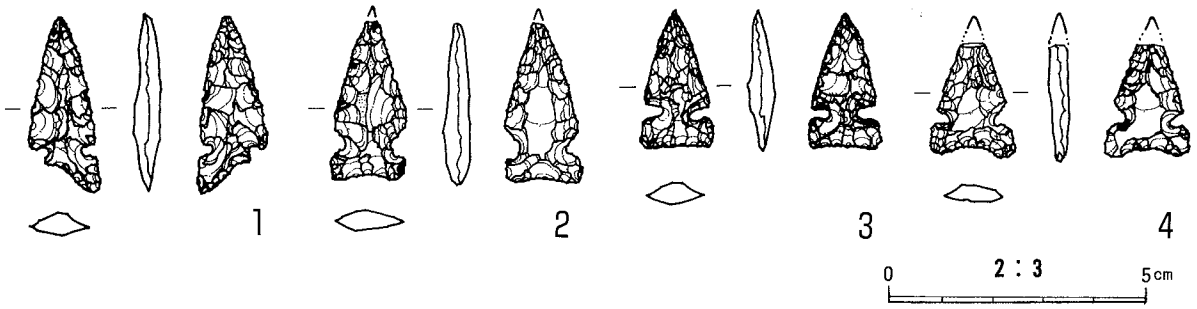
永福寺山遺跡では、発掘調査前から武田良夫により多くの遺物が採集されている。

土器（第23・24図） 計326点の弥生土器、続縄文土器、土師器が採集されており、その内訳はそれぞれ46点、42点、238点と点数的には土師器が多い。

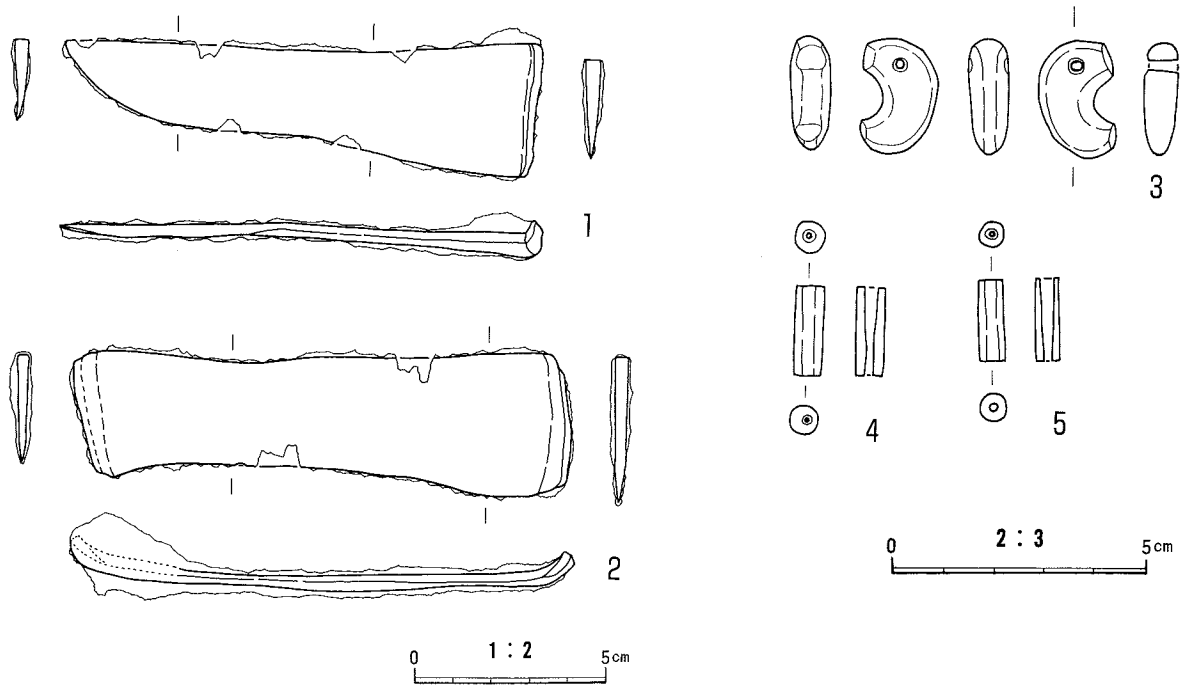
各土器の特徴等については土器観察表（第11・12表）を参照されたい。

管玉（第26図４・５） 2点採集されている。いずれも材質は碧玉で、片面穿孔である。第26図４は全長が17.5mm、径5.5mm、重量0.9ｇであり、５は全長が15.8mm、径5.0mm、重量0.6ｇである。

アメリカ式石鏃（第25図） 5点採集されているうち、現存するのは4点のみである。石材は全て頁岩であり、第25図１の基部、２・４の先端部が欠損している。第25図１は全長が34.2mm、幅13.7mm、厚さ4.9mm、重量1.6ｇ、２は全長が30.9mm、幅15.0mm、厚さ4.5mm、重量1.9ｇ、３は全長が26.3mm、幅14.1mm、厚さ4.4mm、重量1.1ｇ、４は全長が21.8mm、幅16.5mm、厚さ3.6mm、重量1.1ｇである。



第25図　アメリカ式石鏃



第26図　鉄鎌・勾玉・管玉

挿図	次数	遺構・トレンチ	層位	種別	器種	装飾・文様・地文・器面調整・胎土など	炭化物・顔料等
7 - 1	1・2	土壙墓1	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外内面コゲ
7 - 2	1・2	土壙墓1	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ミガキ、胎土:硬質	—
7 - 3	1・2	土壙墓1	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
7 - 4	1・2	土壙墓1	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
7 - 5	1・2	土壙墓1	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外内面コゲ
7 - 6	1・2	土壙墓1	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:軟質	—
7 - 7	1・2	土壙墓1	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、内面:ナデ、底部:ナデ、胎土:硬質	—
7 - 8	1・2	土壙墓1	—	弥生	甕	体部上半:附加条縄文、内面:ナデ	—
7 - 9	1・2	土壙墓1	—	弥生	甕	体部下半:無文・ミガキ、内面:ナデ、底部:ナデ	—
7 - 10	1・2	土壙墓1	Ⅰ	土師器	壷	頸部:ヘラナデ	—
7 - 11	1・2	土壙墓1	—	土師器	壷	体部上半:ヘラミガキ	—
8 - 1	1・2	土壙墓2・3	Ⅱ	続縄文	注口付	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線・円形刺突文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
8 - 2	1・2	土壙墓2・3	Ⅱ	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
8 - 3	1・2	土壙墓2・3	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:軟質	—
8 - 4	1・2	土壙墓2・3	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
8 - 5	1・2	土壙墓2・3	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:軟質	—
8 - 6	1・2	土壙墓2・3	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
8 - 7	1・2	土壙墓2・3	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
8 - 8	1・2	土壙墓2・3	—	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、底部:ナデ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
8 - 9	1・2	土壙墓2・3	—	弥生	甕	体部下半:附加条縄文、底部:上げ底・ナデ、内面:ナデ	—
8 - 10	1・2	土壙墓2・3	—	土師器	高坏	口縁部:ヨコナデ+タテヘラミガキ	外内面朱
8 - 11	1・2	土壙墓2・3	—	土師器	壷	口縁部:有段・ヨコナデ	—
9 - 1	1・2	土壙墓4	Ⅰ	続縄文	深鉢	口唇:波状?・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:軟質	—
9 - 2	1・2	土壙墓4	—	続縄文	深鉢	口唇:波状?・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
9 - 3	1・2	土壙墓4	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
9 - 4	1・2	土壙墓4	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
9 - 5	1・2	土壙墓4	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
9 - 6	1・2	土壙墓4	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:軟質	—
10 - 1	1・2	土壙墓5	Ⅰ	続縄文	注口付	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外内面コゲ
10 - 2	1・2	土壙墓5	Ⅱ	続縄文	深鉢	口唇:波状?・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外内面コゲ・ベンガラ
10 - 3	1・2	土壙墓5	Ⅱ	続縄文	深鉢	口唇:波状?・キザミ、口縁部:隆線2本+キザミ、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
10 - 4	1・2	土壙墓5	—	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線、内面:ナデ、胎土:軟質	—
10 - 5	1・2	土壙墓5	—	続縄文	注口付	口唇:波状?・キザミ、口縁:隆線+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
10 - 6	1・2	土壙墓5	Ⅰ	続縄文	深鉢	口唇:平縁?・無文、口縁部:隆線+キザミ・三角形刺突・微隆線+帯縄文、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	内面コゲ・白色化粧土
10 - 7	1・2	土壙墓5	Ⅰ	続縄文	深鉢	口唇:平縁?・キザミ、口縁部:微隆線+帯縄文、体部上半:無文・ミガキ、内面:ナデ、胎土:硬質	外内面コゲ
10 - 8	1・2	土壙墓5	Ⅱ	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:帯縄文・三角形刺突、胎土:硬質	外面スス
10 - 9	1・2	土壙墓5	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁?・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
10 - 10	1・2	土壙墓5	Ⅱ	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ+円形刺突、体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
10 - 11	1・2	土壙墓5	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、体部下半:帯縄文、内面:ミガキ・ナデ、胎土:硬質	外内面コゲ
10 - 12	1・2	土壙墓5	Ⅱ	続縄文	深鉢	口縁:隆線+キザミ、体部上半:三角形刺突、胎土:硬質	—
10 - 13	1・2	土壙墓5	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ミガキ、胎土:硬質	—
10 - 14	1・2	土壙墓5	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
10 - 15	1・2	土壙墓5	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ

第3表　土壙墓出土土器観察表(1)

挿図	次数	遺構・トレンチ	層位	種別	器種	装飾・文様・地文・器面調整・胎土など	炭化物・顔料等
10 - 16	1・2	土壙墓5	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外内面コゲ
10 - 17	1・2	土壙墓5	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
10 - 18	1・2	土壙墓5	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
11 - 19	1・2	土壙墓5	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ・ベンガラ
11 - 20	1・2	土壙墓5	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
11 - 21	1・2	土壙墓5	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、体部下半:帯縄文、底部:ミガキ、内面:ナデ、胎土:硬質	外内面スス
11 - 22	1・2	土壙墓5	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
11 - 23	1・2	土壙墓5	—	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
11 - 24	1・2	土壙墓5	—	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
11 - 25	1・2	土壙墓5	—	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、底部:ナデ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
11 - 26	1・2	土壙墓5	—	弥生	甕	体部上半:附加条縄文	—
12 - 27	1・2	土壙墓5	—	土師器	高坏	口縁部:ヨコナデ+タテヘラミガキ、内面:ヨコナデ+タテヘラミガキ、胎土:ウンモ含む	外内面朱
12 - 28	1・2	土壙墓5	—	土師器	壷	口縁部:ヨコナデ+ヨコヘラミガキ、内面:ナデ+ヘラミガキ、胎土:ウンモ含む	—
12 - 29	1・2	土壙墓5	—	土師器	壷	口縁部:ハケメ+ヨコナデ、内面:ヨコナデ、胎土:ウンモ含む	—
12 - 30	1・2	土壙墓5	—	土師器	鉢	頸部:ハケメ、体部:ヨコヘラミガキ、内面:ヘラナデ、胎土:ウンモ含む	—
12 - 31	1・2	土壙墓5	—	土師器	鉢	頸部:ハケメ、内面:ハケメ+ヘラミガキ	—
13 - 1	1・2	土壙墓6	—	土師器	坩	口縁部:ヨコナデ+タテヘラミガキ、内面:ヨコナデ+ヘラミガキ、胎土:ウンモ含む	外内面朱
13 - 2	1・2	土壙墓6	—	土師器	壷	口縁部:ヨコナデ+タテヘラミガキ、内面:ヨコナデ+ヘラミガキ	外内面朱
13 - 3	1・2	土壙墓6	—	土師器	壷・高坏	口縁部:ヨコナデ+ヘラミガキ、内面:ヨコナデ	外内面朱
13 - 4	1・2	土壙墓6	—	土師器	壷	体部:タテヘラミガキ、内面:ヘラナデ+ヘラミガキ	外面朱
14 - 1	1・2	土壙墓7	下	続縄文	深鉢	口唇:平縁?・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ・ベンガラ
14 - 2	1・2	土壙墓7	下	続縄文	注口付	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ・三角形刺突、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ・ミガキ、胎土:硬質	外内面コゲ
14 - 3	1・2	土壙墓7	上	続縄文	深鉢	口唇:波状?・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
14 - 4	1・2	土壙墓7	上	続縄文	深鉢	口唇:波状?・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ・三角形刺突、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:海綿骨針含む	外面スス
14 - 5	1・2	土壙墓7	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁?・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
14 - 6	1・2	土壙墓7	上	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
14 - 7	1・2	土壙墓7	上	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
14 - 8	1・2	土壙墓7	下	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:海綿骨針含む	—
15 - 9	1・2	土壙墓7	上	続縄文	注口付	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ・三角形刺突、体部上下:微隆線+帯縄文・三角形刺突、底部:帯縄文十字・三角形刺突十字、内面:ナデ、胎土:海綿骨針含む	外面スス・ベンガラ
15 - 10	1・2	土壙墓7	下	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	内面コゲ・白色化粧土
15 - 11	1・2	土壙墓7	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	白色化粧土
15 - 12	1・2	土壙墓7	下	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	内面コゲ
15 - 13	1・2	土壙墓7	上	続縄文	深鉢	体部上半:帯縄文、内面:ミガキ、胎土:硬質	—
15 - 14	1・2	土壙墓7	—	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
15 - 15	1・2	土壙墓7	下	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	外面スス
15 - 16	1・2	土壙墓7	上	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
15 - 17	1・2	土壙墓7	上	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
15 - 18	1・2	土壙墓7	下	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、底部:ナデ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
15 - 19	1・2	土壙墓7	下	土師器	壷	口縁部:ヨコナデ+ヘラナデ、内面:ヨコナデ+ヘラナデ、胎土:ウンモ含む	—
15 - 20	1・2	土壙墓7	上	土師器	壷	頸部:隆線+キザミ、体部上半:ハケメ+ヘラミガキ、内面:ヘラナデ	外面スス

第４表　土壙墓出土土器観察表(2)

挿図	次数	遺構・トレンチ	層位	種別	器種	装飾・文様・地文・器面調整・胎土など	炭化物・顔料等
16 - 1	3	F 4	—	弥生	壷？	口縁部:交互刺突文、頸部:附加条縄文、内面:ナデ	—
16 - 2	3	F	—	弥生	甕	口縁部:交互刺突文、内面:ナデ	—
16 - 3	1・2	—	—	弥生	甕	頸部:縦位刺突列、体部上半:附加条縄文、内面:ナデ	—
16 - 4	3	E 2	—	弥生	甕	口唇:平縁・無文、口縁部:弧状沈線文・鋸歯状刺突文、内面:ナデ	—
16 - 5	3	—	—	弥生	甕	口唇:波状・頂部キザミ、口縁部:沈線文、内面:ナデ	—
16 - 6	3	F 7	—	弥生	甕	口唇:平縁？・無文、口縁部:工字文風沈線文、内面:ナデ	—
16 - 7	3	F穴	—	弥生	甕	口縁部:弧状沈線文、内面:ナデ	外面コゲ
16 - 8	3	B 1	—	弥生	甕	口縁部:菱状沈線文、内面:ナデ	外面コゲ
16 - 9	3	F穴	—	弥生	甕	口縁部:弧状沈線文、内面:ナデ	外面コゲ
16 - 10	3	F 2	—	弥生	甕	口縁部:菱状沈線文、内面:ナデ	—
16 - 11	1・2	D T 2	—	弥生	甕	口縁部:工字文風沈線文、内面:ナデ	—
16 - 12	1・2	—	—	弥生	甕	口縁部:弧状沈線文、内面:ナデ	—
16 - 13	1・2	—	—	弥生	甕	口縁部:同心円状沈線文、内面:ナデ	—
16 - 14	1・2	—	—	弥生	甕	頸部:無文、体部上半:沈線文、内面:ナデ	—
16 - 15	1・2	—	—	弥生	甕	口縁部:弧状沈線文？、内面:ナデ	—
16 - 16	3	D 6	—	弥生	甕	口縁部:弧状沈線文、内面:ナデ	—
16 - 17	1・2	—	—	弥生	甕	口縁部:弧状沈線文	—
16 - 18	1・2	—	—	弥生	甕	口縁部:弧状沈線文、内面:ナデ	—
16 - 19	1・2	—	—	弥生	甕	口縁部:鋸歯状沈線文、内面:ナデ	—
16 - 20	3	—	—	弥生	甕	口縁部:鋸歯状沈線文、内面:ナデ	—
16 - 21	3	F 2	—	弥生	甕	口縁部:沈線文、内面:ナデ	—
16 - 22	1・2	東畑	—	弥生	甕	口縁部:沈線文、内面:ナデ	—
16 - 23	3	B 2	—	弥生	甕	口唇:平縁・無文、口縁:附加縄文帯（綾絡文）、頸部:無文帯、内面:ナデ、胎土:ウンモ含む	外面ススス
16 - 24	1・2	—	—	弥生	甕	口唇:平縁？・無文、口縁部:附加条縄文帯、頸部:附加条縄文帯（綾絡文）・無文帯、内面:ナデ	外内面コゲ
16 - 25	3	E 5	—	弥生	甕	口唇:平縁・無文、口縁部:附加条縄文帯、頸部:無文帯、内面:ナデ	—
16 - 26	3	C 1	—	弥生	甕	口唇:平縁・無文、口縁部:附加条縄文帯、頸部:無文帯、内面:ナデ	—
16 - 27	3	I	—	弥生	甕	口唇:平縁・無文、口縁部:附加条縄文帯、内面:ナデ	—
16 - 28	3	E 7	—	弥生	甕	口唇:平縁？・無文、口縁部:LR縄文、内面:ミガキ	—
16 - 29	3	I	—	弥生	甕	口唇:平縁？・無文、口縁部:無文帯、体部上半:LR縄文？、内面:ナデ	—
16 - 30	3	F	—	弥生	甕	口唇:平縁・無文、口縁部:無文帯、体部上半:附加条縄文、内面:ナデ	—
16 - 31	3	—	—	弥生	甕	頸部:無文帯・附加条縄文帯、体部上半:附加条縄文、内面:ナデ	—
16 - 32	3	C 2	—	弥生	甕	頸部:無文帯・附加条縄文帯、体部上半:附加条縄文、内面:ナデ	外面ススス
16 - 33	3	—	—	弥生	甕	頸部:無文帯、体部上半:附加条縄文（綾絡文）、内面:ナデ	—
16 - 34	3	A 4	—	弥生	甕	頸部:無文帯、体部上半:RL縄文？、内面:ナデ	—
16 - 35	3	A 9	—	弥生	甕	頸部:無文帯、体部上半:RL縄文？、内面:ナデ	—
16 - 36	1・2	—	—	弥生	甕	頸部:無文帯・附加条縄文帯、内面:ナデ	—
16 - 37	1・2	土手	—	弥生	甕	体部:羽状附加条縄文、内面:ナデ	外面コゲ
16 - 38	1・2	—	—	弥生	甕	体部:羽状附加条縄文、内面:ナデ	—
16 - 39	3	B 1	—	弥生	甕	体部:羽状附加条縄文、内面:ナデ	外面コゲ
16 - 40	3	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文（綾絡文）、内面:ナデ	—
16 - 41	1・2	A T 1	I	弥生	甕	体部:羽状附加条縄文、内面:ナデ	—
16 - 42	3	D 8	—	弥生	甕	体部:羽状附加条縄文、内面:ナデ	—
16 - 43	1・2	—	—	弥生	甕	体部:羽状附加条縄文、内面:ナデ	外面ススス
16 - 44	3	F 1	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
16 - 45	3	C 1	—	弥生	甕	体部:羽状附加条縄文、内面:ナデ	—
16 - 46	1・2	A T 1	I	弥生	甕	体部:羽状附加条縄文、内面:ナデ	—

第５表　トレンチ出土土器観察表(1)

挿図	次数	遺構・トレンチ	層位	種別	器種	装飾・文様・地文・器面調整・胎土など	炭化物・顔料等
17 - 47	1・2	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 48	3	A	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 49	1・2	土手	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 50	3	E 4	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 51	1・2	土手	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 52	3	I	—	弥生	甕	体部:附加条縄文?、内面:ナデ	—
17 - 53	3	C 2	—	弥生	甕	体部:附加条縄文・補修孔、内面:ナデ	外面スス
17 - 54	3	C 2	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	外面コゲ
17 - 55	3	E 1	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	外面スス
17 - 56	3	E 4	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 57	1・2	A T 1	I	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	外面スス
17 - 58	1・2	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 59	1・2	D T 2	I	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 60	1・2	B T 3	I	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 61	1・2	東畑	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 62	3	D	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 63	1・2	D T 1	I	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ、胎土:ウンモ含む	—
17 - 64	3	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	外面スス
17 - 65	1・2	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 66	1・2	B T 2	I	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 67	1・2	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 68	3	F	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 69	1・2	D T 2	I	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 70	3	F穴	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 71	1・2	B T	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ?	—
17 - 72	1・2	B T 2	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 73	3	D 6	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	外面スス
17 - 74	1・2	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 75	3	F 1	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 76	3	D 8	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 77	3	D 8	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 78	1・2	A T 1	I	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 79	3	D 1	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 80	1・2	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 81	3	F 6	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 82	3	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 83	3	E 2	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 84	1・2	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 85	1・2	B T 3	I	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 86	3	E 1	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 87	3	F 1	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 88	3	F	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	外面スス
17 - 89	3	E 3	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 90	3	B 9	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 91	1・2	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 92	1・2	土手	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—

第6表　トレンチ出土土器観察表(2)

挿図	次数	遺構・ﾄﾚﾝﾁ	層位	種別	器種	装飾・文様・地文・器面調整・胎土など	炭化物・顔料等
17 - 93	1・2	土手	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 94	3	—	—	弥生	甕	体部下半:附加条縄文、内面:ナデ	—
17 - 95	3	Ｂ１	—	弥生	蓋？	縁辺部:沈線文、内面:ナデ	—
17 - 96	1・2	ＡＴ６	Ⅰ	弥生	蓋？	頂部:円形沈線文、内面:ナデ	—
18 - 97	3	Ａ２	—	続縄文	注口付	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 - 98	1・2	ＡＴ６	Ⅰ	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 - 99	3	Ｃ１	—	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -100	1・2	ＣＴ４	Ⅱ	続縄文	注口付	口唇:平縁？・キザミ？、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	赤色化粧土
18 -101	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁:隆線2本平行+キザミ、体部上:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -102	3	Ｃ２	—	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -103	1・2	ＢＴ５	Ⅰ	続縄文	注口付	口唇:波状・無文？、口縁部:隆線+キザミ？、体部下半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -104	1・2	ＡＴ７	Ⅱ	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外内面コゲ
18 -105	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面スス
18 -106	1・2	ＢＴ２	Ⅰ	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -107	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -108	1・2	ＡＴ８	Ⅱ	続縄文	深鉢	口唇:波状？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
18 -109	1・2	ＡＴ９	Ⅰ	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -110	1・2	ＡＴ８	Ⅰ	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
18 -111	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -112	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -113	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
18 -114	1・2	ＡＴ４	Ⅱ	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -115	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
18 -116	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ・三角形刺突、体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:海綿骨針を含む	赤色化粧土
18 -117	1・2	ＣＴ４	Ⅱ	続縄文	深鉢	口唇:波状？・キザミ？、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
18 -118	1・2	—	—	続縄文	注口付	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -119	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -120	1・2	東畑	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -121	1・2	ＡＴ６	Ⅰ	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
18 -122	1・2	ＡＴ８	Ⅱ	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -123	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ・円形刺突、体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:軟質	—
18 -124	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ・円形刺突、体部上半:微隆線、内面:ナデ、胎土:軟質	—
18 -125	3	Ｂ６	—	続縄文	深鉢	口唇:波状？・キザミ、口縁部:隆線2本+キザミ・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:軟質	—
18 -126	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -127	1・2	ＡＴ６拡	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -128	1・2	ＡＴ５	Ⅱ	続縄文	深鉢	口唇:波状？・キザミ、口縁部:キザミ・微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
18 -129	3	Ａ	Ⅰ	続縄文	深鉢	口唇:波状？・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -130	3	Ａ	Ⅰ	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
18 -131	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -132	3	Ｆ３	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -133	3	Ｆ２	—	続縄文	深鉢	口唇:波状？・キザミ、口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -134	1・2	—	—	続縄文	注口付	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -135	1・2	ＡＴ８拡	Ⅱ	続縄文	注口付	口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -136	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口縁部:隆線+キザミ、体部上半:円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—

第７表　トレンチ出土土器観察表(3)

挿図	次数	遺構・トレンチ	層位	種別	器種	装飾・文様・地文・器面調整・胎土など	炭化物・顔料等
18 -137	1・2	—	—	続縄文	注口付	口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -138	1・2	ＡＴ７	Ⅰ	続縄文	深鉢	口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -139	1・2	—	—	続縄文	深鉢	口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面ススス・内面コゲ
18 -140	3	—	—	続縄文	深鉢	口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
18 -141	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	内面コゲ
18 -142	1・2	ＡＴ７	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
18 -143	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面ススス
18 -144	3	Ｂ10	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -145	1・2	ＡＴ６	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ミガキ、胎土:軟質	外面ススス
19 -146	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:軟質	外面ススス
19 -147	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -148	1・2	ＡＴ７	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -149	3	Ｂ10	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -150	1・2	ＡＴ10	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -151	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -152	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -153	1・2	土手	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	内面コゲ
19 -154	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面ススス
19 -155	3	Ｆ１	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -156	1・2	ＡＴ９	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	内面コゲ
19 -157	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
19 -158	1・2	ＡＴ11	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -159	1・2	ＡＴ８	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -160	1・2	ＡＴ９	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -161	1・2	ＡＴ６	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -162	1・2	ＡＴ８	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -163	1・2	ＡＴ７	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
19 -164	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面ススス
19 -165	3	Ｆ２	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -166	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -167	3	Ａ４	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
19 -168	1・2	ＡＴ８	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
19 -169	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	白色化粧土
19 -170	1・2	ＡＴ８拡	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -171	3	Ｂ７	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ミガキ、胎土:硬質	—
19 -172	3	Ｂ４	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -173	3	Ｂ７	—	続縄文	深鉢	体部上半:三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -174	3	Ｂ８	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
19 -175	1・2	ＡＴ12	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -176	3	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面ススス
19 -177	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	ベンガラ
19 -178	3	Ｂ７	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
19 -179	3	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線・円形刺突、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
19 -180	3	Ｂ７	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -181	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -182	1・2	ＡＴ11	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—

第８表　トレンチ出土土器観察表(4)

挿図	次数	遺構・トレンチ	層位	種別	器種	装飾・文様・地文・器面調整・胎土など	炭化物・顔料等
19 -183	3	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ミガキ、胎土:硬質	—
19 -184	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:三角形刺突、内面:ナデ、胎土:海綿骨針含む	—
19 -185	3	B 7	—	続縄文	深鉢	体部上半:三角形刺突、内面:ミガキ、胎土:硬質	外面スス
19 -186	1・2	C T 4	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	内面コゲ
19 -187	1・2	A T 9	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	白色化粧土
19 -188	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -189	1・2	B T	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:海綿骨針含む	—
19 -190	3	B 8	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -191	3	B 6	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	内面コゲ
19 -192	1・2	A T 9	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	白色化粧土
19 -193	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
19 -194	3	B 9	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
19 -195	1・2	A T 9	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -196	1・2	A T 8	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
20 -197	1・2	A T 9	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
20 -198	1・2	A T 9	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線・三角形刺突、内面:ミガキ、胎土:硬質	—
20 -199	1・2	A T10	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -200	1・2	A T 1	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -201	3	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -202	1・2	A T11	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:軟質	外面スス
20 -203	3	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -204	1・2	B T 1	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -205	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	白色化粧土
20 -206	3	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -207	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
20 -208	1・2	A T 9	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
20 -209	1・2	A T 8	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
20 -210	3	B 6	—	続縄文	深鉢	体部下半:微隆線+帯縄文、内面:ミガキ、胎土:硬質	外内面スス
20 -211	1・2	A T 8	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部下半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:軟質	—
20 -212	1・2	A T 9	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -213	3	B 7	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
20 -214	1・2	A T10	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -215	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -216	1・2	A T13	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	白色化粧土
20 -217	1・2	土手	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	内面コゲ
20 -218	1・2	A T 8	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
20 -219	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
20 -220	1・2	A T 4	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -221	1・2	A T 6	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ミガキ、胎土:軟質	外面スス
20 -222	1・2	A T 5	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -223	3	B 7	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
20 -224	3	C 2	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -225	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -226	1・2	A T 8	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -227	1・2	A T 4	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	外面スス
20 -228	3	F 1	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—

第９表　トレンチ出土土器観察表(5)

挿図	次数	遺構・トレンチ	層位	種別	器種	装飾・文様・地文・器面調整・胎土など	炭化物・顔料等
20 -229	3	B 6	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ミガキ、胎土:硬質	—
20 -230	1・2	A T 5	Ⅱ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -231	1・2	A T 8	Ⅰ	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、体部下半:帯縄文、内面:ミガキ・ナデ、胎土:硬質	外内面スス
20 -232	3	A 2	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、体部下半:帯縄文、内面:ミガキ、胎土:硬質	外面スス
20 -233	3	A 1	—	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、内面ミガキ、胎土:硬質	外面スス
20 -234	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	内面コゲ
20 -235	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、体部下半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
20 -236	1・2	A T 7	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文、体部下半:帯縄文、底部:ナデ、内面:ミガキ・ナデ、胎土:軟質	外面スス
20 -237	1・2	—	—	続縄文	深鉢	体部下半:微隆線+帯縄文、底部:上げ底・ナデ、内面:ナデ、胎土:軟質	—
20 -238	1・2	A T 8	—	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、底部:ケズリ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
21 -239	3	A 8	—	土師器	器台	脚部:ハケメ+ヘラミガキ、内面:ヘラナデ	—
21 -240	3	—	—	土師器	鉢	頸～肩部:ハケメ+ヘラミガキ、内面:ナデ	—
21 -241	1・2	C T 4	Ⅱ	土師器	鉢	頸～肩部:ハケメ+ケズリ・ヘラミガキ、内面:ヘラナデ+ヘラミガキ	外内面スス
21 -242	1・2	B T 2	Ⅰ	土師器	鉢	頸部:ハケメ、内面:ヘラナデ+ヘラミガキ	外面スス
21 -243	1・2	A T 4	Ⅰ	土師器	鉢	頸部:ヘラミガキ、内面:ハケメ	外面スス
21 -244	1・2	—	—	土師器	鉢	口縁部:ヘラミガキ、内面:ヨコナデ+ヘラミガキ	—
21 -245	3	D 2	—	土師器	鉢	肩部:ヘラミガキ、内面:ナデ+ヘラミガキ、胎土:ウンモ含む	内面朱
21 -246	3	B 4	—	土師器	壷	頸部:ヘラナデ、内面:ヘラミガキ	外内面朱
21 -247	3	—	—	土師器	壷	口縁部:ハケメ+ヨコナデ	外面スス
21 -248	3	—	—	土師器	壷	体部上半:ハケメ、内面:ナデ	外面スス
21 -249	1・2	C T 3	Ⅱ	土師器	壷	口縁部:ヨコナデ+ヘラミガキ、内面:ヘラミガキ	外内面朱
21 -250	3	—	—	土師器	坩	頸部:ヘラミガキ、内面:ヘラミガキ	—
21 -251	3	—	—	土師器	壷	口縁部:ヘラミガキ、内面:ナデ	—
21 -252	3	—	—	土師器	壷	口縁部:ヘラミガキ、内面:ナデ	—
21 -253	3	F 2	—	土師器	壷	口縁部:ヨコナデ+ヘラミガキ、内面:ヘラミガキ	—
21 -254	1・2	B T 4	Ⅱ	土師器	壷	口縁部:タテヘラミガキ、内面:ヨコナデ+ヘラミガキ	—
21 -255	1・2	—	—	土師器	壷	口縁部:ヨコナデ、内面:ヨコナデ+ヘラミガキ、胎土:ウンモ含む	—
21 -256	1・2	A T 9	Ⅰ	土師器	壷	口縁部:ヨコナデ+ヘラミガキ、内面:ヨコナデ	—
21 -257	3	—	—	土師器	壷	口縁部:ナデ+ヘラミガキ、内面:ナデ、胎土:ウンモ含む	外内面朱
21 -258	3	C 1	—	土師器	壷	口縁部:ヨコナデ+ヘラミガキ、内面:ヨコナデ+ヘラミガキ	—
21 -259	1・2	—	—	土師器	壷	口縁部:ヨコナデ+ヘラミガキ、内面:ハケメ+ヨコナデ	—
21 -260	3	G	—	土師器	壷	口縁部:ヘラナデ、内面:ヘラミガキ	内面スス
21 -261	3	D 9	—	土師器	壷・甕	口縁部:ヨコナデ、内面:ヨコナデ	—
22 -262	3	—	—	土師器	壷・甕	口縁部:ナデ、内面:ヨコナデ	外内面スス
22 -263	3	F 1	—	土師器	壷・甕	口縁部:ヨコナデ+ヘラナデ、内面:ヨコナデ	外面スス
22 -264	3	—	—	土師器	壷・甕	口縁部:ヘラナデ+ヘラミガキ、内面:ナデ+ヘラミガキ	—
22 -265	1・2	—	—	土師器	壷・甕	口縁部:ハケメ+ヨコナデ、内面:ヨコナデ	—
22 -266	1・2	土手	—	土師器	壷	口縁部:有段・ヘラナデ+ヘラミガキ、内面:ヘラナデ	—
22 -267	3	D 9	—	土師器	壷	口縁部:有段・ハケメ+ヘラミガキ、内面:ヘラミガキ	外面朱
22 -268	1・2	—	—	土師器	壷	口縁部:有段・ヘラナデ、頸部:ヘラミガキ、内面:ヘラミガキ	外面朱
22 -269	1・2	B T 1	Ⅰ	土師器	壷	肩部:ハケメ+ヨコナデ、内面:ヨコナデ、胎土:ウンモ含む	—
22 -270	3	A 6	—	土師器	鉢	底部:ヘラミガキ、内面:ナデ	—
22 -271	3	B 6	—	土師器	坩	体部:ヘラミガキ、内面:ヘラナデ+ヘラミガキ、胎土:ウンモ含む	外面朱

第10表　トレンチ出土土器観察表(6)

挿図	次数	遺構・ﾄﾚﾝﾁ	層位	種別	器種	装飾・文様・地文・器面調整・胎土など	炭化物・顔料等
23 - 1	表採	—	—	続縄文	注口付	口唇:波状？・キザミ、口縁:隆線2本平行+キザミ・三角形刺突、体部上:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
23 - 2	表採	—	—	続縄文	注口付	注口部:三角形刺突・キザミ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
23 - 3	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	—
23 - 4	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ・円形刺突、体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ 胎土:軟質	—
23 - 5	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文、内面:ナデ、胎土:軟質	外面スス
23 - 6	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ・円形刺突、体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、 内面:ナデ・ミガキ、胎土:軟質	—
23 - 7	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状？・キザミ、口縁部:隆線2本+キザミ・円形刺突、体部下半:微隆線・円形刺突、内面:ナデ、胎土:軟質	—
23 - 8	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ・円形刺突、体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、 内面:ミガキ、胎土:軟質	—
23 - 9	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ・三角形刺突、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、 内面:ナデ、胎土:硬質	—
23 - 10	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ミガキ、 胎土:軟質	—
23 - 11	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ
23 - 12	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外内面スス
23 - 13	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	外面コゲ、内面スス
23 - 14	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	白色化粧土
23 - 15	表採	—	—	続縄文	注口付	口唇:波状・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	赤色化粧土
23 - 16	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:波状？・キザミ、口縁部:隆線2本平行+キザミ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
23 - 17	表採	—	—	続縄文	深鉢	口縁部:隆線+キザミ、体部上半:微隆線・円形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	白色化粧土
23 - 18	表採	—	—	続縄文	深鉢	口縁部:隆線+キザミ、体部上半:三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
23 - 19	表採	—	—	続縄文	深鉢	口唇:平縁？・キザミ、口縁部:微隆線+帯縄文、体部上半:帯縄文、内面:ナデ、胎土:硬質	外内面コゲ
23 - 20	表採	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:軟質	—
23 - 21	表採	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:軟質	—
23 - 22	表採	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
23 - 23	表採	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ナデ、胎土:軟質	—
23 - 24	表採	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・円形刺突、内面:ミガキ、胎土:軟質	—
23 - 25	表採	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
23 - 26	表採	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	—
23 - 27	表採	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ、胎土:硬質	白色化粧土
23 - 28	表採	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ナデ・ミガキ、胎土:硬質	外面コゲ
23 - 29	表採	—	—	続縄文	深鉢	体部上半:微隆線+帯縄文・三角形刺突、内面:ミガキ、胎土:軟質	内面コゲ
23 - 30	表採	—	—	続縄文	深鉢	体部下半:微隆線+帯縄文、底部:ナデ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
23 - 31	表採	—	—	続縄文	深鉢	体部下半:帯縄文、底部:ナデ、内面:ナデ、胎土:硬質	—
23 - 32	表採	—	—	続縄文	深鉢	底部:帯縄文十字？・縁辺キザミ、内面:ナデ、胎土:海綿骨針含む	—
24 - 33	表採	—	—	弥生	甕	口縁部:縦位刺突列・沈線文、内面:ナデ	—
24 - 34	表採	—	—	弥生	甕	口縁部:刻目状列点文・沈線文、内面:ナデ	—
24 - 35	表採	—	—	弥生	甕	口縁部:沈線文（２本沈線）、内面:ナデ	—
24 - 36	表採	—	—	弥生	甕	体部上半:波状沈線文？、内面:ナデ	—
24 - 37	表採	—	—	弥生	甕	体部上半:波状沈線文？、内面:ナデ	—
24 - 38	表採	—	—	弥生	甕	体部上半:波状沈線文？、内面:ナデ	—
24 - 39	表採	—	—	弥生	甕	体部上半:波状沈線文？、内面:ナデ	外面スス

第11表　採集土器観察表(1)

挿図	次数	遺構・トレンチ	層位	種別	器種	装飾・文様・地文・器面調整・胎土など	炭化物・顔料等
24 - 40	表採	—	—	弥生	甕	体部上半:波状沈線文？、内面:ナデ	—
24 - 41	表採	—	—	弥生	甕	体部上半:沈線文、内面:ナデ	—
24 - 42	表採	—	—	弥生	甕	体部上半:沈線文、内面:ナデ	—
24 - 43	表採	—	—	弥生	甕	体部上半:波状沈線文？、内面:ナデ	—
24 - 44	表採	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
24 - 45	表採	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
24 - 46	表採	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
24 - 47	表採	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
24 - 48	表採	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
24 - 49	表採	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
24 - 50	表採	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
24 - 51	表採	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
24 - 52	表採	—	—	弥生	甕	体部:附加条縄文、内面:ナデ	—
24 - 53	表採	—	—	弥生	甕	底部:附加条縄文、内面:ナデ	—
24 - 54	表採	—	—	土師器	高坏	坏部:ヘラミガキ、内面:ヘラミガキ	外内面朱
24 - 55	表採	—	—	土師器	壷・甕	底部:ハケメ	—
24 - 56	表採	—	—	土師器	坩	口縁:ヨコナデ＋タテヘラミガキ、内面:ヘラミガキ	—
24 - 57	表採	—	—	土師器	壷	口縁:ヨコナデ、内面:ヨコナデ	外内面朱
24 - 58	表採	—	—	土師器	壷	口縁:ヘラナデ、内面:ヘラミガキ	外内面朱
24 - 59	表採	—	—	土師器	甕	口縁:ヘラナデ、内面:ヨコナデ	—
24 - 60	表採	—	—	土師器	甕	口縁:ハケメ＋ヨコナデ、内面:ハケメ＋ヨコナデ、胎土:ウンモ含む	—
24 - 61	表採	—	—	土師器	壷	頸部:隆線＋キザミ、体部上半:ハケメ＋ヨコナデ、内面:ハケメ＋ヨコナデ	—
24 - 62	表採	—	—	土師器	壷	頸部:ハケメ＋ヨコナデ・隆線＋キザミ、内面:ハケメ	外面朱
24 - 63	表採	—	—	土師器	壷・甕	頸部:ヘラミガキ、内面:ヨコナデ	—

第12表　採集土器観察表(2)

V　盛岡周辺の関連遺跡

近年、岩手県内においても、終末期の弥生土器や続縄文土器、古式土師器が出土したり、関連遺構が検出される例が増えているが、ここでは北上川上流域である盛岡周辺（西根町、岩手町、玉山村、滝沢村、雫石町、盛岡市）における該期の遺跡について集成をおこなった（遺跡の番号は、第27図の遺跡分布図と対応する）。なお、盛岡市教育委員会で調査を行った遺跡のうち未報告のものの詳細は後日報告予定であるので、関連する遺物についてのみ一部を図化し掲載した。また、採集遺物についても一部を図化し掲載した。

1　**暮坪遺跡**（西根町寺田字暮坪、高橋・武田1982）
　立地：丘陵の中の沢　　遺物：北大Ⅰ式、弥生終末？　　出土状況：表面採集（高橋昭治）
2　**上斗内Ⅲ遺跡**（西根町寺田字上斗内、(財)岩手県埋蔵文化財センター1984）
　立地：松川支流沿いの丘陵低位段丘　　年次・主体：S57(財)県埋文センター　　遺構：なし
　遺物：北大Ⅰ式　　出土状況：遺構外
3　**堀切遺跡**（西根町平館字堀切、斎藤1993）　遺物：後北式？
4　**御堂観音上遺跡**（岩手町御堂、岩手町教委1995）遺物：後北C2-D式　出土状況：表面採集（高橋昭治）
5　**小山沢Ⅰ遺跡**（岩手町小山沢、高橋・武田1982）　遺物　：後北C2-D式？
6　**尾呂部Ⅰ遺跡**（岩手町沼宮内字尾呂部、草間1976）　遺物：弥生終末？
7　**大坊Ⅱ遺跡**（岩手町大坊、岩手県立博物館1982）　遺物：赤穴式　　出土状況　：表面採集（高橋昭治）
8　**大安良遺跡**（岩手町沼宮内、草間1976）　遺物：弥生終末？
9　**苗代沢C遺跡**（岩手町苗代沢、高橋1965,佐藤1976,高橋・武田1982）
　立地：北上川北岸の河岸段丘　　遺物：後北C2-D式　　出土状況：表面採集（高橋昭治）
10　**犬袋遺跡**（岩手町犬袋、高橋・武田1982）
　立地：北上川の河岸段丘　　遺物：後北C2-D式　　出土状況：表面採集（高橋昭治）
11　**豊岡遺跡**（岩手町一方井字久保、草間1976）　遺物：弥生終末？
12　**仏沢遺跡**（岩手町黒石字仏沢、草間1976,斎藤1993）　遺物：赤穴式
13　**大股開拓遺跡**（岩手町一方井18地割、岩手町教育委員会1996）
　立地：七時雨山山麓丘陵地　　年次・主体：H7岩手町教委　　遺構：なし　　遺物：赤穴式
　出土状況：表土、表面採集（高橋昭治）
14　**黒内開拓遺跡**（岩手町一方井字黒内、草間1976）　遺物：弥生終末？
15　**仙波堤遺跡**（岩手町久保字沢口、草間1976）　遺物：弥生終末？
16　**稲荷山遺跡**（岩手町浮島、高橋・武田1982）
　立地：浮島古墳群北の丘陵突端　　遺物：後北C2-D式　　出土状況：表面採集（高橋昭治）
17　**新道平遺跡**（岩手町川口、草間1976）　　年次・主体：S49岩手大学　　遺物：赤穴式

18 **川口Ⅱ（川口松原）遺跡**（岩手町子抱、草間1976）　遺物　弥生終末？

19 **川口Ⅰ遺跡**（岩手町川口12地割二ツ森、(財)岩手県埋蔵文化財センター1984）

立地：北上川東岸の低位段丘　年次・主体：S57.58(財)県埋文センター　遺構：土壙墓？

遺物：赤穴式、後北C2-D式　出土状況：遺構外

20 **芋田遺跡**（玉山村芋田、吉田・武田1970,高橋・武田1982、第37図）

立地：北上川東岸の段丘端部　遺物：後北C2-D式　出土状況：表面採集（武田良夫）

21 **武道遺跡**（玉山村武道、高橋・武田1982、第37図）

立地：北上川東岸の段丘端部　遺物：赤穴式、後北C2-D式　出土状況：表面採集（武田良夫ほか）

22 **下田八幡館（牡丹野）遺跡**（玉山村渋民牡丹野、吉田・武田1970,佐藤1976）

立地：北上川西岸の台地　遺物：後北C2-D式　出土状況：表面採集（武田良夫）

23 **大石渡Ⅴ遺跡**（滝沢村滝沢字大石渡、滝沢村教育委員会1995,岩手考古学会1996）

立地：諸葛川支流に挟まれた山地緩斜面　年次・主体：H6.7滝沢村教委　遺構：焼土

遺物：赤穴式、後北C2-D式、塩釜式、ラウンドスクレイパー、黒曜石

出土状況：焼土内およびその周辺、遺構外

24 **大石渡Ⅲ遺跡**（滝沢村滝沢字大石渡、滝沢村教育委員会1995）　遺物：弥生終末？

25 **大石渡遺跡**（滝沢村滝沢字上中村・大石渡、滝沢村教育委員会1993）

立地：木賊川と諸葛川に開析された緩斜面　年次・主体：H4滝沢村教委　遺構：土壙墓？

遺物　赤穴式、後北C2-D式、ラウンドスクレイパー、黒曜石、管玉　出土状況：土壙埋土ほか

26 **湯舟沢Ⅱ遺跡**（滝沢村滝沢字湯舟沢、滝沢村教育委員会1991ほか滝沢村教委の御教示）

立地：市兵衛川沿いの低位段丘　年次・主体：H2滝沢村教委　遺構：なし　遺物：天王山式

出土状況：遺構外

27 **湯舟沢Ⅲ遺跡**（滝沢村滝沢字湯舟沢、滝沢村教育委員会1986）

立地：市兵衛川沿いの低位段丘　年次・主体：S57.58滝沢村教委、(財)県埋文センター

遺構：住居跡　遺物：天王山式、後北C2-D式　出土状況：住居埋土、遺構外

28 **湯舟沢Ⅷ遺跡**（滝沢村滝沢字湯舟沢、滝沢村教育委員会1986）

立地：市兵衛川沿いの低位段丘　年次・主体：S57.58滝沢村教委、(財)県埋文センター

遺構：なし　遺物：天王山式　出土状況：遺構外

29 **湯舟沢Ⅹ遺跡**（滝沢村滝沢字湯舟沢、滝沢村教育委員会1986）

立地：市兵衛川沿いの低位段丘　年次・主体：S57.58滝沢村教委、(財)県埋文センター

遺構：なし　遺物：天王山式、後北C2-D式　出土状況：遺構外

30 **湯舟沢XV遺跡**（滝沢村滝沢字湯舟沢、滝沢村教育委員会1990）

立地：市兵衛川沿いの低位段丘　遺物：天王山式　出土状況：表面採集（滝沢村教委）

31 **湯舟沢XX遺跡**（滝沢村滝沢字湯舟沢、滝沢村教育委員会1995）

立地：市兵衛川沿いの低位段丘　遺物：弥生終末？　出土状況：表面採集（滝沢村教委）

32 **けやきの平団地遺跡**（滝沢村滝沢字湯舟沢、滝沢村教育委員会1995）　遺物：弥生終末？

33 **外山Ⅳ遺跡**（滝沢村滝沢字外山、滝沢村教育委員会1991）

立地：諸葛川支流に開析された南東緩斜面　遺物：赤穴式　出土状況：表面採集（滝沢村教委）

34 **狐洞山遺跡**（滝沢村滝沢字平蔵沢、滝沢村教育委員会1995）　遺物：弥生終末？

35 **耳取遺跡**（滝沢村滝沢字耳取、滝沢村教育委員会1986）

立地：諸葛川と支流による谷底平野に接する緩斜面　年次・主体：S59.60(1次)滝沢村教委

遺構：なし　遺物：塩釜式　出土状況：遺構外

36 **室小路15遺跡**（滝沢村滝沢字室小路、滝沢村教委の御教示）

年次・主体：H8滝沢村教委　遺物：赤穴式、後北C2-D式　出土状況：遺構外

37 **室小路10遺跡**（滝沢村滝沢字室小路、滝沢村教育委員会1995）　遺物：弥生終末？

38 **高柳遺跡**（滝沢村鵜飼字高柳ほか、滝沢村教育委員会1987）

立地：諸葛川西岸の低位段丘　年次・主体：S60.62(2.3次)滝沢村教委　遺構：なし

遺物：北大Ⅲ式、黒曜石　出土状況：古墳時代の遺構埋土、遺構外

39 **仏沢Ⅱ遺跡**（滝沢村鵜飼字鬼越、滝沢村教育委員会1995）　遺物：弥生終末？

40 **仏沢Ⅲ遺跡**（滝沢村鵜飼字鬼越・黒沢、滝沢村教育委員会1987,1993,高橋與右衛門・高橋信雄1991）

立地：沢沿いに形成された緩斜面　年次・主体：S61.H2滝沢村教委　遺構：土壙墓？

遺物：赤穴式、後北C2-D式、塩釜式、ラウンドスクレイパー、黒曜石

出土状況：包含層、土壙埋土

41 **御仮屋山館遺跡**（滝沢村鵜飼字稲荷、滝沢村教委の御教示）

年次・主体：H8(試掘)滝沢村教委　遺物：赤穴式　出土状況：試掘トレンチ

42 **大釜館遺跡**（滝沢村大釜字外館、滝沢村教委の御教示）

年次・主体：H5滝沢村教委　遺物：赤穴式　出土状況：中世の遺構埋土ほか

43 **参郷の森遺跡**（滝沢村大沢字参郷の森、武田1978）　遺物：赤穴式　出土状況：表面採集（武田良夫）

44 **白山遺跡**（滝沢村大釜字白山、滝沢村教育委員会1995）　遺物：弥生終末？

45 **八幡宮遺跡**（滝沢村大釜字釜口、滝沢村教育委員会1995）　遺物：弥生終末？

46 **仁沢瀬Ⅳ遺跡**（滝沢村大釜字仁沢瀬、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1993）

立地：雫石川北岸の小岩井台地縁辺　年次・主体：H3(財)県埋文センター　遺構：土壙

遺物：後北C2-D式、北大式、住社式、ラウンドスクレイパー　出土状況：土壙埋土ほか

47 **早坂森遺跡**（雫石町西山、高橋・武田1982）

遺物：丘陵末端の西に開く沢　遺物：後北C2-D式　出土状況：表面採集（武田良夫）

48 **伝久遺跡**（雫石町西安庭字伝久、(財)岩手県埋蔵文化財センター1981）

立地：雫石川支流南岸の洪積低位段丘　年次・主体：S49県埋文センター　遺構：なし

遺物：赤穴式　出土状況：遺構外

49 **上野遺跡**（盛岡市繋字上野、(財)岩手県埋蔵文化財センター1980）

立地：雫石川南岸の尾根状台地先端部　年次・主体：S52県埋文センター　遺構：なし

遺物：赤穴式　出土状況：包含層内

50 **繋Ⅴ遺跡**（盛岡市繋字館市、盛岡市教育委員会1995）

立地：雫石川南岸の低位段丘　年次・主体：H6(18次)盛岡市教委　遺構：なし

遺物：赤穴式、後北C2-D式　出土状況：包含層上部

51 **繋Ⅵ遺跡**（盛岡市繋字萪内沢、(財)岩手県埋蔵文化財センター1980）

立地：雫石川南岸の山地末端部　年次・主体：S52県埋文センター　遺構：土壙

遺物：天王山式　出土状況：土壙埋土内

52 **上猪去遺跡**（盛岡市猪去上平、盛岡市教育委員会1991）

立地：雫石川南岸の中位段丘縁辺　年次・主体：H2(1次)盛岡市教委　遺構：なし

遺物：赤穴式　出土状況：平安以降の遺構埋土および包含層

53 **猪去館遺跡**（盛岡市猪去上平、盛岡市教育委員会1989）

立地：雫石川南岸の中位段丘縁辺　年次・主体：S63(1次)盛岡市教委　遺構：なし

遺物：後北C2-D式　出土状況：平安の遺構検出面

54 **オミ坂遺跡**（盛岡市上鹿妻蟹沢、盛岡市中央公民館1972）

立地：飯岡山北側斜面　年次・主体：S38 岩手大学・盛岡市公民館　遺構：なし

遺物：赤穴式　出土状況：包含層？

55 **月見山（月山）遺跡**（盛岡市上飯岡第23地割山中、吉田・武田1970、第37図）

立地：飯岡山北東裾部　遺物：後北C2-D式　出土状況：表面採集（武田良夫）

56 **八卦遺跡**（盛岡市中太田八卦、第31図）

立地：雫石川南岸低位沖積段丘　年次・主体：S63.H2(3.4.5次)盛岡市教委　遺構：なし

遺物：赤穴式　出土状況：遺構検出面および表土

57 **志波城跡**（盛岡市下太田方八丁ほか、盛岡市教育委員会1986）

立地：雫石川南岸低位沖積段丘　年次・主体：S55.58(16.30次)盛岡市教委　遺構：なし

遺物：赤穴式　出土状況：遺構外

58 **台太郎遺跡**（盛岡市向中野台太郎、盛岡市教育委員会1987、第30図）

立地：雫石川南岸の低位沖積段丘　年次・主体：S60(3.4次)盛岡市教委　遺構：なし

遺物：赤穴式、後北C2-D式　出土状況：奈良・平安の遺構埋土および表土

59 **大新町遺跡**（盛岡市大新町・南青山町、第28図）

立地：滝沢台地の南西縁辺　遺物：赤穴式、アメリカ式石鏃　出土状況：表面採集（盛岡市教委）

60 **前九年遺跡**（盛岡市前九年一・二丁目・大新町、第28図）

立地：滝沢台地の南縁辺　年次・主体：H5(3次)盛岡市教委　遺構：溝跡　遺物：赤穴式

出土状況：溝埋土および包含層上部

61 **宿田遺跡**（盛岡市前九年一丁目、第29図）

立地：滝沢台地南縁辺　年次・主体：H2(1次)盛岡市教委　遺構：円形周溝、溝、土壙墓？

遺物：赤穴式、北大Ⅰ式、南小泉式、ラウンドスクレイパー 、黒曜石

出土状況：遺構埋土および包含層

62 **黒石野遺跡**（盛岡市黒石野１丁目、盛岡市教育委員会1989、第28図）

立地：四十四田丘陵西縁辺　年次・主体：H元(1次)　遺構：なし

遺物：ラウンドスクレイパー、黒曜石　出土状況：トレンチ内

63 **歳ノ神遺跡**（盛岡市山岸名乗、盛岡市教育委員会1985）

立地：四十四田丘陵南部の東麓緩斜面　年次・主体：S57(1次)盛岡市教委　遺構：なし

遺物：赤穴式　出土状況：表土および遺物包含層上部

64 **新茶屋遺跡**（盛岡市山岸六丁目、第30図）

立地：丘陵に囲まれた南向きの緩斜面　年次・主体：H7(2次)盛岡市教委　遺構：なし

遺物：赤穴式　出土状況：包含層上部

65 **銭神沢遺跡**（盛岡市山岸銭神沢、武田1978、第32図）

立地：愛宕山南東緩斜面　遺物：天王山式、赤穴式　出土状況：表面採集（武田良夫）

66 **蒼前遺跡**（盛岡市山岸合間、盛岡市教育委員会1972）

立地：丘陵南斜面　遺物：天王山式　出土状況：表面採集（盛岡市中央公民館）

67 **屠牛場遺跡**（盛岡市山岸三丁目、吉田・武田1970,佐藤1976,高橋・武田1982）

立地：永福寺山南西裾部　遺物：後北C2-D式　出土状況：表面採集（武田良夫）

68 **稲荷社前遺跡**（盛岡市下米内大豆門、武田1978）

立地：米内川西岸の小丘陵斜面　遺物：天王山式、赤穴式　出土状況：表面採集（武田良夫）

69 **向館遺跡**（盛岡市上米内米内沢、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1994）

立地：米内川北岸の小起伏山地裾部　年次・主体：H4(財)県埋文センター　遺構：なし

遺物：後北C2-D式　出土状況：遺構外

70 **一本松遺跡**（盛岡市下米内一本松、武田1978、第33～36図）

立地：一本松沢北の小起伏山地尾根　遺物：赤穴式　出土状況：表面採集(武田良夫、盛岡市教委)

71 **熊ノ沢遺跡**（盛岡市下米内一本松）

立地：一本松沢北の小起伏山地西斜面　遺物：赤穴式　出土状況：表面採集（盛岡市中央公民館）

72 **鼻子遺跡**（盛岡市東新庄二丁目、盛岡市教育委員会1972）

立地：岩山西麓南斜面　遺物：天王山式　出土状況：表面採集（盛岡市中央公民館）

73 **前野遺跡**（盛岡市浅岸前野）

立地：中津川南岸の低位段丘　年次・主体：H8(2次)盛岡市教委　遺構：なし

遺物：赤穴式、後北C2-D式　出土状況：包含層内

74 **大塚遺跡**（盛岡市浅岸大塚、第29図）

立地：中津川南岸の低位段丘　年次・主体：H5(7次)盛岡市教委　遺構：なし

遺物：赤穴式、北大Ⅰ式　出土状況：表土

75 **柿ノ木平遺跡**（盛岡市浅岸柿ノ木平、第29図）

立地：中津川南岸の中位段丘　年次・主体：H8(10次.試掘)盛岡市教委　遺構：土壙墓？

遺物：赤穴式、後北C2-D式　出土状況：土壙埋土、包含層内、試掘トレンチ

76 **向田遺跡**（盛岡市浅岸向田、盛岡市教育委員会1972）

立地　：岩山北西裾部　遺物：赤穴式　出土状況：表面採集（盛岡市中央公民館）

77 **岩山南遺跡**（盛岡市東中野大久保、盛岡市教育委員会1986）

立地：簗川北岸の山間部にある崖錐性扇状地　年次・主体：S57～59(1～3次)盛岡市教委

遺構：なし　遺物：赤穴式、後北C2-D式　出土状況：表土および二次堆積層内

78 **八木田Ⅰ遺跡**（盛岡市新庄上八木田、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1995）

立地：八木田沢による谷底平地縁辺の緩斜面　年次・主体：H3(財)県埋文センター

遺構：陥し穴？（埋土上部に白色火山灰）　遺物：赤穴式　出土状況：遺構外

79 **八木田Ⅱ遺跡**（盛岡市新庄上八木田、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1993）

立地：八木田沢による谷底平地縁辺の緩斜面　年次・主体：H3(財)県埋文センター

遺構：陥し穴？（埋土上部に白色火山灰）　遺物：なし

80　**八木田Ⅲ遺跡**（盛岡市新庄上八木田、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1992）

立地：八木田沢による谷底平地縁辺の緩斜面　　年次・主体：H2(財)県埋文センター　　遺構：なし

遺物：赤穴式　　出土状況：遺構外

81　**八木田Ⅳ遺跡**（盛岡市新庄上八木田、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1992）

立地：八木田沢による谷底平地縁辺の緩斜面　　年次・主体：H2(財)県埋文センター

遺物：赤穴式、後北C2-D式、塩釜式？　　出土状況：平安の遺構検出面、遺構外

82　**八木田Ⅴ遺跡**（盛岡市新庄上八木田、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1992）

立地：八木田沢による谷底平地縁辺の緩斜面　　年次・主体：H2(財)県埋文センター　　遺構：なし

遺物：赤穴式　　出土状況：遺構外

83　**川目A遺跡**（盛岡市川目第5地割、吉田・武田1970）

立地：簗川南岸の低位段丘　　遺物：後北C2-D式　　出土状況：表面採集（武田良夫）

84　**川目C遺跡**（盛岡市川目第6地割、岩手考古学会1996）

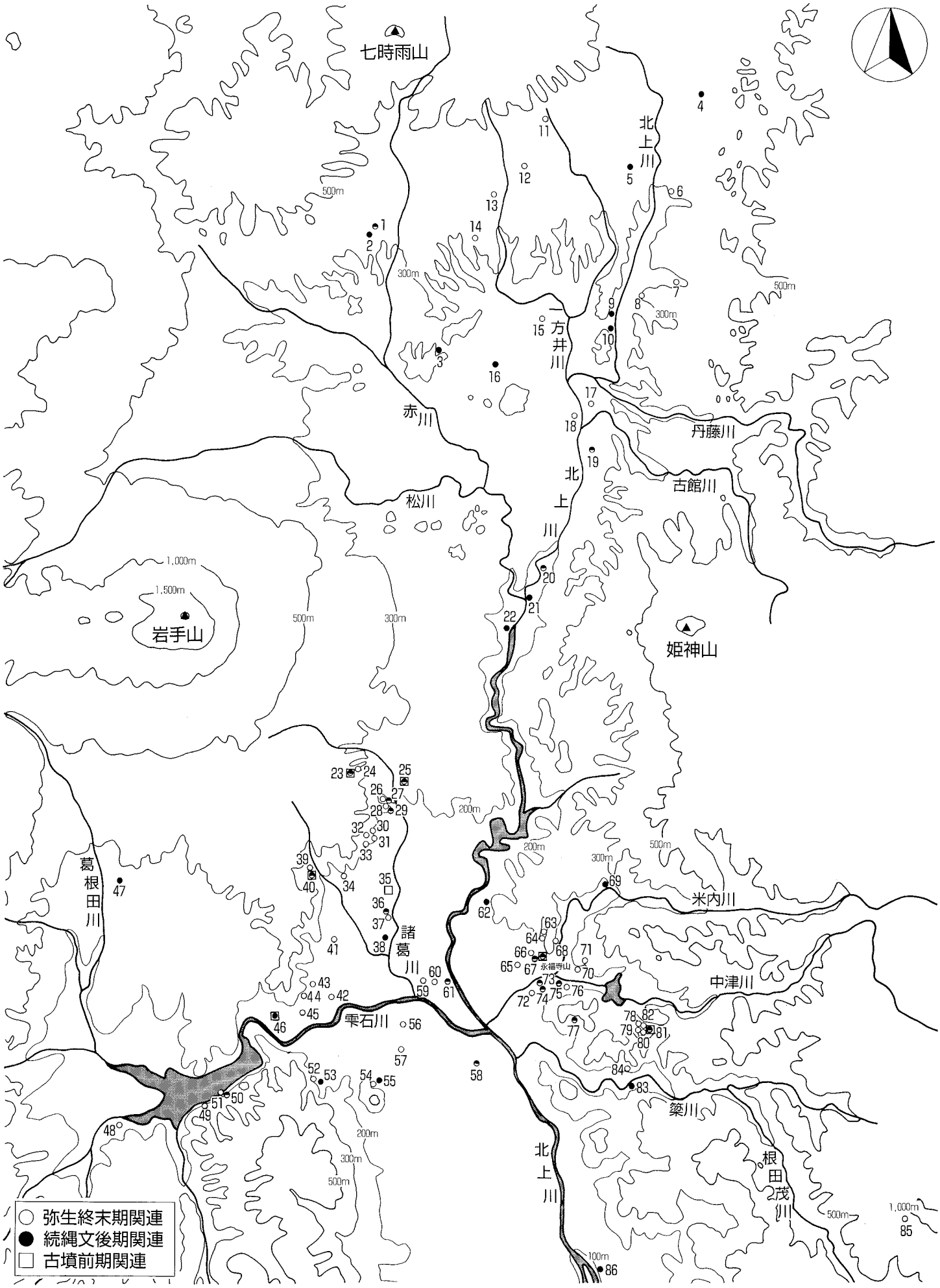
立地：簗川北岸の舌状になった高位段丘　　年次・主体：H6.7(1.2次)盛岡市教委

遺構：陥し穴？(埋土上部に白色火山灰)　　遺物：赤穴式　　出土状況：陥し穴埋土最下層

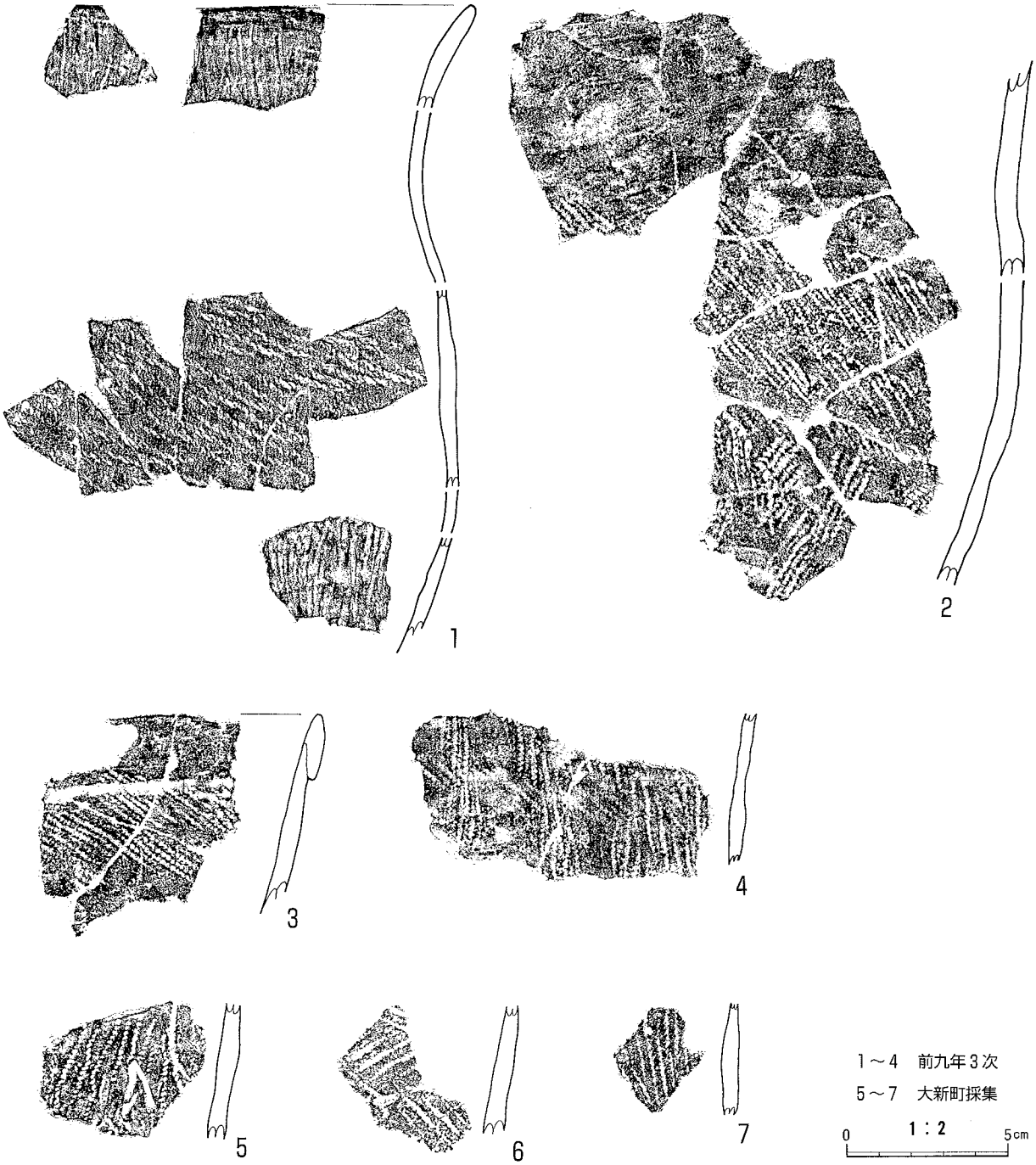
85　**手代木沢岩陰遺跡**（盛岡市砂子沢手代木沢、神原1987）

立地：桐ノ木沢支稜の山林内　　遺物：赤穴式　　出土状況：表面採集（盛岡市教委）

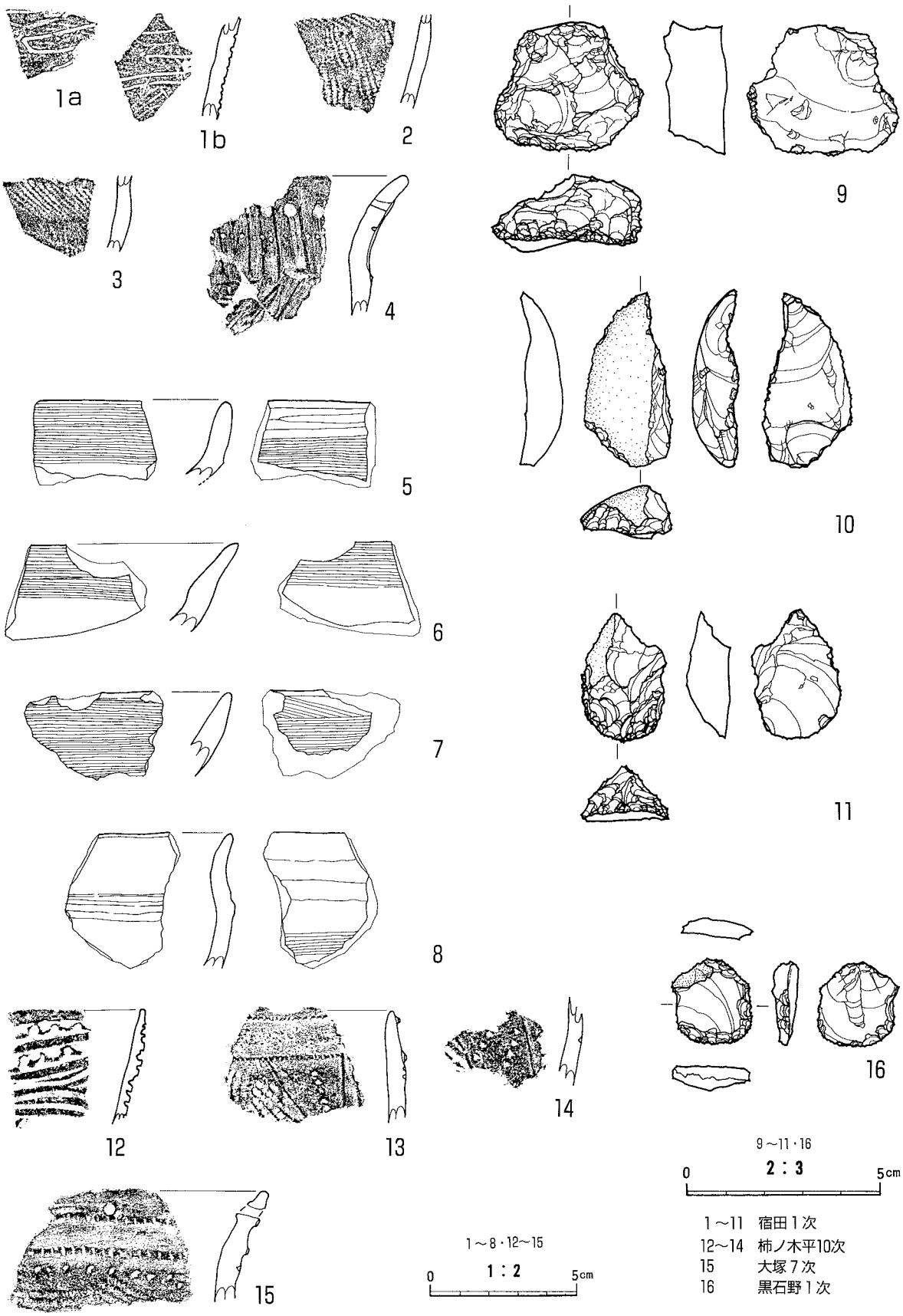
86　**乙部方八丁遺跡**（盛岡市乙部第32地割新田、吉田・武田1970）　遺物：後北式？



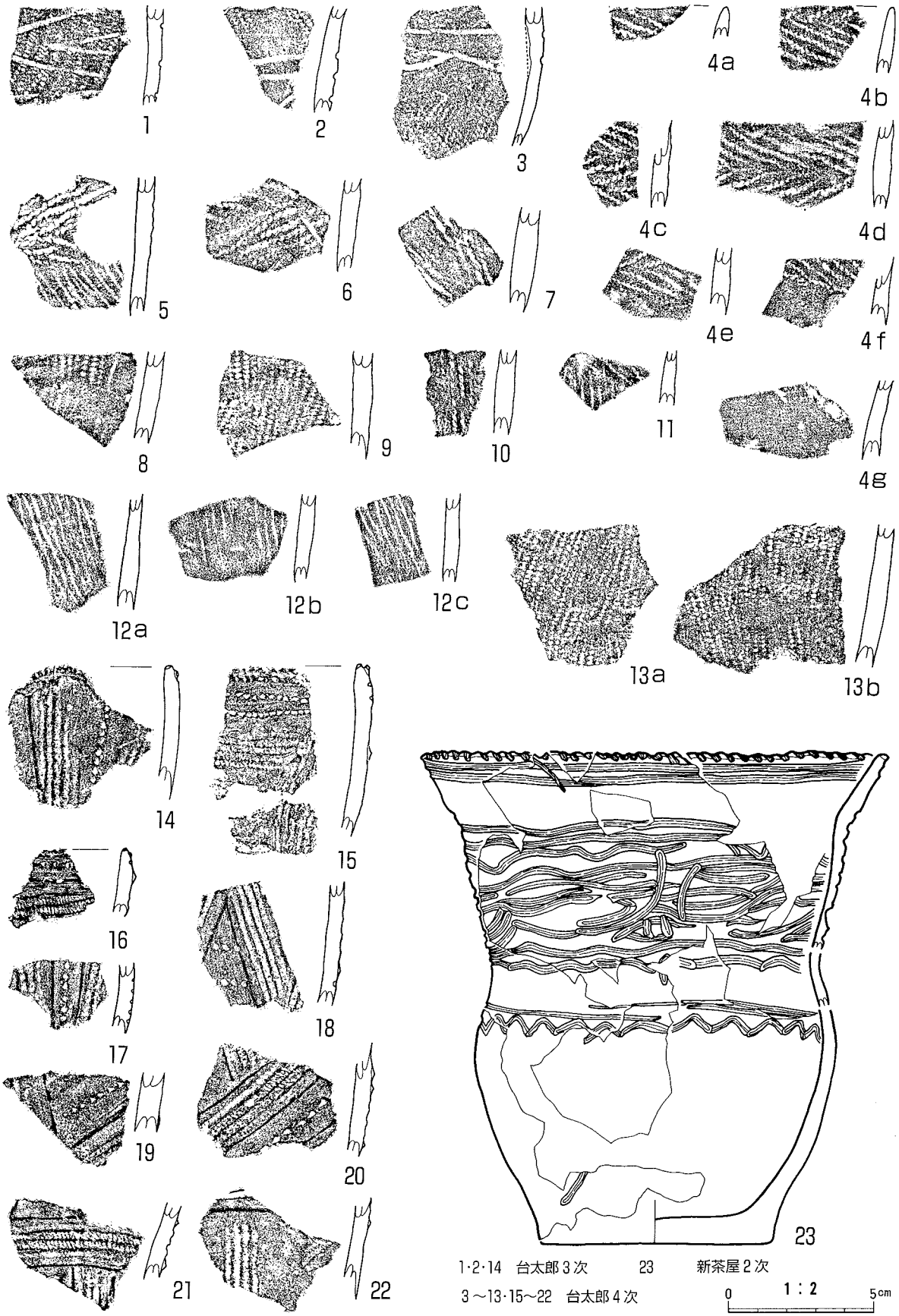
第27図　盛岡周辺の関連遺跡分布図（1:100,000）



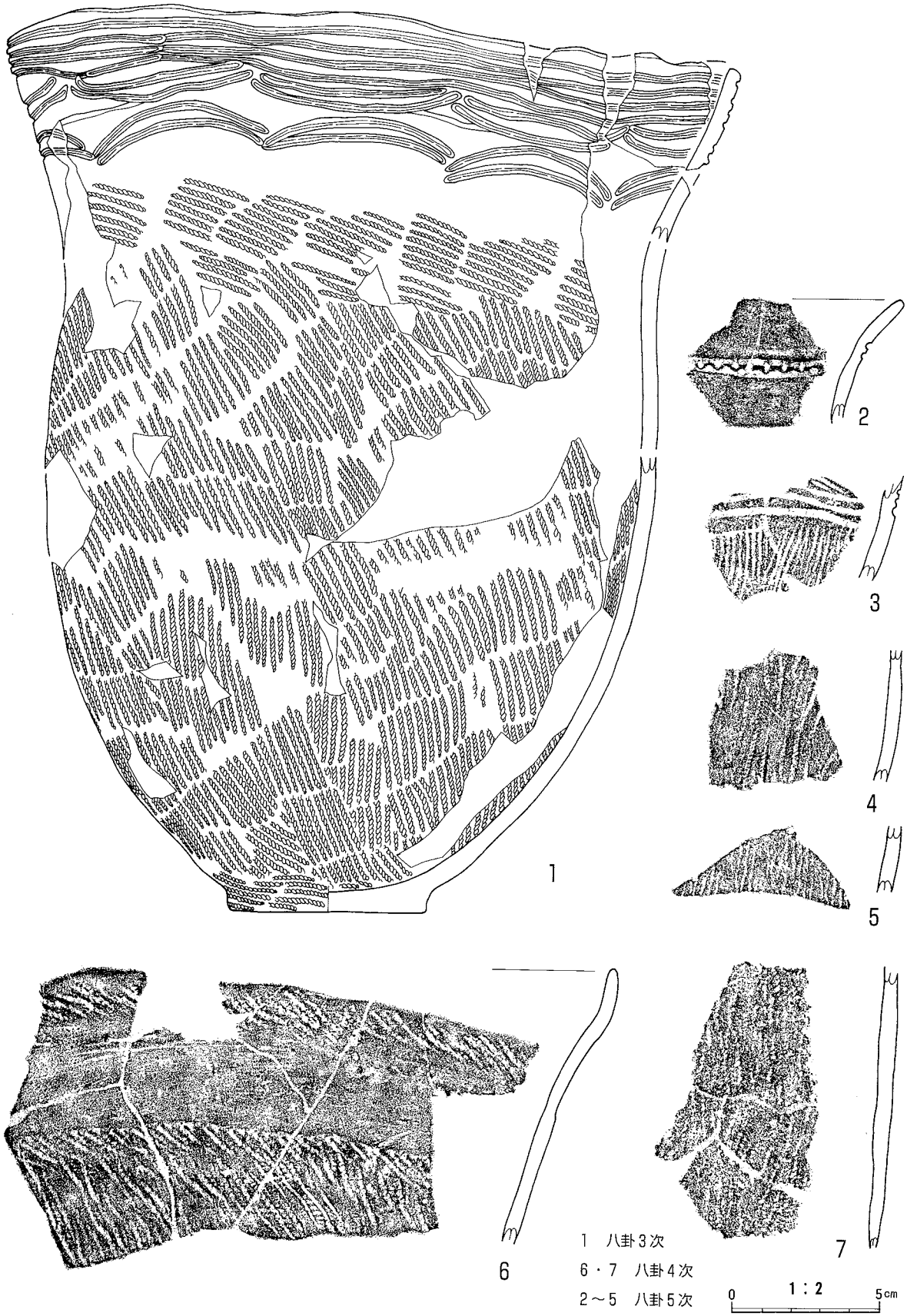
第28図　前九年遺跡・大新町遺跡出土遺物



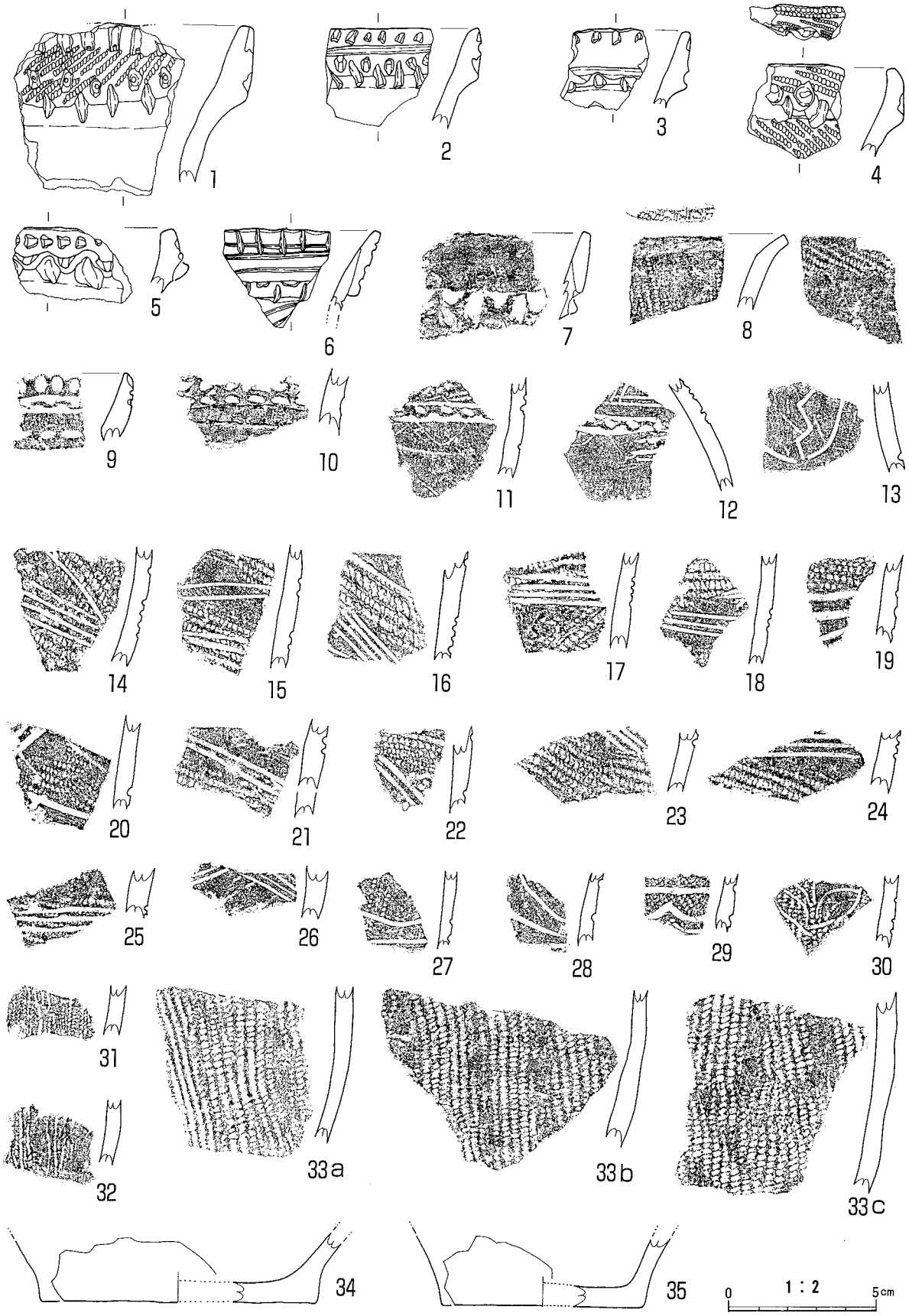
第29図　宿田遺跡・柿ノ木平遺跡・大塚遺跡・黒石野遺跡出土遺物



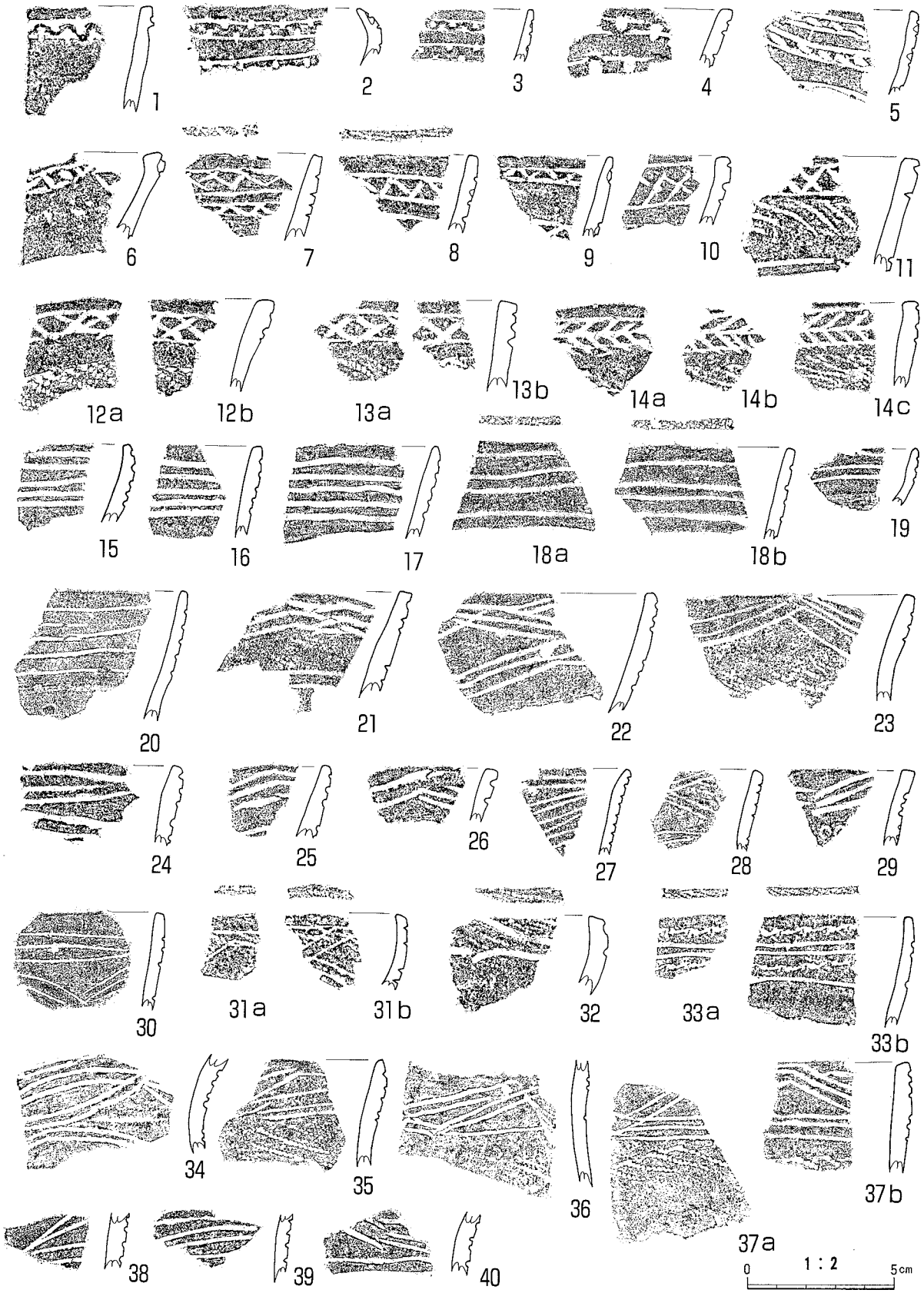
第30図　台太郎遺跡・新茶屋遺跡出土遺物



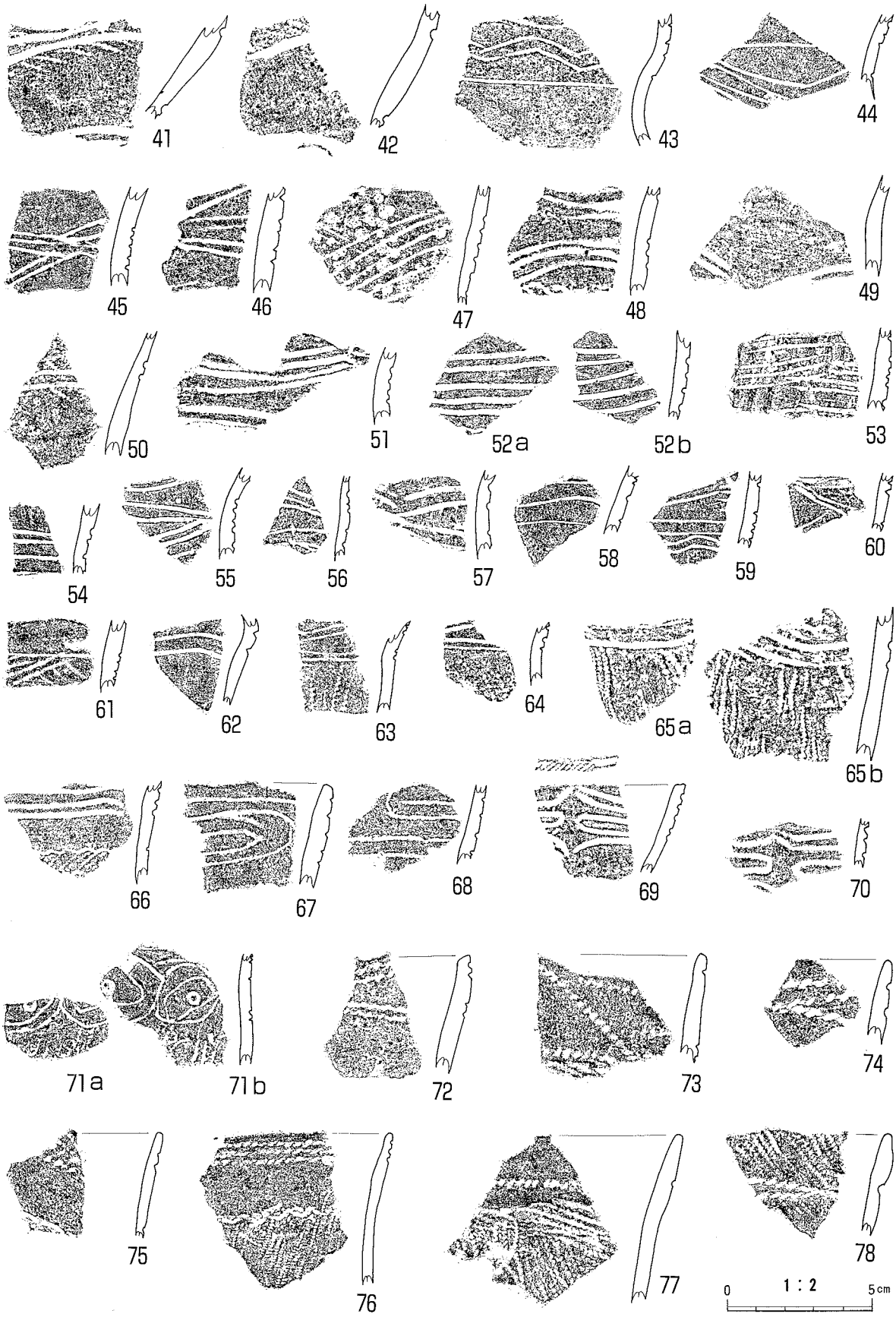
第31図　八卦遺跡出土遺物



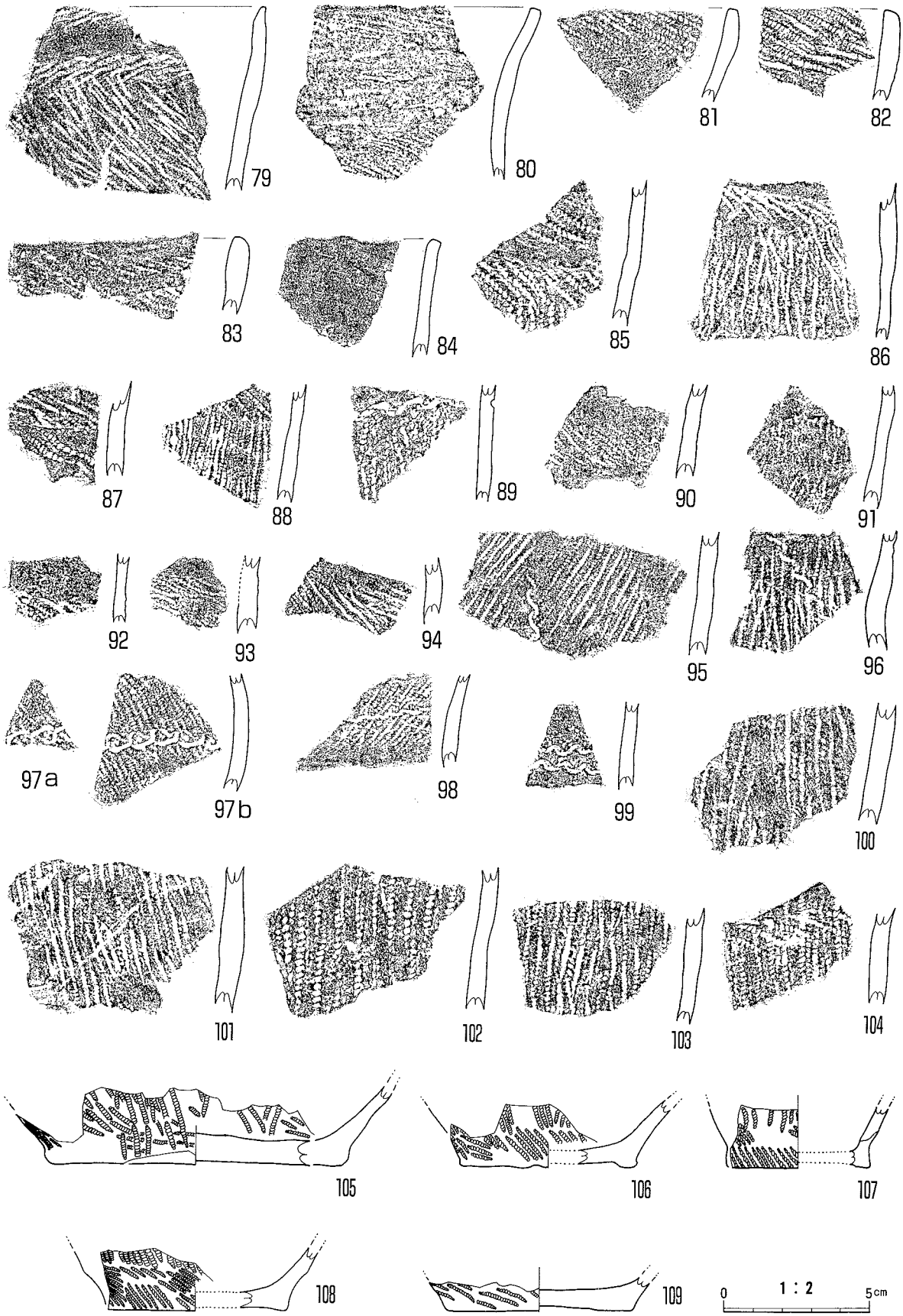
第32図　銭神沢遺跡採集遺物



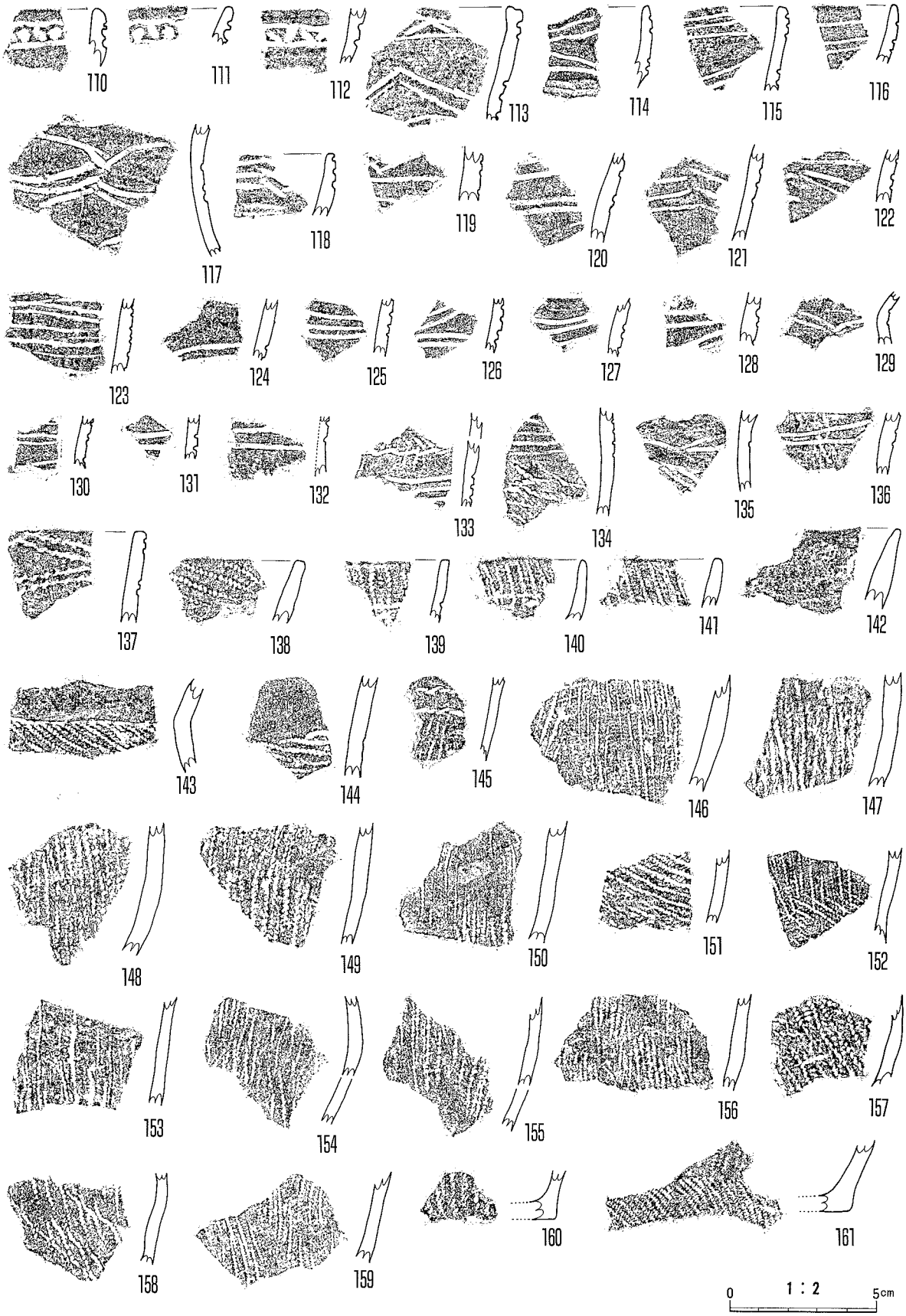
第33図　一本松遺跡採集遺物（1）



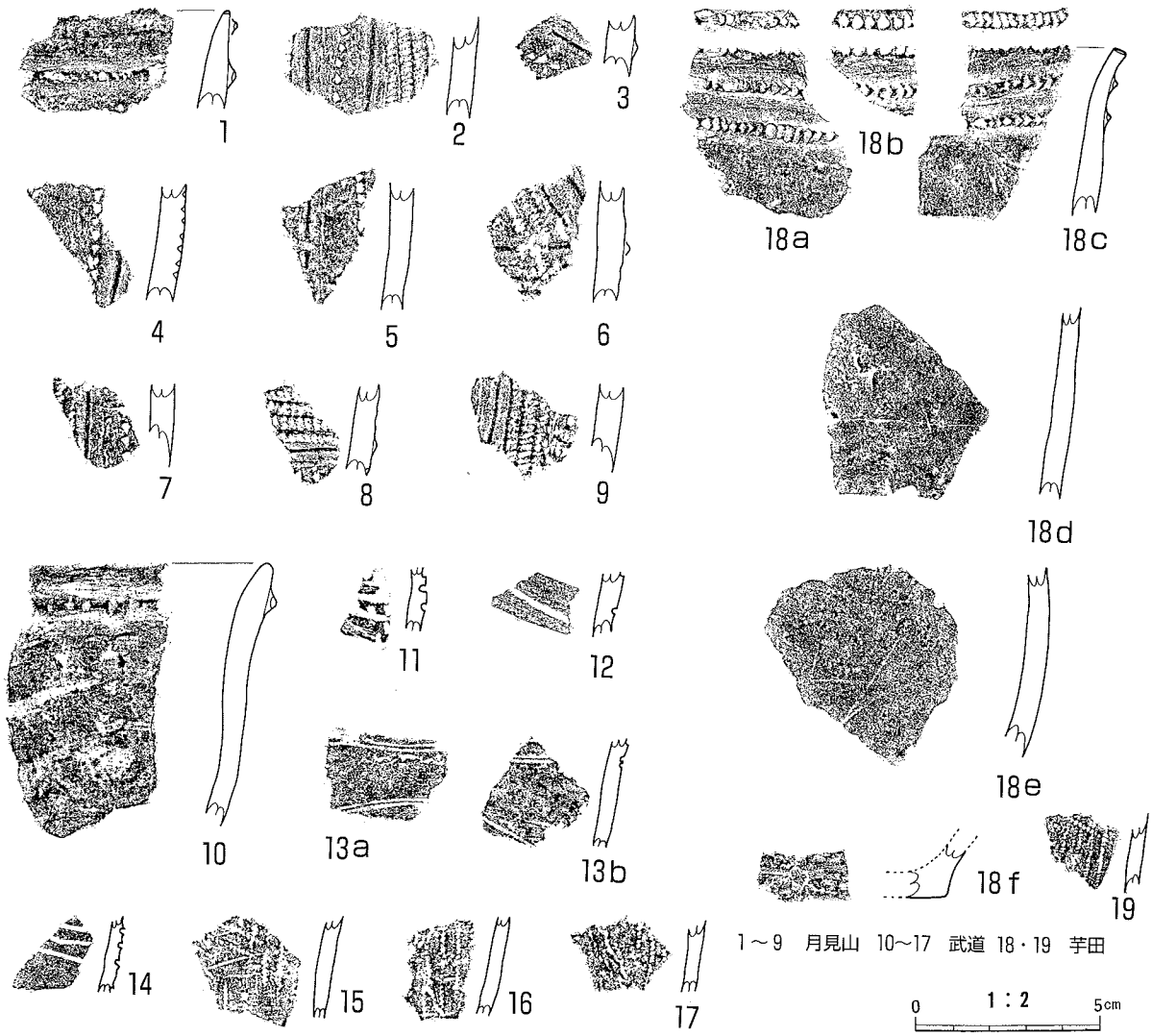
第34図　一本松遺跡採集遺物（2）



第35図　一本松遺跡採集遺物（3）



第36図　一本松遺跡採集遺物（４）



第37図　月見山遺跡・武道遺跡・芋田遺跡採集遺物

Ⅵ　遺構・遺物の検討

1．土壙墓

永福寺山遺跡検出の土壙墓

永福寺山遺跡で確認された土壙墓は、丘陵の頂部東半部において検出されているが、部分的な調査のため遺跡全体での土壙墓の広がりは不明である。土壙墓の構築時期については、後述するようにⅢ・Ⅳ群土器（後北C2-D式期中段階・塩釜式期新段階）の時期と考えられる。以下では比較的詳細のわかる土壙墓１～５について検討を行う。

形　態　土壙墓１～５の平面形はすべて楕円形であり、土壙墓１～３の底面には長軸両端に小ピット、土壙墓４・５の底面には長軸端に袋状ピットと小ピットが検出されている。また規模も類似しており、長軸の上端が1.34～1.61m、下端が1.14～1.54m、短軸の上端が1.12～1.22m、下端が0.91～1.10m、深さが0.61～0.84mとなっている。

長軸線　土壙墓の長軸線を底面長軸両端に掘り込まれる一対のピット中央を通す線として当時の図面から計測すると、土壙墓１～５の長軸線の傾きの平均はN36°Eを示し、各土壙墓ではN18°～58°Eと40°の開きがあるが、基本的には北東－南西方向に長軸線を求めて構築されているようである。計測値が近い土壙墓1・3の長軸線の傾きの平均はN20°E、同じく計測値が近い土壙墓２・４の平均はN33.5°Eを示しており、13.5°の差が認められる。また、土壙墓５の長軸線の傾きはN58°Eを示し、土壙墓１～４と比べやや東にふれている。

配　置　土壙墓１～５は、北西－南東方向に並列しているが、土壙墓２・３が重複していること、また土壙墓の長軸線の傾きの差から土壙墓１・３、土壙墓２・４という２基一対の単位が考えられ、調査当時に土壙墓２が土壙墓３より新しいと認識されていることから、土壙墓２・４→土壙墓１・３という構築の時間差が想定される。対となる土壙墓の長軸線間の距離は、土壙墓1・３間が3.55m、土壙墓２・４間が3.32mと近似した数値となっている。

ピット群　これら土壙墓周囲にはピット群が検出されている。ピットの径は0.15m前後、深さは0.3m前後あり、各土壙墓の周囲に円～半円状に分布している。当時の図面を検討すると、屈曲する断面のものが多いことから、それらは木根など自然の撹乱である可能性があり、ピット群すべてが土壙墓に付随するものとは考えられない。しかし、土壙墓１の北東にあるＰ３からは鉄鎌が２点出土しており、埋納施設としてのピットも存在するようである。土壙墓の周囲にピット群が検出された例は少なく、北海道余市町天内山遺跡１・７号墳墓の周囲に検出された「柱穴状の小孔」（余市町教育委員会1971）の例はあるが、構築時期が十勝茂寄式期と永福寺山遺跡より新しい時期のものである。

北海道・東北北部における土壙墓の形態と変遷

次に、北海道・東北北部より検出されている古墳時代の土壙墓の形態について検討を行う。なお土壙墓形態の諸特徴については下記のように、平面形をＡ～Ｅ、壁の付属施設をａ～ｅ、底面の付属施設を１～５に分類した。分類名称については各報文の記載を参照しながら再分類したものである。 分　類

〈平面形〉	〈壁の付属施設〉	〈底面の付属施設〉
Ａ　円形	ａ　片壁下端に袋状ピット	１　片端にピット
Ｂ　楕円形	ｂ　片壁上端に張出	２　両端にピット
Ｃ　隅丸方形	ｃ　ａ・ｂに合口土器	３　四隅にピット
Ｄ　長方形	ｄ　斜位・横位に土器埋設	４　合口土器
Ｅ　方形	ｅ　なし	５　なし

円形土壙墓の検出例としては、北海道では、札幌市Ｔ３６１遺跡（札幌市教委1987)、苫小牧市タプコプ遺跡（苫小牧市教委1984)、函館市石倉貝塚（(財)北海道埋蔵文化財センター1996）において多く検出されている。Ｔ３６１遺跡・石倉貝塚ではＡｅ５型の土壙墓が主体であり、少数ながらタプコプ遺跡においてはＡｅ１～３・５型の土壙墓が検出されている。この３遺跡では後北C2-D式期古～中段階の遺物が多く出土している。北海道においては、円形の平面形を基調とし、頭部付近に遺物を副葬する墓制が縄文時代晩期以降、十勝茂寄式期まで地域差を持ちながら踏襲される傾向にあるようである。 円形土壙墓

東北北部では後北式期の円形土壙墓はまだ確認されていない。

楕円形土壙墓の検出例としては、北海道では、後北C2-D式期中～新段階に相当する北海道恵庭市柏木Ｂ遺跡(恵庭市教委1981)、石狩町ワッカオイ遺跡(石狩町教委1975,1976)、余市町大川遺跡(余市町教委1994)において、従来のＡ型ではなくＢ～Ｅ型の土壙墓が主体となっている。ワッカオイ遺跡ではＢｄ１・Ｂｄ５・Ｂｅ１・Ｂｅ５型など多様な形態の土壙墓が構築される。 楕円形土壙墓

東北北部では、永福寺山遺跡検出の土壙墓がＢａ１型（土壙墓４・５）・Ｂｅ２型（土壙墓１～３）である。また、秋田県能代市寒川Ⅱ遺跡（秋田県教育委員会1988）ではＢａ１・Ｂｅ２型の土壙墓が主体となっており、各土壙墓の長軸線はほぼ東西を示し、並列に間隔を持って配置されている。若干の長軸線の傾きの違いから、永福寺山遺跡と同じく２基一対の単位が想定される。１基を除いて各土壙墓底面からは、副葬品と考えられる後北C2-D式期中段階の深鉢・注口付深鉢が１または２個体出土しており、多くは正立状態にあり、口縁部に欠損（打ち欠き？）が見られる以外は目立った破損はない。一方、埋土より出土した深鉢は底部を欠くなど本来の機能（保存・煮沸）を失わせたものが多い。

このほか付属施設がない土壙墓の例としては、岩手県滝沢村大石渡遺跡（滝沢村教委1993）において、Ｂｅ５型の土壙墓が北西－南東方向に３基並列して検出されたと報告されている。各土壙墓の主軸方向は北東－南西方向を示し、土壙墓検出面より後北C2-D式期中段階の注口付深鉢、黒曜石製石器・剥片などが出土している。また、滝沢村仏沢Ⅲ遺跡ではＢｅ５型の土壙

墓２基、Ｄｅ５型の土壙墓４基が検出され、うち１基より後北C2-D式期新段階の深鉢（口縁部～体部上半）が長軸東端埋土上面より倒立して出土している（滝沢村教育委員会の御教示）。

以上のように、東北北部では平面形が楕円形である土壙墓が主流であり、円形が根強い北海道と対照的である。なお、北海道においても後北C2-D式段階には東北北部からの影響と考えられる楕円形土壙墓も出現し、ワッカオイ遺跡のように楕円形が主体となる遺跡もあり、次第に楕円形が円形と共存するようになる。

変　遷　永福寺山遺跡検出の土壙墓は、寒川Ⅱ遺跡と類似した形態・構造を持ち、塩釜式期新段階＝後北C2-D式期中段階の構築年代となる。これらに後続する時期の例としては青森県天間林村森ヶ沢遺跡（国立歴史民俗博物館1994）がある。森ヶ沢遺跡からは南小泉式期と考えられるＢａ５・Ｂｅ５型の土壙墓が多数検出され、付属する袋状ピットに須恵器・土師器・北大式土器を重ねて副葬しているものもある。これら３遺跡の土壙墓形態に大きな変化は認められないことから、東北北部では、付属施設を伴う楕円形土壙墓を長軸を揃えて並列させる墓制が塩釜式期に出現し、南小泉式期まで踏襲されていたと考えられる。

一方、古墳文化が浸透している東北南部においては古墳とは別に、付属施設を伴わない長方形・方形の土壙墓による在地墓制が存在する。宮城県蔵王町諏訪館前遺跡（宮城県教委1992）では南小泉式期のＤｅ４型土壙墓が１基検出されており、坏２個体、小形甕１個体を重ねて副葬している。

楕円形土壙墓を主体とした東北北部の墓制も住社式期になると変化が現れる。岩手県滝沢村仁沢瀬Ⅳ遺跡（(財)岩手県埋文センター1993）ではＥｂ４型、秋田県横手市田久保下遺跡（秋田県教委1992）ではＤａ４・Ｄｂ４・Ｄｃ５型の土壙墓が検出されており、東北地方南部からの影響と考えられる長方形・方形土壙墓の一般化と合口土器を長軸上に副葬するという傾向が強くなる。しかし一方では付属施設として袋状ピットを伴い、黒曜石片を散布するように、従来からの要素も残っている。

しかし、栗囲式期になると岩手県北上市岩崎台地遺跡群（(財)岩手県埋文センター1995）で見られるように黒曜石を伴いながらも古墳が出現し、以後東北北部を中心に各地で終末期古墳群が造営されるようになり、従来の系統をくむ土壙墓は確認できず、その後の状況は不明である。

２．土器

永福寺山遺跡から出土した土器群は、

Ⅰ群土器：縄文土器、Ⅱ群土器：弥生土器、Ⅲ群土器：続縄文土器、Ⅳ群土器：土師器

と大別できる。このうち、Ⅰ群土器については、縄文早期の日計式、中期の大木８ａ式、後期の門前式などが出土している。以下、Ⅱ～Ⅳ群土器について、土器群の特徴、編年的位置の検討を行う。

（1）Ⅱ群土器：弥生土器

a．器種・器形の分類

甕・壺形土器

出土している弥生土器は完形のものがなく、小破片が多いことから、甕形土器と壷形土器を明確に分類することはできない。ただし、第16図１は、推定される頸部の径が比較的小さいことから、壷形土器である可能性がある。これら甕・壷形土器を口縁部の断面形によって分類すると以下のようになる。

① 頸部が屈曲し、口縁部がやや受口状になるもの（第16図4,24,25）

② 頸部が屈曲し、口縁部がひらくもの（第16図6,28,29）

③ 頸部の屈曲がわずかで、口縁部にかけて緩やかに開くもの（第16図23,26,27,30）

口唇部形態は、平縁のものが多いが、第16図５は波状縁で頂部にキザミが入る。また底部については、平底のもの（第17図94）と上げ底のもの（第８図９）がある。

蓋形土器

第17図95は、甕形土器にしては口縁部のひらきが大きく、口唇部のつくりも異質であることから、笠状の蓋形土器の縁辺部と考えられる。また、第17図96も、底部にしては底面がやや盛り上がり、沈線文が施文され、摩滅痕もみられないことから、笠状の蓋形土器の頂部と考えられる。該期の蓋形土器の類例は盛岡市八木田Ｖ遺跡出土土器（(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1992）に見られる。

b．文様・装飾の分類

口縁部文様帯

① 交互刺突文：平行沈線間に上下から刺突を加える典型的技法のもの（第16図1,2）。1は上下２段に施文され、下に斜行する附加条縄文帯が施文されている。

② 鋸歯状刺突文：交互刺突文の退化技法と考えられ、平行沈線の間にななめに上下からの刺突を加え、鋸歯状の文様となっている（第16図４）。

③ 刻目状列点文：交互刺突文の退化技法と考えられ、平行沈線間に連続して横から刺突を加え、列点状の文様となっている（第24図34）。

④ 沈線文：２本以上の平行沈線により文様を描くもの。文様の展開が十分わかるものがないものの、第16図4,7,9は弧状沈線文、8,10は菱状沈線文、6,11は工字文風沈線文、13は同心円状沈線文、19,20は鋸歯状沈線文と考えられる。

⑤ 縄文帯：斜行する附加条縄文が帯状にめぐるもの（第16図23,24,25,26）。23には綾絡文が中央にみられる。

⑥ 無文帯：口唇部直下が無文帯となっているもの（第16図29,30）。

頸部文様帯

① 縦位刺突列：第16図3・第24図33は、上方向からの刺突が列状にならぶ。

② 縄文帯：斜行する附加条縄文が帯状に施文されるもの。第16図24,36のように無文帯の中に

斜行する附加条縄文帯が施文されるもの、31,32のように無文帯の下に斜行する附加条縄文帯が施文されるものがある。

③ 無文帯：第16図23,25,26など、口縁部が縄文帯となると、その下の頚部が無文帯となっている。

体部文様帯

① 羽状構成の附加条縄文が施文されるもの（第16図38～46）。

② 縦走または斜行する附加条縄文が施文されるもの（第16図1,29～35,37,第17図47～93,第24図44～53）。

c．胎土

胎土については、在地に縄文時代からよく見られるもので、砂粒を比較的多く含む明るい褐色のものが多く、雲母や海綿骨針などは見られない。

d．顔料

ベンガラなどの顔料の付着は観察されなかった。

e．炭化物

器面に炭化物の付着が観察されるものもあるが、それらは外面にコゲ状のこびりつきやスス状のわずかな炭化物がみられるもので、内面にまで炭化物の付着が観察できたものは少ない（第16図24）。また、スス状に比べ、コゲ状の付着が見られるものはわずかであった。

f．Ⅱ群土器の編年的位置

本遺跡出土Ⅱ群土器は、その口縁部の文様等から以下のように類型化できると考えられる。

Ⅱ群a類：口縁部に典型的な交互刺突文が施文されるもの（第16図1,2）。

b類：口縁部に退化した交互刺突文が施文されるもの（第16図4）。

c類：口縁部に2本以上の平行沈線による各種沈線文が施文されるもの（第16図4～22）。

d類：口縁部に附加状縄文帯が施文されるもの（第16図23～28）。

e類：口縁部が無文帯となるもの（第16図29, 30）。

さて、岩手県における弥生終末期土器群は、交互刺突文の存在から「天王山式系」と認識され、これまで「常盤式」「湯舟沢式」「赤穴式」といった土器型式が設定されてきた（小田野1987）。斉藤邦雄（1993）は交互刺突文のバリエーションを時間差ととらえて編年を整理し、

交互刺突文様浮線文段階 → 交互刺突文段階 → 退化交互刺突文段階 → 特殊撚糸文段階

（常盤式）　（湯舟沢式）

天王山式相当段階　　赤穴式相当段階

という考えを示した。以下では、この考えを基準に各段階を天王山式期古段階・新段階、赤穴

式期古段階・新段階と呼称し、北上川上流域における弥生終末期土器群を検討する。

銭神沢遺跡出土土器（第32図）：武田良夫による採集資料を検討すると以下のように類型化できる。

a類：二重口縁で、上下からの縦位の刺突列やキザミが施文されるもの（第32図1,2,4）。

b類：二重口縁で、交互刺突文様浮線文が施文されるもの（第32図3,5,6,7）。

c類：口縁部または体部上半に平行沈線間の刻目状交互列点文が施文されるもの（第32図9,11,12）。

d類：列点文が重層して施文されるもの（第32図10）。

e類：１本沈線による沈線文。第32図13は縦位の鋸歯状沈線文、30は葉状沈線文である。

f類：２本以上の平行沈線による直線的な沈線文が施文されるもの（第32図14～26）。

g類：２本以上の平行沈線による弧状沈線文（第32図27～29）。

h類：口縁部に附加条縄文が施文されるもの（第32図8）。

体部破片の多くは斜行または縦走する単節縄文が施文されている。

以上のうち、a・b・f類は天王山式期古段階、c・d・e・g・h類は赤穴式期古段階に相当すると考えられる。

湯舟沢Ⅲ・Ⅷ・Ⅹ遺跡出土土器（滝沢村教委1986）：竪穴住居跡、遺構外から出土した「湯舟沢Ⅲ類土器」は「湯舟沢式」の標式資料であり、天王山式期新段階に相当する。

繋Ⅵ遺跡出土土器（(財)岩手県埋文センター1980）：土壙埋土より同一個体の土器片が出土しており、典型的な技法の交互刺突文の存在から天王山式期新段階に相当すると考えられる。

八木田Ⅲ・Ⅴ遺跡出土土器（(財)岩手県埋文センター1992）：遺構外から出土している第Ⅵ群土器は、退化した交互刺突文や２本以上の平行沈線による菱状・鋸歯状・連弧状などの沈線文、斜行・縦走する附加条縄文がみられることなどから、赤穴式期古段階に相当すると考えられる。

一本松遺跡出土土器（第33～36図）：武田良夫などによる採集資料を検討すると以下のように類型化できる。

a類：平行沈線間に上下から刺突を加える典型的な交互刺突文が施文されるもの(第33図1)。

b類：退化した交互刺突文が施文されるもの。第33図2～4は平行沈線間の刻目状交互列点文、第33図5・第36図110・111は平行沈線間の刻目状列点文、第33図6～9・第36図112・113は平行沈線間の鋸歯状刺突文、第33図10～13は平行沈線間の格子状刺突文、第33図14は平行沈線間の綾杉状刺突文である。

c類：２本以上の平行沈線による沈線文（第33図15～第34図71,第36図113～136）。

d類：口縁部に絡条体圧痕文が施文されるもの（第34図72～77,第36図137）。

e類：口縁部に附加条縄文帯が施文されるもの（第34図78～83,第36図138～141）。

f類：口縁部が無文帯となるもの（第35図84,第36図142）。

体部破片のほとんどは斜行または縦走する附加条縄文で、綾絡文が見られるものもある。

以上のうち、a類の１点のみが天王山式期新段階の特徴を示すものの、その他はすべて赤穴式期古段階に相当すると考えられ、a類は古い要素が残って存在したものと考えられる。

八卦遺跡出土土器（第31図）：第３～５次調査において出土した土器群のうち、典型的な交

互刺突文を持つもの（第31図2）は天王山式期新段階の特徴を示すものの、口縁部に２本の平行沈線による連弧状沈線文が施文されるもの（第31図1）、口縁部に附加条縄文帯が施文されるもの（第31図6）は、赤穴式期古段階に相当すると考えられる。

台太郎遺跡出土土器（第30図）：第３・４次調査において出土した土器群のうち、羽状の附加条縄文帯が施文されるもの（第30図4,5）は、赤穴式期新段階に相当すると考えられる。

前九年遺跡出土土器（第28図）：第３次調査において出土した土器群には附加条縄文の施文されたもののみがあり、特に第28図2は羽状構成となっている。また、第28図1は長頸壺になると考えられ、これらは赤穴式期新段階に相当すると考えられる。

オミ坂遺跡出土土器（盛岡市中央公民館1972）：昭和38年調査で出土したもので、体部に３本の平行沈線による流水状の工字文風沈線文が施文される長頸壺であることから、赤穴式期新段階に相当すると考えられる。

ここで以上の土器群と永福寺山遺跡Ⅱ群土器を比較してみると、典型的技法の交互刺突文を持つａ類の２点は天王山式期新段階の特徴が見られるものの、その他はすべて赤穴式古段階に相当すると考えられ、一本松遺跡出土土器群の様相と類似している。よってａ類は古い要素が残ったものと考え、永福寺山遺跡Ⅱ群土器は、赤穴式期古段階に編年的に位置付けられる。

（２）Ⅲ群土器：続縄文土器

ａ．器種・器形の分類

深鉢形土器

出土している続縄文土器は完形のものがなく、小破片が多いため、明確に注口付とわかるもの以外は、すべて深鉢形に分類した。口縁部の断面形を観察すると、ほとんどは体部上半がふくらみ、口縁部にかけて内湾する器形と考えられる（第10図1,2,6,第14図1,2,第18図100,101,127）。口唇部形態は、波状縁のものが存在するのは確かだが（第14図2,第18図98,99,129,130,第23図3,4,5）、平縁のものもあるかどうかは、破片のみでは判断が難しい。底部は、平底のもの（第7図7,第11図21,25,第15図18,第20図236,238,第23図30,31）、上底のもの（第20図237）、平底で底面に文様のあるもの（第15図9,第23図32）がある。

注口付深鉢形土器

器形的には深鉢形土器とほとんど変わらないと考えられるが、注口部分のあるもの、注口部分へのふくらみのあるものを注口付深鉢形土器と分類した。口唇部の形状は、注口部分で山形に外反している（第15図9,第23図1）。注口部は、径が大きく短いもの（第15図9,第23図1）、径が小さく長めのもの（第18図97,第23図2）がある。

ｂ．文様・装飾の分類

口縁部文様帯

① 口唇に平行な２本の隆線を貼り付けて口唇と隆線にキザミを加え、隆線間に三角または円形刺突列を施文するもの（第10図10,第14図2,4,第15図9,第18図123,124,第23図1,4,6,7,8,9）。波状縁の頂部では縦位の隆線も貼り付けられている（第23図4）。

② ①と類似するが、隆線間に刺突列のないもの（第8図1,第10図1,4,8,第14図1,3,4,5,第18図98,100～105,108～122,第23図3,5,10,12～16)。やはり波状縁の頂部では縦位の隆線が貼り付けられている（第10図4,第18図98,第23図3,5)。

③ 口唇に平行に１本の隆線を貼り付けて口唇と隆線にキザミを加えたもの（第10図5,6,9,第18図126～133)。

④ 口唇に平行に微隆線に挟まれた帯縄文が施文され、口唇にキザミを加えたもの（第10図7,第23図19)。

体部上半文様帯

① 微隆線に挟まれた帯縄文が弧状に組み合い、その間に三角または円形刺突列を施文するもの。文様モチーフの全体構成が明確にわかるものはないが、多くの体部上半破片はこれに分類される。

② 微隆線に挟まれた帯縄文が横位または縦位に組み合い、その間に三角刺突列を施文するもの（第10図6,9,第18図128)。

③ 微隆線に挟まれた帯縄文が斜位または縦位に組み合い、刺突列が施文されないもの（第18図129,130)。

④ 微隆線のない帯縄文のみが縦位に施文されるもの（第23図19)。

体部下半文様帯

① 微隆線に挟まれた帯縄文が縦位に施文され、三角刺突列が加えられたもの（第15図9)。

② 微隆線に挟まれた帯縄文が縦位に施文されるもの（第20図237,第23図30)。

③ 微隆線のない帯縄文のみが縦位に施文されるもの。多くの体部下半破片がこれに分類される。

底部文様

第15図9は、底面に微隆線のない帯縄文が十字に施文され、その間に三角刺突列が加えられている。また、第23図32も類似の文様が施文されていると考えられるが、底面周縁にキザミが加えられている。

c．胎土

胎土については、その特徴から以下の３つに分類できる。

① 砂粒を含む硬質の胎土で、色調は暗く、やや薄手に作られているものが多い。

② 砂粒が少なく、海綿動物骨針を多く含む胎土で、色調は①に類似し、やや薄手に作られている。

③ 砂粒が少なく、土師器に類似した軟質の胎土で、色調は明るく、やや厚手に作られている。

d．顔料等

赤色顔料であるベンガラが付着していたり、赤色・白色の化粧土が用いられているものがいくつか存在する。

① ベンガラが、帯縄文を挟む微隆線に付着しているもの（第10図２,第11図19,第14図１,第15図９,第19図177)。

② 赤色化粧土が帯縄文を挟む微隆線に用いられているもの（第18図100,116,第23図15)。

③ 白色化粧土が帯縄文を挟む微隆線に用いられているもの（第10図6,第15図10,11,第19図169,187,192,193,第20図205,216,第23図14,17,27)。

e．炭化物

炭化物の付着が見られるものが多く、外内面にコゲ状のこびりつきやスス状のわずかな炭化物が観察できる。ベンガラや白色化粧土の見られる土器でも、炭化物が付着しているものもある（第10図2,6,第11図19,第14図1,第15図9,10)。

f．Ⅲ群土器の編年的位置

本遺跡出土Ⅲ群土器は、その口縁部や体部上半の文様等から以下のように類型化できると考えられる。

Ⅲ群a類：口縁部に口唇に平行な隆線2本を貼り付けキザミを加え、体部上半は微隆線に挟まれた帯縄文が弧状に組み合い、三角形または円形刺突列が施文されるもの（第8図1,第10図1,2,第14図1～5,第15図9,第18図98,100～105,123,第23図1,3～15)。

b類：口縁部に口唇に平行な隆線1本を貼り付けキザミを加え、体部上半は微隆線に挟まれた帯縄文が弧状に組み合い、三角形または円形刺突列が施文されるもの（第10図5,第18図126,127)。

c類：口縁部に口唇に平行な隆線1本を貼り付けキザミを加え、体部上半は微隆線に挟まれた帯縄文が横位または縦位に組み合い、三角形刺突列が施文されるもの（第10図6,9,第18図128)。

d類：口縁部に口唇に平行な隆線1本を貼り付けキザミを加え、体部上半は微隆線に挟まれた帯縄文が斜位または縦位に組み合い、刺突列が施文されないもの（第18図129,130)。

e類：口縁部に口唇に平行に微隆線に挟まれた帯縄文が施文され、体部上半は微隆線のない帯縄文のみが縦位に施文されるもの（第10図7,第23図19)。

さて、Ⅲ群土器については、微隆線や帯縄文、刺突列などの特徴から、続縄文土器の中でも後北C2-D式期に属すると考えられる。北海道に分布の中心を持つ後北C2-D式土器については、上野秀一(1992)によって、

K135遺跡4丁目地点Ⅶ1群土器→K135遺跡4丁目地点Ⅶ2群土器→
石狩八幡町遺跡ワッカオイ地点D地区出土土器群

と3段階に細分する考えが示されている。

また、斎藤邦夫(1993)は、岩手県内出土の後北式土器を文様要素、文様展開、施文手法などから、

① 微隆線に挟まれた帯縄文による円環状・連弧状・弧状を主要なモチーフとする一群

② 沈線に挟まれた帯縄文による円環状・弧状を主要なモチーフとする一群

③ 口縁部にキザミを加えた隆線が巡り、帯縄文が斜位に展開する一群

の3つにグルーピングし、①を後北C2-D式隆盛期の段階、②③を後北C2-D式隆盛期より後出の段階とする考えを示している。上野による細分をそれぞれ後北C2-D式期古段階・中段階・新段

階と呼称すると、概ね①群は古・中段階、②③群は新段階に相当すると考えられる。

ここで永福寺山遺跡Ⅲ群土器を検討すると、ｄ、ｅ類が刺突列、口縁部の隆線といった文様要素を欠落しているものの、各類とも微隆線に挟まれた帯縄文は存在しており、一方で明確に円環状のモチーフがないこと、口縁部のキザミを加えた隆線が２本のものが多いことなどから、永福寺山遺跡Ⅲ群土器はK135遺跡4丁目地点Ⅶ２群土器に様相が近いと考えられ、後北C2-D式期中段階に編年的に位置づけられる。

また、出土点数は少ないものの盛岡周辺出土の続縄文土器について検討してみると、台太郎遺跡出土の第30図14～22、月見山遺跡出土の第37図1～9、猪去館遺跡出土続縄文土器（盛岡市教育委員会1989）は永福寺山遺跡Ⅲ群土器と類似しており、後北C2-D式期中段階に、武道遺跡出土の第37図10、芋田遺跡出土の第37図18、仏沢Ⅲ遺跡出土続縄文土器（高橋・高橋1991）は後北C2-D式期新段階、宿田遺跡出土の第29図4は北大Ⅰ式期に相当すると考えられる。

（３）Ⅳ群土器：土師器

ａ．器種・器形の分類

出土している土師器は完形のものがなく小破片が多いため、図示できた資料について、口縁部など部位的な特徴により分類を行った。

器台

図示できたのは１点である（第21図239）。脚部のみで、外反しながら八字形に広がるものである。円窓は見られない。器面調整は丁寧なタテ方向のヘラミガキで、内面はナデが施される。

高坏

図示できたのは３点である（第8図10,第12図27,第24図54）。３点とも内湾しながら外傾してのびる坏部のみ残存する。器面調整はヨコナデの後に丁寧なヘラミガキが施される。

鉢

図示できたものは15点である。口縁部・胴部を欠損しているものが多いものの、口縁部の形態から分類すると以下のようになる。

① 口縁部が屈曲して外上方にのびるもの（第21図244）。

② 口縁部が屈曲して内湾しながら外上方にのびるもの（第12図31,第21図240,246）。

③ 口縁部が屈曲して内湾しながら大きく外上方にのびるもの（第21図242,243）。

④ 口縁部が外反して大きく開くもの（第21図241）。

⑤ 口縁部が直線的に大きく外上方にのびるもの（第13図1,第21図250,第24図56）。第22図271はこの類型の口縁部に付く体部と考えられ、坩となる。

器面調整は外面のくびれ部に前段階のハケメやナデが残るものがある。

壺・甕

図示できたのは39点である。いずれも全体形が復元できないため、口縁部の形態から分類すると以下のようになる。

① 複合口縁のもの（第8図11）。口縁部の折り返しが簡略化する。

② 有段口縁のもの（第22図266～268,第24図62）。口縁部外面に稜もしくはゆるやかな段を形

成する。また、口縁部が外反して開き、体部と頸部の境にキザミのある隆帯が巡る。

③　単純口縁のもの。

a 口縁部がわずかに内湾しながら外上方にのびるもの（第12図28,第15図19,第21図249)。

b 口縁部が内湾しながら外傾するもの（第24図57～60)。

c 口縁部が直線的にのびるもの（第12図29,第13図2,3,第21図252～259)。

d 口縁部が外反するもの（第22図262,263)。

e 口縁部が外反し、口唇部に平坦面をもつもの（第22図264,265)。

f 口縁部が外反し、口唇部に丸みをもつもの（第21図260,261)。

b．胎土

胎土については、その特徴から以下の３つに分類できる。

①　砂粒を多く含む硬質の胎土で、色調は明るい黄橙色でやや薄手に作られているものが多い。

②　砂粒を比較的多く含む硬質の胎土で、色調は暗く、やや薄手に作られている。

③　砂粒が少なく軟質の胎土で、色調は明るく、やや厚手に作られている。

c．顔料等

赤色顔料が多数の破片に付着しており、朱と考えられる。

①　高坏・小形丸底鉢・壺などの口縁部破片の多くに、朱が外内面に付着している（第12図27,第13図1,2,第21図245,246,249,250)。

②　口縁部以外の体部破片にも、朱が外面に付着しているものがある（第13図3,第22図267,271,第24図62)。

d．炭化物

炭化物の付着が見られるものもあるが、その多くは外面にスス状のわずかな炭化物が観察できる程度である。

e．Ⅳ群土器の編年的位置

本遺跡出土Ⅳ群土器は、器台・高坏・小形丸底鉢・壺・甕という器種構成とその器形的特徴から東北地方南部の土師器編年における塩釜式期に概ね相当すると考えられる（ただし、第15図19については南小泉式期の壺である可能性がある)。

東北地方における古墳時代前期の土師器は、氏家和典(1957)により「塩釜式」が設定されて以来、その後の調査成果をもとに丹羽茂(1985）が３段階４時期に、次山淳（1992)が高坏・小形丸底鉢・甕の変遷を軸に６段階に区分している。

さらに辻秀人（1994・1995）は、東北南部における古墳出現に関わる畿内庄内式新段階に対応する時期から古墳時代前期を対象とした編年案を提示し、Ⅰ期を畿内庄内式新段階、北陸漆編年５・６群、東海廻間編年Ⅱ式に並行、Ⅱ・Ⅲ期を従来の塩釜式相当とし、さらに器種・器形の消長・変化などから、Ⅰ、Ⅱ期をそれぞれ２段階、Ⅲ期を４段階に細分している。以下では、この辻編年を参考とし、本遺跡で出土点数の比較的多い壺と小形丸底鉢（小形丸底壺の系

譜に連なるものと鉢形のものを小形丸底鉢と呼称する）などの特徴について、他遺跡出土の塩釜式土器との比較検討を行う。

① 壺で頸部にキザミを施した隆帯（第15図20,第24図61,62）や、口縁部に棒状浮文（高橋・武田1982）・円形浮文（伊東1974,国生1978,水沢市教委1978）が見られるものがある。類例としては、いわき市龍門寺遺跡第３号住居跡（いわき市教委1985)、会津坂下町男壇遺跡第１・３号周溝（会津坂下町教委1990)、仙台市戸ノ内遺跡方形周溝墓（仙台市教委1984)、仙台市野田山遺跡第19号住居跡（宮城県教委1992）出土土器等があり、辻編年Ⅰ・Ⅱ期の特徴と考えられる。

② 複合口縁・有段口縁の壺において内面の屈曲が失われるものが多く見られる（第7図10,第8図11,第22図267,268)。類例としては、仙台市今熊野遺跡第１号方形周溝墓（宮城県教委1985)、志波姫町鶴ノ丸遺跡第５・６号住居跡（宮城県教委1980)、郡山市山中日照田遺跡第22・26号住居跡出土土器等があり、辻編年Ⅲ期の特徴と考えられる。

③ 小形丸底鉢で前段階の調整がくびれ部に残るものが多い（第12図30,31,第21図240～242,246,247)。類例としては、志波姫町鶴ノ丸遺跡第５・６号住居跡、郡山市山中日照田遺跡第１号住居跡出土土器等があり、辻編年Ⅲ期の特徴と考えられる。

④ 口縁部が直線的に大きく外上方にのびる甘が見られる（第13図1,第21図250,第24図56)。類例としては、いわき市龍門寺遺跡第６・７号住居跡（いわき市教委1985)、仙台市野田山遺跡第２号住居跡（宮城県教委1992）出土土器等があり、辻編年Ⅲ期の特徴と考えられる。

⑤ 器台の脚部で透孔の消失したものが見られる（第21図239)。類例としては、郡山市山中日照田遺跡第１号住居跡出土土器があり、辻編年Ⅲ期の特徴と考えられる。

以上のうち、①のキザミを施した隆帯や棒状浮文・円形浮文については破片が少なく、また辻編年Ⅲ期にまで残存する要素でもあることから、これらは古い要素が残ったものと考えられ、本遺跡出土Ⅳ群土器は、塩釜式期新段階（辻編年Ⅲ期）に位置づけられる。

（４）永福寺山遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群土器の編年的関係

永福寺山遺跡においては、それぞれ異系統であるⅡ～Ⅳ群土器が土壙墓、トレンチより出土しており、その並行関係が問題となる。土壙墓から出土した破片数の比率からすると（第１表)、Ⅲ群土器（後北C2-D式期中段階）とⅣ群土器（塩釜式期新段階）が共伴もしくは並行関係にあると考えられ、またⅡ群土器（赤穴式期古段階）は、Ⅲ・Ⅳ群土器とは散布範囲がやや異なっていたという状況もあり、それらとは並行関係にはないと考えられる。以下では、永福寺山遺跡以外での弥生終末土器、続縄文土器、古式土師器の編年関係を示す遺跡の事例を検討する。

札幌市　Ｋ１３５遺跡４丁目地点（上野1992）：ⅦＣ層において、後北C2-D式期古段階であるⅦ１群土器と弥生終末土器であるⅢ群土器が分布を重複して出土。Ⅲ群土器は退化した交互刺突文の存在から赤穴式期古段階に並行すると考えられる。

札幌市　北大構内ポプラ並木東地区遺跡（北海道大学1987）：ブロック３において、南小泉式期の坏の破片と北大Ⅰ式期の土器片が出土。

青森県天間林村　森ヶ沢遺跡（国立歴史民俗博物館1994）：15号墓（土壙墓）内において、

南小泉式期の坏と北大Ⅰ式期の片口土器が共伴して出土。

岩手県盛岡市　台太郎遺跡（第30図）：奈良・平安時代の遺構埋土中から、赤穴式期新段階土器片と後北C2-D式期中段階の土器片が出土。

秋田県能代市　寒川Ⅱ遺跡（秋田県教育委員会1988）：第２号土壙墓の埋土上層から後北C2-D式期中段階の土器片が、袋状ピット内から赤穴式期新段階に並行すると考えられる壺形土器が出土。

秋田県西目町　宮崎遺跡（西目町教育委員会1987）：SI02竪穴住居跡の埋土中から南小泉式期の土師器片と北大Ⅰ式期の土器片が集中して出土。

宮城県築館町　伊治城跡（築館町教育委員会1992）：SD260・261溝の堆積土第１層下面～第２層上面より塩釜式期新段階（辻編年Ⅲ-1･2期）の土師器と北大Ⅰ式期の土器が出土。

宮城県多賀城市　山王遺跡（多賀城市教育委員会1981）：３号遺構（土壙墓）の埋土４層以下から南小泉式期の土師器多数と後北C2-D式期新段階の土器片が出土。

福島県浪江町　本屋敷古墳群（法政大学1985）：第２号住居跡の床面から畿内庄内式新段階並行段階（辻編年Ⅰ-1期）の土師器と赤穴式期新段階に並行すると考えられる壺形土器が出土。

新潟県巻町　南赤坂遺跡（縄文文化検討会1994）：テラス遺構とその周辺から漆町８群（辻編年Ⅲ-1期）の土師器と後北C2-D式期新段階相当の土器片が出土。

以上を概観すると以下のような並行関係が想定できるが、伊治城跡、山王遺跡、南赤坂遺跡の事例については整合しておらず、事例の増加を待って再検討が必要と考えられる。

続縄文	弥生	土師器
後北C2-D式期古段階	赤穴式期古段階	
後北C2-D式期中段階	赤穴式期新段階	塩釜式期古段階（辻編年Ⅰ・Ⅱ期）
後北C2-D式期新段階		塩釜式期新段階（辻編年Ⅲ期）
北大Ⅰ式期		南小泉式期

3．アメリカ式石鏃

永福寺山遺跡からは５点のアメリカ式石鏃が採集されており、弥生終末土器であるⅡ群土器に伴うものと考えられる。アメリカ式石鏃については、石原正敏（1996）や坂本和也（1995）により出土遺跡の集成や研究がまとめられ、北は北海道江別市から西は福岡県久留米市まで全国で 200遺跡以上から出土していることがわかっている。岩手県内では永福寺山遺跡を含め23遺跡の出土例があるが、１、２点の出土が多く、採集品ではあるが５点という出土数は水沢市常磐広町遺跡の８点に次ぐものである。以下ではこれらの研究成果を基に、現存する４点のア

メリカ式石鏃（第25図1～4）について検討を行う。

坂本（1995）は、アメリカ式石鏃の刃部、基部それぞれについて、 形　態

刃部Ⅰ類：刃部が直線的で三角形を形づくるもの。

Ⅱ類：刃部が膨らみを持つもの。先端付近に肩部を有し五角形を形づくるものも含む。

基部ａ種：基部が直線的で、刃部幅と同幅かそれより外に突出するもの。

ｂ種：基部が凹形で、刃部幅と同幅かそれより外に突出するもの。

ｃ種：基部が直線又は凹形で、刃部幅より小さいもの。

と形態分類を行い、これらの組み合わせから計６タイプに分類している。これに従うと、第25図２・３がⅠ類ａ種、１・４がⅠ類ｂ種にあたると考えられ、類例の少ないⅠ類ｂ種が半数を占め、特に１は基部の凹みが大きいため一部が欠損しているほどで、形態的に珍しいものと言える。

現存するアメリカ式石鏃の全長は21.8～34.2mm、重量は1.1～1.9ｇである。石原(1996)は、 長さ・重量
アメリカ式石鏃の長さと重量の相関をグラフ化しており、それと比較すると、第25図１・２は大型、３・４は中型の範疇に入るようである。

また石材について観察すると、色調の違いはあるものの４点全てが頁岩製であり、東北中部・ 石　材
北部においては頁岩主体という傾向の中にあると言える。

４．勾玉・管玉

永福寺山遺跡では、発掘調査でトレンチから勾玉が１点（第26図3）出土し、管玉２点（第26図4,5）が表面採集されている。

このうち勾玉は、形態がＣ字形で片面穿孔、材質がメノウという特徴を持つことから、４世 勾　玉
紀末の年代が考えられる（藤沢敦氏の御教示）。勾玉の形態は、Ｃ字形からコ字形へという変遷の流れがあり、岩手県において終末期古墳等から出土している７～８世紀の勾玉はコ字形またはそれに近い形のものが多く、Ｃ字形の勾玉は古い形態のものといえる。管玉の石材は碧玉 管　玉
であり、勾玉と近い年代が考えられ、ともにⅣ群土器（塩釜式期新段階）に伴うものと考えられる。これらは古墳文化の浸透していた東北南部からの搬入品と考えられる。

５．鉄製品

永福寺山遺跡では刀子１点（水沢市教委1978、国生1978）、鎌２点（第26図1,2）の計３点の鉄製品が出土しており、いずれも土壙墓およびそれに近接するピットから出土していることから、土壙墓構築時期（塩釜式期新段階）の鉄製品と考えられるが、刀子は所在不明であるため詳細は不明である。鎌はともに直刃であるが、第26図1は一側面の上縁が刀の切先状に尖っ 鉄　鎌
ており、また第26図2は両側縁に折り返しがある。

岩手県では、東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査における資料の蓄積を背景に高橋義介

(1984) が奈良・平安時代における鉄製品の集成・分類を行っており、また近年では池田明朗・高橋千晶・佐々木千鶴子（1994）により県内の農具の集成が行われている。しかし鉄製農具の出土が多いのは奈良・平安時代であり、弥生時代～古墳時代における鉄製農具の具体的様相はわかっていなのが現状である。鉄製鎌については、弥生時代中期以降、古墳時代前期にかけ直刃鎌が使用されると言われており、5世紀になって新たに曲刃鎌が発達し、先端は鈎状に作られることから、永福寺山遺跡出土の2点の直刃鎌は確かに古い形態を持つ鉄製鎌と言えよう。県内出土の奈良時代以降の鉄製鎌は曲刃鎌が一般的で、着柄部の折り返しは刃の先端に向かって傾斜する角度が時期が下るに従って大きくなる。また、出土した鉄製鎌はともに手鎌であるが、特に第26図2は鉄板の両端を折り曲げることによって木柄に固定した「装着式手鎌」と呼ばれるタイプにあたると考えられる。

Ⅶ まとめ

永福寺山遺跡からは古墳時代初頭の土壙墓７基が検出され、土壙墓埋土およびトレンチから弥生終末土器、続縄文後期土器、古式土師器、アメリカ式石鏃、勾玉、管玉、鉄鎌、刀子が出土した。

土壙墓

土壙墓は、丘陵頂部南縁に北西－南東方向へ並列して検出され、北東－南西方向に長軸線を持っている。土壙墓の平面形は楕円形で、長軸端に袋状ピットと小ピットを対に、または両端に小ピットを持っている。土壙墓群の周囲に検出されたとされる小ピット群は大半が木根など自然の撹乱のようであるが、一部埋納施設としてのピットも存在し、鉄鎌が出土している。永福寺山遺跡検出の土壙墓はこれまで北海道の類例との共通性が指摘されてきたが、北海道から東北北部の土壙墓形態を検討したところ、北海道では縄文晩期以降、十勝茂寄式期まで円形土壙墓が主流である中で、後北C2-D式期に楕円形土壙墓が主体もしくは円形土壙墓と共存すること、東北北部では該期の円形土壙墓が確認されていないことから、楕円形土壙墓は東北北部独自の墓制である可能性がある。

土　器

土器については、弥生土器であるⅡ群土器が赤穴式期古段階、続縄文土器であるⅢ群土器が後北C2-D式期中段階、土師器であるⅣ群土器が塩釜式期新段階（辻編年Ⅲ期）に相当すると考えられる。土壙墓内出土の土器はⅢ群土器とⅣ群土器がほとんどであり、これらが共伴もしくは並行関係にあると考えられる。また、他遺跡の事例から弥生終末土器、続縄文土器、古式土師器の編年関係を以下のように想定した。

続縄文	弥生	土師器
後北C2-D式期古段階	赤穴式期古段階	
後北C2-D式期中段階	赤穴式期新段階	塩釜式期古段階（辻編年Ⅰ・Ⅱ期）
後北C2-D式期新段階		塩釜式期新段階（辻編年Ⅲ期）
北大Ⅰ式期		南小泉式期

上記の時期変遷について続縄文土器を中心に概観してみると、後北C2-D式期古段階では、札幌市Ｋ１３５遺跡のように北海道に赤穴式期古段階の弥生終末土器が北上しているのに対し、東北北部には該期の続縄文土器はほとんど見られない。後北C2-D式期中段階になると、秋田県能代市寒川Ⅱ遺跡などのように東北北部全域に続縄文土器が南下しており、同時に永福寺山遺

跡のように古式土師器も東北南部から北上している。また北海道では東北北部からの影響で、それまで円形土壙墓が主体であったものが楕円形土壙墓も作られるようになる。後北C2-D式期新段階では新潟県巻町南赤坂遺跡のように北陸地方にまで続縄文土器が南下している。北大Ⅰ式期になると、北大構内ポプラ並木東地区遺跡のように北海道にまで南小泉式土師器が北上し、一方宮城県など東北南部に北大式土器や黒曜石製石器が南下している。

このように東北北部における弥生時代終末から古墳時代初頭の変化は複雑な状況を呈しており、その変化のあり方も遺跡によって異なっている。永福寺山遺跡においては、赤穴式期古段階の弥生土器のみを所有する集団の生活域から、後北C2-D式期中段階の続縄文土器と塩釜式期新段階の土師器を所有する集団の生活域に変化し、鉄鎌・刀子を副葬して楕円形土壙墓を構築している。一方、寒川Ⅱ遺跡においては、赤穴式期新段階の弥生土器と後北C2-D式期中段階の続縄文土器を所有する集団が、それぞれの土器と鉄斧を副葬して、永福寺山遺跡に類似した楕円形土壙墓を構築している。

東北北部では、弥生時代中期には青森県田舎館村垂柳遺跡検出の整然とした水田跡が示すように、稲作農耕が発達し、土器などの地域性は強いものの、東北南部と同様に安定した農耕社会が成立していたと考えられる。その後の弥生時代後期～終末期には「天王山式系土器」と呼ばれる斉一的な弥生土器が東北全域に広がる一方、東北北部では遺跡数が減少し、丘陵地に立地が片寄る傾向がある。弥生時代後期の生業については、「沖積地での水稲農耕がこの時期に一層発達するとともに、耕地が山間部、丘陵地にもいとなまれ、農耕の内容も多様に発達したことを示唆している」（須藤1990）との考えが示されている。しかし、３世紀半ばから８世紀前半にかけては「古墳寒冷期」と呼ばれる低温・多雨の時代であった（坂口1984）ことを考えると、東北北部では気候悪化のため高乾地での畑作を中心とした雑穀栽培など粗放な農耕に頼って細々と集落が営まれていたのではないだろうか。北海道では、札幌市Ｋ１３５遺跡において花粉分析などから後北C2-D式段階でオオムギやソバ属の栽培を行っていたことが明らかとなっており、終末期弥生文化の影響で生業の変化が起きていることが指摘されている（上野1992）。弥生終末土器の北上が先行していることからも、続縄文土器が東北北部に南下する以前の段階から東北北部の人々と積極的な交流を行い、生業の転換を図ったと考えられる。

弥生時代終末から古墳時代初頭において、北海道石狩低地帯から東北北部にかけて共通の文化圏が形成されていたことは確かであろう。それは東北北部の終末期弥生文化の影響を受け、悪化した気候変化にも適応した後北文化が東北北部へ南下したためと考えられる。しかしその中においても北上川上流域の永福寺山遺跡においては確実に古墳文化を持つ人々が存在しており、東北南部との交流もあったことは確かである。該期の実態については今後の類例の増加を待ってさらに検討されるべきである。

引用・参考文献（五十音順）

（ア）

愛知県埋蔵文化財センター　1990　『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書10

会津坂下町教育委員会　1990　「中西遺跡」「宮東遺跡」「男壇遺跡」『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書16

会津坂下町教育委員会　1990　「樋渡台畑遺跡」『若宮地区遺跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書

会津坂下町教育委員会　1991　『坂下西第一地区発掘調査概報　杵が森古墳・稲荷塚遺跡』会津坂下町文化財調査報告書22

青森県教育委員会　1980　『碇ケ関村古館遺跡発掘調査報告書』

秋田県教育委員会　1984　「大岱Ⅲ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅻ』秋田県文化財調査報告書120

秋田県教育委員会　1988　「寒川Ⅱ遺跡」『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書167

秋田県教育委員会　1990　『はりま館遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書192

秋田県教育委員会　1992　「田久保下遺跡」『秋田ふるさと村建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書220

阿部朝衛　1989　「土師器からみた東北地方古墳成立期の様相」『帝京史学』4

甘粕　健・春日真実編　1994　『東日本の古墳の出現』山川出版社

池田明朗・高橋千晶・佐々木千鶴子　1994　「古代における農具の集成－岩手県の概要－」『古代における農具の変遷』

石井　淳　1994　「東北地方北部における続縄文土器の編年的考察」『筑波大学先史学・考古学研究』5

石狩町教育委員会　1975　『Ｗａｋｋａｏｉ　石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点緊急発掘調査報告書』

石狩町教育委員会　1976　『ＷａｋｋａｏｉⅡ　石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点Ｄ地区発掘調査報告書』

石巻市教育委員会　1980　『田道町遺跡　Ａ地点発掘調査概報』石巻市文化財調査報告書4

石原正敏　1996　「アメリカ式石鏃再考」『考古学と遺跡の保護　甘粕健先生退官記念論集』

伊東信雄　1974　「第５章　土師器文化」『水沢市史 1 原始－古代』

井上雅孝　1994　「ＰＩＸＥによる続縄文土器の土器胎土分析」『ＮＭＣＣ共同利用研究成果報文集』1

いわき市教育委員会　1981　『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告6

いわき市教育委員会　1982　『内宿遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告書7

いわき市教育委員会　1985　『龍門寺遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告11

岩手県教育委員会　1981　「西大畑遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅺ－（水沢地区）』岩手県文化財調査報告書60

岩手県教育委員会　1981　『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅻ－（石田遺跡）』岩手県文化財調査報告書61

岩手県立博物館　1982　『岩手の土器』

岩手県立博物館　1997　『九戸郡山形村　丹内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県立博物館調査研究報告書13

岩手考古学会　1991　『第7回岩手考古学会研究大会　発表資料』

岩手考古学会　1996　『第16回岩手考古学会研究大会　発表資料』

岩手町教育委員会　1995　『川原木遺跡発掘調査報告書』岩手町埋蔵文化財調査報告書4

岩手町教育委員会　1996　『町内遺跡発掘調査Ⅳ（大股開拓遺跡）』岩手町埋蔵文化財調査報告書5

上野秀一　1992　「北海道における天王山式系土器について」『加藤稔先生還暦記念　東北文化論のための先史学歴史学論集』

ウサクマイ遺跡調査団　1975　『烏柵舞』雄山閣

氏家和典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14

恵庭市教育委員会　1981　『柏木Ｂ遺跡』

恵庭市教育委員会　1987　『カリンバ２遺跡』

遠藤勝博・相原康二　1983　「岩手県南部（北上川中流域）における所謂第Ⅰ型式の土師器・前期土師器の内容について」『考古学論叢』

大熊町教育委員会　1980　『熊川六丁目条里遺構発掘調査報告』福島県大熊町文化財調査報告1

大沼忠春　1982　「後北式土器」『縄文土器大成 5 続縄文』講談社

奥野正男　1991　『鉄の古代史　弥生時代』白水社

奥野正男　1994　『鉄の古代史　古墳時代』白水社

小田野哲憲　1987　「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』5

小樽市教育委員会　1991　『蘭島遺跡Ｄ地点』

（カ）

加藤修司　1978　「小形器台・小形丸底坩の出現をめぐる諸問題」『物質文化』29

川西町教育委員会　1984　『天神森古墳』川西町埋蔵文化財調査報告書6

神原雄一郎　1987　「手代木沢岩陰遺跡」『龍盛』3

木村　高　1994　「東北地方－後北C2･D式土器、北大Ⅰ式土器の周辺－」『北海道考古学』30

興野義一　1983　「宮城県における黒曜石製小型円形削具と共伴して北大式土器を出土する遺跡について」『北奥古代文化』14

草間俊一　1976　「第一篇　町の歴史　第一章　先史時代」『岩手町史』

工藤研治　1994　「続縄文時代」『北海道考古学』30

見城敏子・浅井俊雄　1988　「古代赤色顔料について」『考古学雑誌』73-3
河野廣道　1958　「先史時代篇　第四章　遺物」『網走市史　上巻』
国生　尚　1978　「第三章　古代」『一関市史　第一巻通史』
国立歴史民俗博物館　1994　『蝦夷の墓－森ヶ沢遺跡発掘調査概報－』
小牛田町教育委員会　1976　『山前遺跡』
小林　克　1992　「「東北続縄文式」学説史的覚え書き」『北奥古代文化』22
小林　克　1993　「江別C2式土器の本州分布をめぐって」『先史考古学研究』4
（サ）
斎藤邦雄　1993　「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」『岩手考古学』5
(財)岩手県埋蔵文化財センター　1980　『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書13
(財)岩手県埋蔵文化財センター　1981　『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書(昭和49年度・54年度)』岩手県埋文センター文化財調査報告書16
(財)岩手県埋蔵文化財センター　1981　『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書　荒屋Ⅰ遺跡・荒屋Ⅱ遺跡・越戸Ⅱ遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書21
(財)岩手県埋蔵文化財センター　1983　『小井田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書69
(財)岩手県埋蔵文化財センター　1984　『上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書71
(財)岩手県埋蔵文化財センター　1984　『川口Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書83
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986　『堀切・竹林遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書107
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986　『沼久保遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書109
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1987　『親久保Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書116
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1992　『本宿遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書172
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1992　『上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書177
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1993　『仁沢瀬遺跡群発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書185
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1993　『上八木田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書194
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1993　『塚野Ⅰ・塚野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書199
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1994　『向館遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書206
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1995　『岩崎台地遺跡群発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書214
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1995　『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－第2次～第5次調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書225
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1995　『上八木田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書227
(財)北海道埋蔵文化財センター　1992　『恵庭市　ユカンボシＥ４遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書75
(財)北海道埋蔵文化財センター　1996　『函館市　石倉貝塚』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書109
坂口　豊　1984　「日本の先史・歴史時代の気候」『自然』39-5
坂本和也　1995　「アメリカ式石鏃考」『みちのく発掘　菅原文也先生還暦記念論集』
札幌市教育委員会　1987　「Ｔ３６１遺跡」札幌市文化財調査報告書XXIX
札幌市教育委員会　1987　「Ｋ１３５遺跡　４丁目地点・５丁目地点」札幌市文化財調査報告書XXX
佐藤信行　1976　「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』
佐藤信行　1983　「宮城県内の北海道系遺物」『北奥古代文化』14
縄文文化検討会　1994　『第５回縄文文化検討会シンポジウム「北日本続縄文文化の実像」資料集』
須賀川市教育委員会　1986　『仲ノ平古墳群』
須藤　隆　1990　「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論攷』
仙台市教育委員会　1984　「伊古田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』仙台市文化財調査報告書69
仙台市教育委員会　1984　『戸の内遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書70
仙台市教育委員会　1985　『南小泉遺跡第13次発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書81
（タ）
多賀城市教育委員会　1981　『山王・高崎遺跡発掘調査概報』多賀城市文化財調査報告書2
高橋義介　1984　「岩手県における奈良・平安時代の鉄製品について」『(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』Ⅳ
高橋昭治　1965　『岩手町遺物出土表』
高橋昭治・武田良夫　1982　「岩手県における後北式文化」『北奥古代文化』13
高橋信雄　1982　「東北地方北部の土師器と古代北海道系土器の対比」『北奥古代文化』13
高橋信雄　1987　「岩手県における末期古墳の再検討」『北奥古代文化』18
高橋信雄　1993　「東北北部の古墳文化と続縄文文化」『二十一世紀への考古学　櫻井清彦先生古稀記念論文集』
高橋與右衛門・高橋信雄　1991　「北海道の続縄文文化と東北」『北からの視点　日本考古学協会宮城・仙台大会シンポジウム資料集』
滝沢村教育委員会　1986　『湯舟沢遺跡』滝沢村文化財調査報告書2
滝沢村教育委員会　1986　『耳取遺跡』滝沢村文化財調査報告書3
滝沢村教育委員会　1987　『仏沢Ⅲ遺跡』滝沢村文化財調査報告書5
滝沢村教育委員会　1987　『高柳遺跡』滝沢村文化財調査報告書7
滝沢村教育委員会　1990　『滝沢村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』滝沢村文化財調査報告書12
滝沢村教育委員会　1991　『湯舟沢Ⅱ遺跡』滝沢村文化財調査報告書16
滝沢村教育委員会　1991　『滝沢村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』滝沢村文化財調査報告書17
滝沢村教育委員会　1993　『大石渡遺跡』滝沢村文化財調査報告書24

滝沢村教育委員会　1995　『滝沢の遺跡－滝沢村遺跡台帳－』滝沢村文化財調査報告書28
武田良夫　1978　「岩手県における弥生式土器について」『考古風土記』3
田才雅彦　1983　「北大式土器」『北奥古代文化』14
橘　善光　1982　「下北半島の古代における北海道系土器の遺跡」『北奥古代文化』13
田中　敏　1987　「福島県内における古墳時代前期土器群の様相について」『福島県立博物館紀要』1
築館町教育委員会　1992　『伊治城跡－平成３年度発掘調査報告書－』築館町文化財調査報告書5
次山　淳　1992　「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班　埋蔵文化財研究会第15周年記念論文集』
辻　秀人　1989　「東北古墳時代の画期について(その１)－中期後半の画期とその意義－」『福島県立博物館紀要』3
辻　秀人　1992　「古墳の変遷と画期」『新版　古代の日本　東北・北海道』角川書店
辻　秀人　1993　「東北南部の古墳出現期の様相」『シンポジウム２　東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
辻　秀人　1994　「東北南部における古墳出現期の土器編年－その１会津盆地－」『東北学院大学論集歴史学・地理学』26
辻　秀人　1995　「東北南部における古墳出現期の土器編年－その２－」『東北学院大学論集歴史学・地理学』27
辻秀人・菊地芳朗　1993　「会津盆地の前期古墳」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』
都出比呂志　1967　「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』13-3
堂ケ作山古墳調査団　1991　「堂ケ作山古墳Ⅰ測量調査報告　1990年発掘調査概報」
堂ケ作山古墳調査団　1992　「堂ケ作山古墳Ⅱ測量調査報告　1992年発掘調査概報」
苫小牧市教育委員会　1984　『タプコプ』
（ナ）
中村五郎　1982　「続縄紋土器編年をめぐる諸問題」『北奥古代文化』13
中村五郎　1990　「弥生土器から土師器へ」『福島考古』31
中村五郎　1992　「古式土師器・続縄紋土器編年をめぐって」『北海道考古学』28
七飯町教育委員会　1979　『聖山』
新潟市教育委員会　1986　『六地山遺跡－1982年発掘調査を中心に－』新潟市文化財調査報告書
西目町教育委員会　1987　『宮崎遺跡発掘調査報告書』
日本考古学協会編　1994　『北日本の考古学　南と北の地域性』吉川弘文館
野田村教育委員会　1987　『古館山－昭和45年三日市場遺跡発掘調査報告書（遺物編）－』野田村文化財調査報告書
野村　崇・大島秀俊　1992　「北海道余市町フゴッペ洞窟出土の土器(1)」『北海道開拓記念館調査報告』31
（ハ）
藤沢　敦　1992　「引田式再論」『歴史』79
藤沢　敦　1996　「仙台平野における古墳の変遷」『考古学と遺跡の保護　甘粕健先生退官記念論集』
福島県立博物館　1994　『企画展　会津大塚山古墳の時代』
法政大学　1985　『本屋敷古墳群の研究』
北海道大学　1987　「第Ⅱ章　ポプラ並木東地区遺跡の調査」『北大構内の遺跡 5　昭和59年度』
（マ）
松井和幸　1982　「大陸系磨製石器類の消滅とその鉄器化をめぐって」『考古学雑誌』68-2
松井和幸　1987　「日本古代の鉄製鋤先・鍬先」『考古学雑誌』72-3
松井和幸他　1991　「鉄と鉄器生産」『古墳時代の研究　第５巻　生産と流通Ⅱ』雄山閣
光井文行　1990　「岩手県にみられる古代の北海道系土器について」『(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』Ⅹ
水沢市教育委員会　1978　『高山遺跡』水沢市文化財報告書1
宮城県教育委員会　1974　「岩切鴻ノ巣遺跡」「西野田遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書35
宮城県教育委員会　1980　「留沼遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書65
宮城県教育委員会　1980　「大橋遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書71
宮城県教育委員会　1980　「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書72
宮城県教育委員会　1980　「鶴の丸遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書81
宮城県教育委員会　1981　「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書77
宮城県教育委員会　1983　「色麻古墳群」『宮城県圃場整備等関連詳細分布調査報告書(昭和57年度)』宮城県文化財調査報告書95
宮城県教育委員会　1983　『宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書96
宮城県教育委員会　1985　『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越貝塚』宮城県文化財調査報告書104
宮城県教育委員会　1992　『野田山遺跡』宮城県文化財調査報告書145
宮城県教育委員会　1992　「諏訪館前遺跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書146
宮城県教育委員会　1993　『北原遺跡』宮城県文化財調査報告書
盛岡市教育委員会　1972　『埋蔵文化財包蔵地所在地名表』
盛岡市教育委員会　1985　『盛岡市埋蔵文化財調査年報－昭和55～58年度－』
盛岡市教育委員会　1986　『盛岡市埋蔵文化財調査年報－昭和59年度－』
盛岡市教育委員会　1986　『志波城跡－昭和60年度発掘調査概報－』
盛岡市教育委員会　1987　『盛岡市埋蔵文化財調査年報－昭和60・61年度－』
盛岡市教育委員会　1989　『盛岡市埋蔵文化財調査年報－昭和62年度－』
盛岡市教育委員会　1989　『上平遺跡群　猪去館遺跡－昭和63年度発掘調査概報－』
盛岡市教育委員会　1991　『上平遺跡群　上猪去遺跡－平成2年度発掘調査概報－』
盛岡市教育委員会　1995　『繋遺跡－平成5・6年度発掘調査概報－』

盛岡市中央公民館　1972　『目で見る盛岡今と昔』
（ヤ）
安田博幸　1984　「古代赤色顔料と漆喰の材質ならびに技法の伝統に関する二三の考察」『橿原考古学研究所論集』
矢巾町教育委員会　1986　『徳田遺跡群詳細分布調査報告書－藤沢狄森古墳群の発掘調査－』矢巾町文化財報告書8
余市町教育委員会　1971　『天内山』
余市町教育委員会　1994　『1994年度　大川遺跡発掘調査概報』
米沢市教育委員会　1988　『北丘尼平遺跡』米沢市埋蔵文化財調査報告書
吉田義昭　1963　「盛岡市永福寺山遺跡発見の土器」『奥羽史談』38
吉田義昭・武田良夫　1970　「江別Ⅲ式土器の分布」『奥羽史談』55
横山英介　1985　「北海道の時代区分」『考古学研究』32-2
弥生時代研究会　1990　『「天王山式期をめぐって」の検討会　記録集』
ワッカオイ調査団　1977　『Ｗａｋｋａｏｉ Ⅲ　石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点Ｄ地区発掘調査報告書』

報告書抄録

ふりがな	えいふくじやまいせき　しょうわ40·41ねんはっくつちょうさほうこくしょ
書名	永福寺山遺跡　－昭和40・41年発掘調査報告書－
副書名	
巻次	
シリーズ名	
編著者名	津嶋知弘・神原雄一郎・黒須靖之・武田良夫ほか
編集機関	盛岡市教育委員会
所在地	〒020　岩手県盛岡市津志田14地割37-2　TEL 019-651-4111
発行年月日	1997年 3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ′″	東経 ′″	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
えいふくじやまいせき 永福寺山遺跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 やまぎし 山岸三丁目・ しもよない てらなみ 下米内字寺並	03201		39度 42分 51秒	141度 10分 34秒	第1次 19650329～ 19650402 第2次 19651105～ 19651110 第3次 19660406～ 19660411	計　400	学術調査 学術調査 学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永福寺山遺跡 第1～3次	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 1棟 陥し穴 1基 フラスコ形土壙 1基	縄文土器，石器	
		弥生～古墳時代	土壙墓 7基	弥生土器，続縄文土器，土師器，アメリカ式石鏃，勾玉，管玉，鉄鎌，刀子	
		時期不明	土壙 9基 焼土 2基		

写　真　図　版

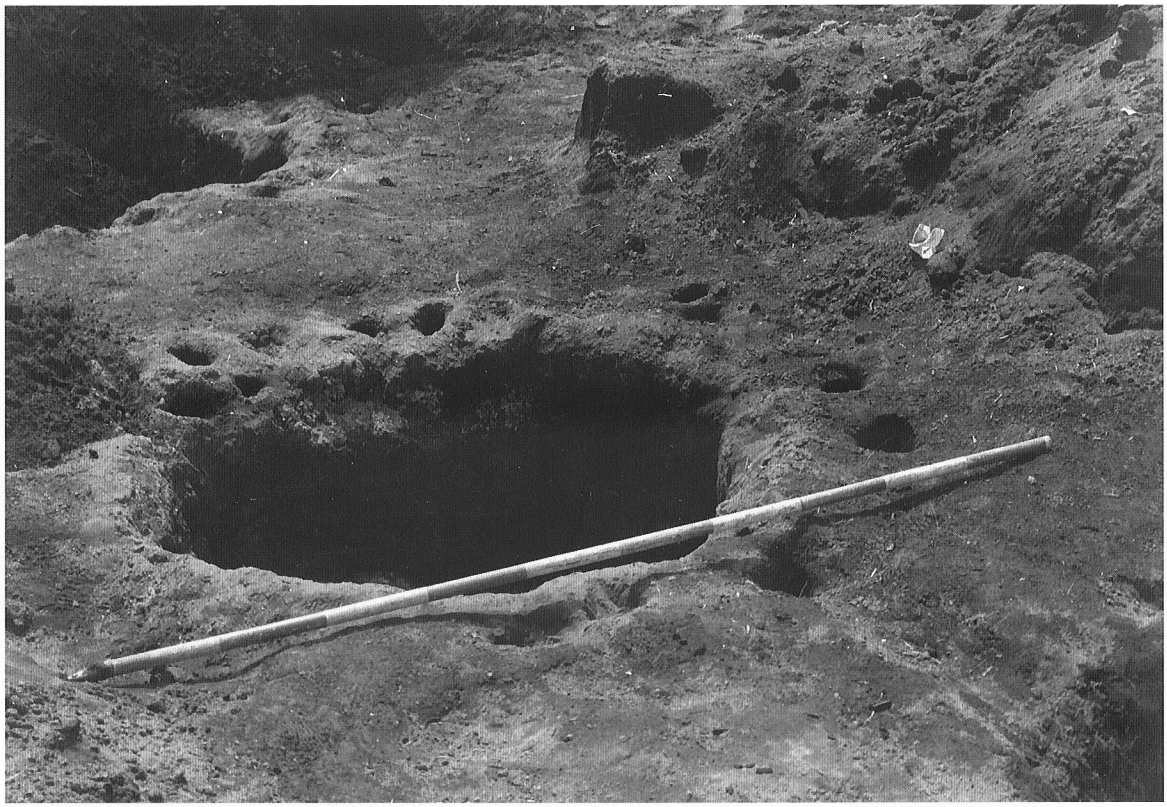


写真１　永福寺山遺跡土壙墓(1)

写真２　永福寺山遺跡土壙墓(2)

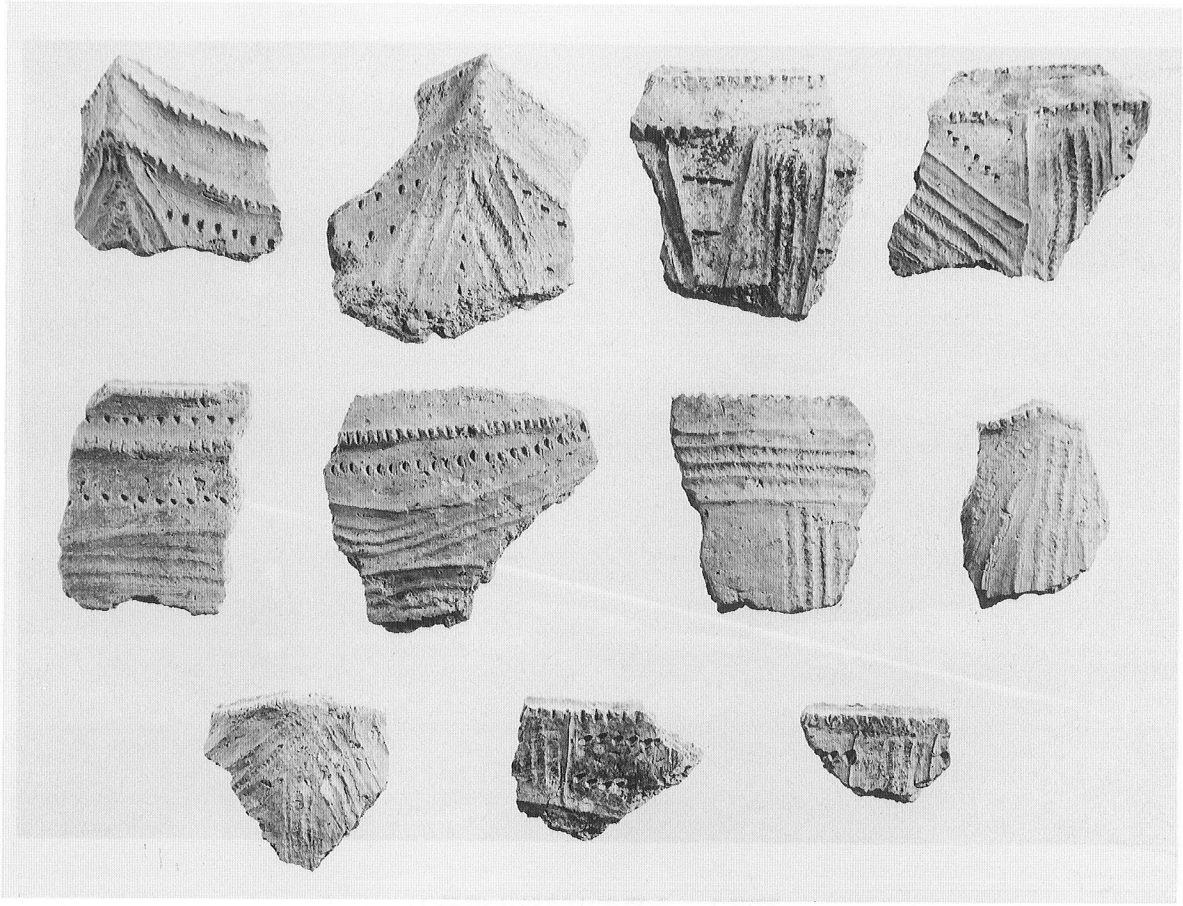


写真３　永福寺山遺跡出土続縄文土器(1)

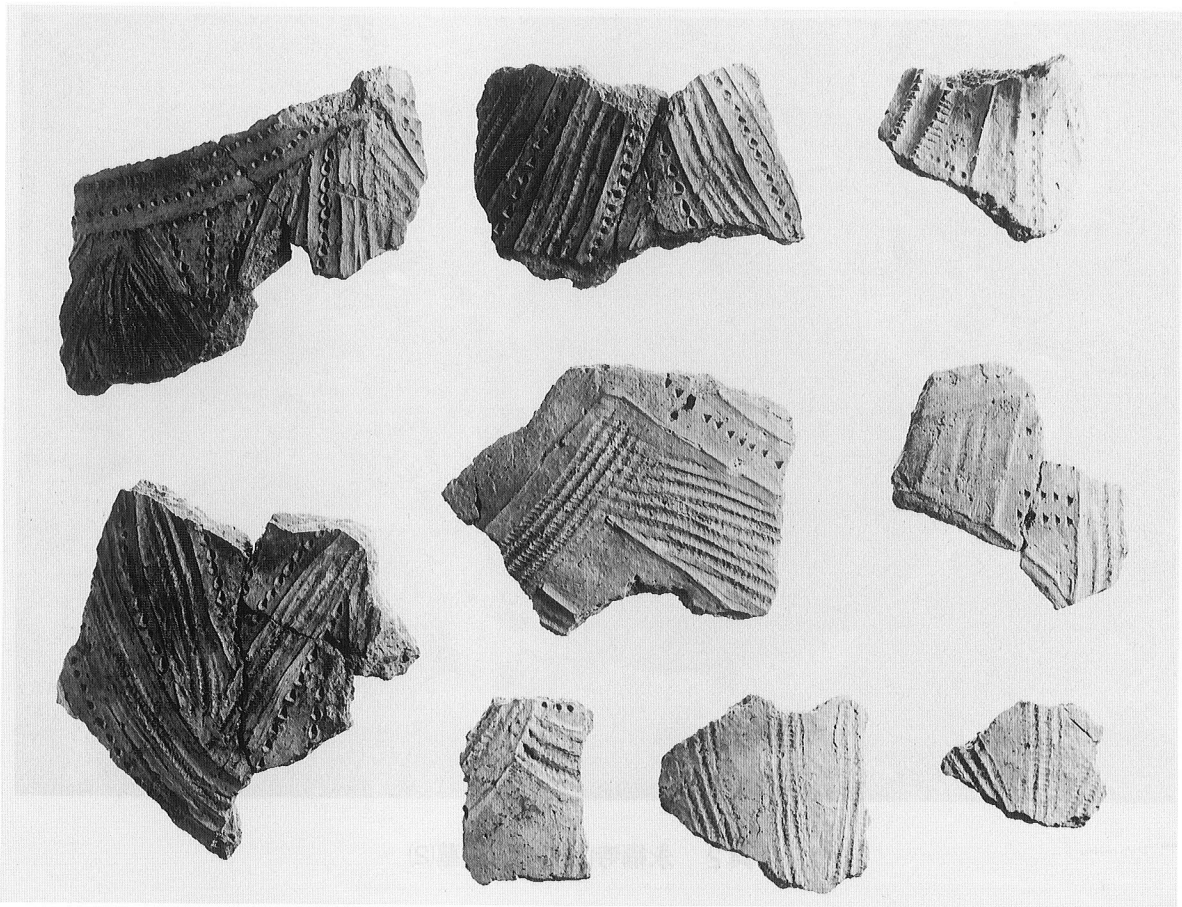


写真４　永福寺山遺跡出土続縄文土器(2)

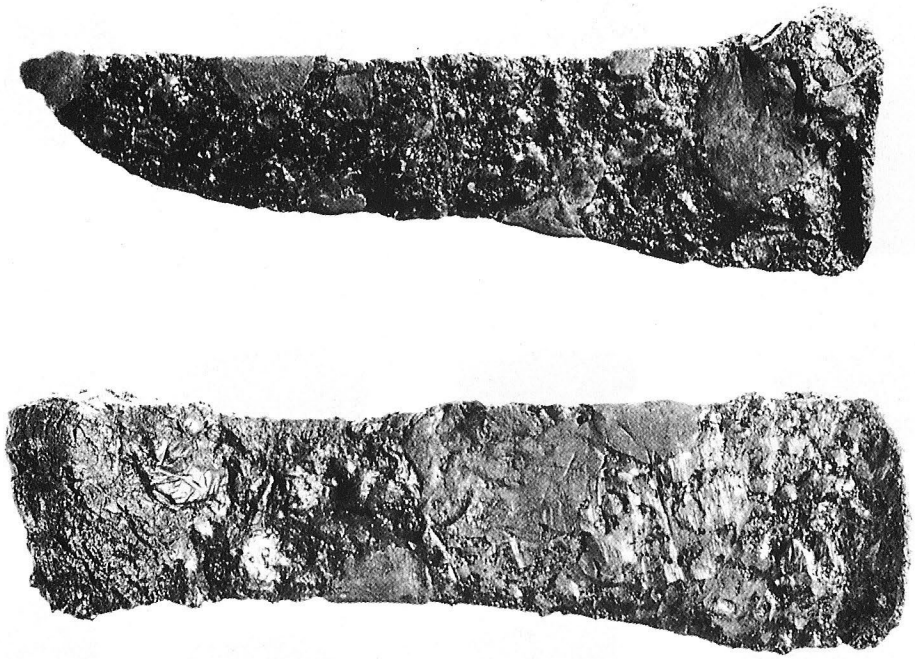


写真５　永福寺山遺跡出土鉄鎌

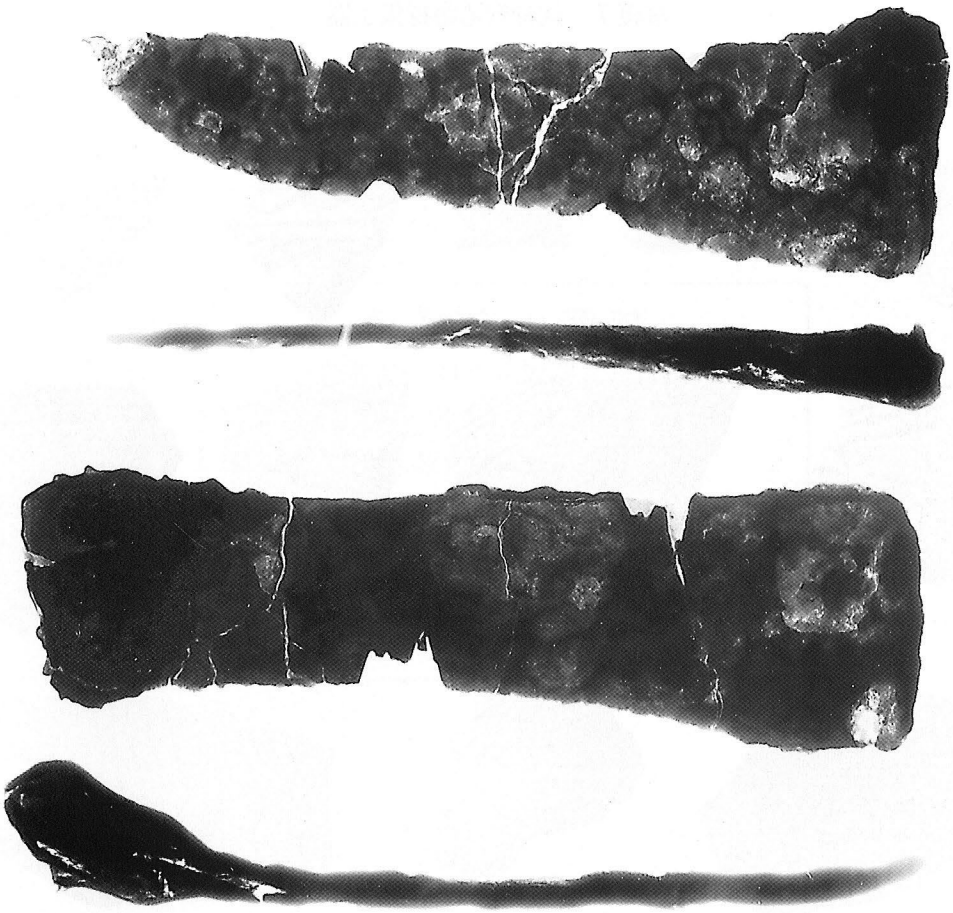


写真６　永福寺山遺跡出土鉄鎌（Ｘ線）

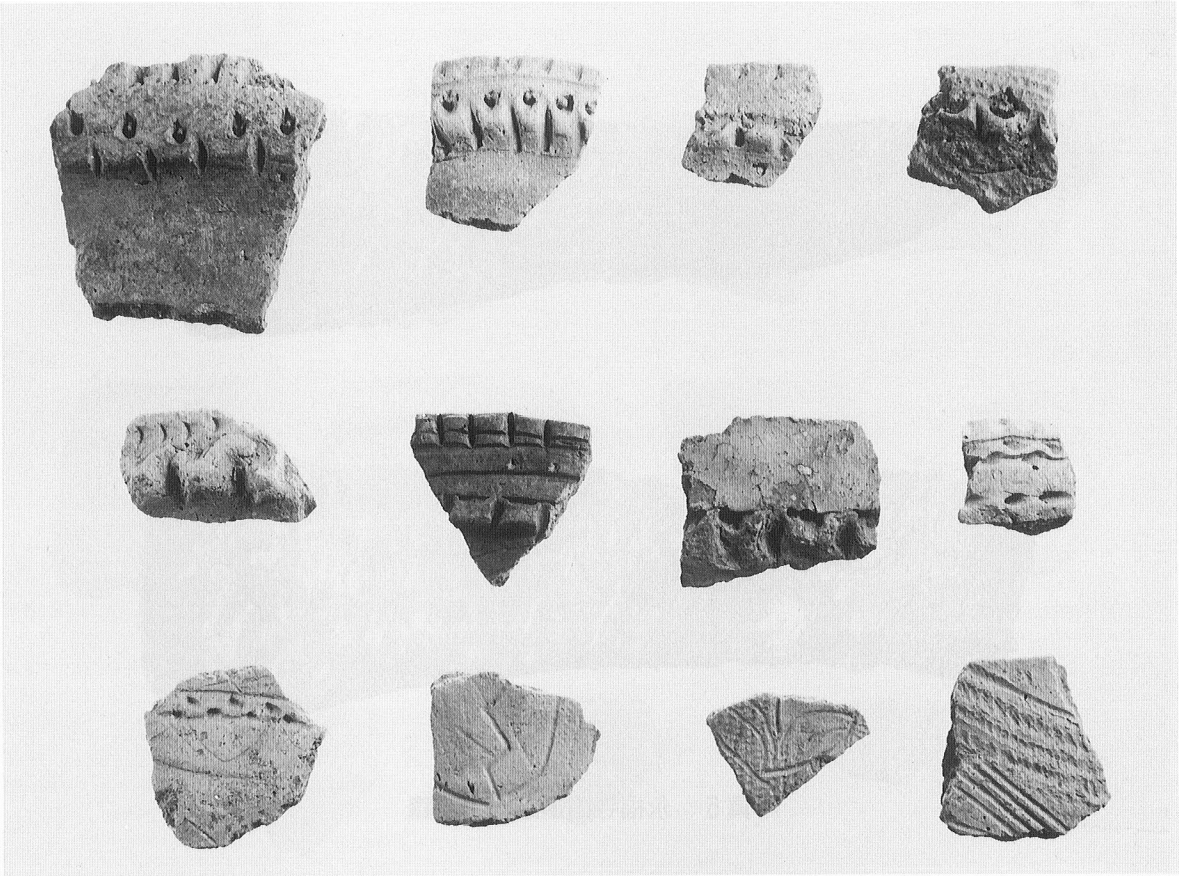


写真７　銭神沢遺跡採集土器

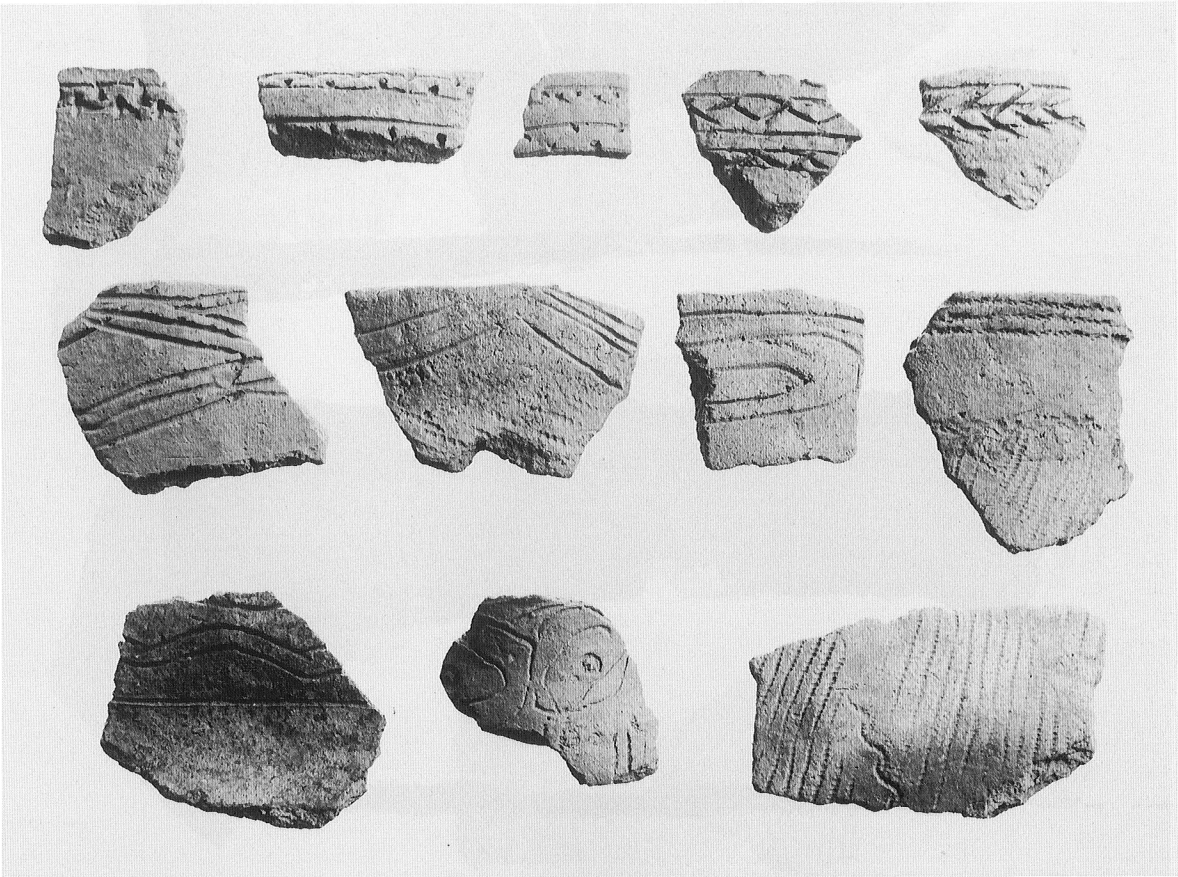


写真８　一本松遺跡採集土器

永福寺山遺跡
－昭和40・41年発掘調査報告書－
平成９年３月31日
発　行　盛岡市教育委員会
〒020　盛岡市津市田14－37－２
Tel. 019－651－4111（内線 7353）
印　刷　第一印刷有限会社
〒020-01　盛岡市みたけ４－６－40